【書式Ａ】　施設名　４館共通　処理番号　1400ABCD

中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
【年度計画】 ・Ⅰ-1-(4)-(4館共通)ア			
担当部課	東京国立博物館学芸研究部 京都国立博物館学芸部 奈良国立博物館学芸部 九州国立博物館学芸部	事業責任者	部長　救仁郷秀明 部長　尾野善裕 部長　吉澤悟 部長　河野一隆
【実績・成果】 外部資金を活用した調査研究を下記件数実施した。 （東京国立博物館） ・科学研究費補助金：11件 ・学術研究助成基金：30件 （京都国立博物館） ・科学研究費補助金：4件 ・学術研究助成基金：6件 （奈良国立博物館） ・科学研究費補助金：2件 ・学術研究助成基金：3件 （九州国立博物館） ・科学研究費補助金：4件 ・学術研究助成基金：7件			
【補足事項】 本項詳細は統計表c-⑦参照			
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 外部資金を活用した文化財に関する調査研究を行った。調査研究の実施においては、各博物館での文化財の収集・保管・展示、教育普及活動等事業と一体的に取り組み、3年度同様順調に成果を挙げている。		
【中期計画記載事項】 文化財に関する調査研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次代への継承及び我が国の文化の向上に寄与する。			
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 文化財に関する調査研究実施に際し、外部資金を獲得し活用することで、文化財の保存と活用の推進の一助とした。5年度以降も外部資金活用による調査研究の活性化を図る。		

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aｱ-1

業務実績書

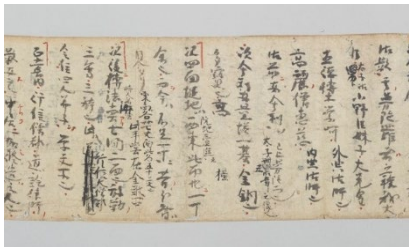
中期計画の項目	（4）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア　a.特別調査「法隆寺献納宝物」（第 42 次）

【事業概要】当館では、昭和 54 年より法隆寺献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業はすべての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長　松嶋雅人 列品管理課長　沖松健次郎

【主な成果】

4 年度は、新型コロナウイルスへの対応や、150 年記念関係の各種展示・事業に集中する関係で館内外の専門家を交えて多人数で行う調査は控え、重要文化財「古今目録抄」（N-18）を中心に、天保 13 年（1842）の江戸出開帳時の「御宝物図絵」など、各種目録、記録類中の記述に登場する献納宝物について、実際の作品の画像を対照して見られるように、情報を整備した。「古今目録抄」は既に概報で図版と翻刻を紹介しているが、宝物に関する記述と実際の宝物を対応させた一覧を作成することで、今後の調査研究の便が図られると考えられる。



重要文化財「古今目録抄」

重要文化財「舎利塔」
（「古今目録抄」に記述された宝物）

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで調査を重ね39件の調査概報を出して情報が蓄積されてきたことを踏まえ、一度それらを有機的に結びつけ視覚的に提示したことは、今後の調査研究、展示活用の上で有意義なことと考えられる。 それらを基に、概報だけでなく、東博セレクションなど一般の方が手に取りやすい形で公刊することで、資料中の記述と現存する作品とを結びつけて理解しやすくなり、文化財が伝来した歴史の意義や伝えてきた先人たちの思い、文化財保存の大切などを効果的に伝えることにつながり、教育普及の上でも意義あるものとなると考えらえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺献納宝物の調査については、袈裟、法具、僧具、香材、遊戯具、舎利塔・百万塔、筵・氈、各種錦・綾・刺繍など主に工芸作品に未調査のものが残っているが、5年度以降に行われるそれらに対する調査のための情報整備として、中期計画2年目の意義は果たせたと考える。 5年度以降は、上記の分野について順次調査を行っていく予定である。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411A ｱ-2

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア　b. 特別調査「書跡」（第 18 回）

【事業概要】

本事業は 17 年度から始まり、当館収蔵品及び寄託品にかかる書跡・典籍、古文書について、古写経、和様の書、古文書など対象テーマを設定し、1 年に 1 回ないし 2 回、当機構内の関係職員を招へいし、実施しているものである。このうち古写経の調査は、当館収蔵品について一区切りついたことから、28 年度から 3 か年、奈良国立博物館で実施した。元年度からは京都国立博物館の収蔵品を対象に実施しており、4 年度はその 2 回目である。関係職員同士で情報交換しながら、調査研究を行った。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	書跡・歴史室長　惠美千鶴子

【主な成果】

(1) 調査概要

調査実施日：11 月 1 日、2 日。調査場所：京都国立博物館地下調査室。

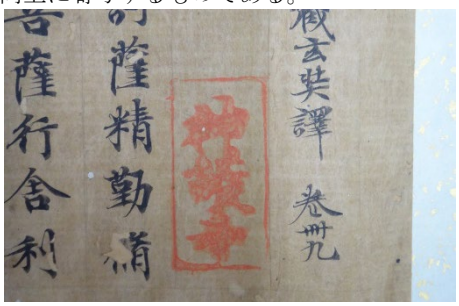
調査参加者：島谷弘幸、一瀬智、大高広和、瓜生翠、松浦晃佑（以上、九州国立博物館）、富田淳、六人部克典、惠美千鶴子、長倉絵梨子、樋笠逸人、新井恵理佳（以上、東京国立博物館）、吉川聡、橘悠太、桑田訓也（以上、奈良文化財研究所）、野尻忠、斎木涼子（以上、奈良国立博物館）、羽田聡、上杉智英（以上、京都国立博物館）、鍋島稲子、杉本一樹（以上、客員研究員）

調査内容：古写経（2 件だけ古筆）の名称、制作年代、形状、寸法、奥書等、出典、料紙などの調査を行った。

(2) 調査の成果

日本の古写経のみならず、中国、韓国、モンゴルの古写経と比較検討しながら調査を行うことで、日本の古写経の特色が浮かび上がってきた。京都国立博物館が所蔵する松本コレクションの古写経について調査を終えることができた。5 年度は京都国立博物館の上野コレクションに入る予定だが、これまでの調査結果を踏まえて、機構内の所蔵品と比較しながら研究を進め、展示・公開の向上に寄与するものである。

箱の確認作業



調査対象に捺された印の確認作業

【備考】

調査件数：古写経（松本コレクション）他計 62 件
調査日数：2 日間
調査人員：延べ 34 人
調書作成：63 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3年度は新型コロナウイルス感染状況により実施がかなわなかったが、4年度は感染予防につとめながら、コロナ禍以前と同程度の調査人員により実施することができた。前回の続きとなる京都国立博物館の松本コレクション（松本文三郎旧蔵）の古写経をほぼ全て調査し終え、その全容が把握できたとともに、調査結果により今後の展示・公開に寄与することが可能となった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は京都国立博物館における2回目の古写経調査を充分に進めることができた。5年度からは京都国立博物館の上野コレクションを調査する予定である。調査は確実に進行しており、調査を踏まえてさらなる研究を推進し、展示・公開の向上に寄与するという目標に向けて順調に進めている。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411A ｱ-5

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア　d.特別調査「絵画」（第７回）

【事業概要】

戦前の当館は宮内省所管だったこともあり、コレクションには京都御所ゆかりの作品が含まれている。創立 150 年を迎えるにあたり、当館の歴史、及びコレクションの来歴等を再検討するため、京都御所ゆかりの絵画作品を対象に調査を実施し、5 年度以降の特集展示、研究に活かすことを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長　土屋貴裕

【主な成果】

（１）調査の概要

①賢聖障子関係作品の調査

内裏紫宸殿、天皇の御座の背面に立てられた賢聖障子は中国の先賢を描いたもので、平安時代半ばには成立した。現存最古の賢聖障子は慶長度内裏のものだが（狩野孝信筆。仁和寺蔵）、当館には焼失した宝永、明暦、寛文度（狩野探幽筆）、宝永度（狩野常信筆）のものと考えられる模本、および寛政度（住吉広行筆）の下絵類が所蔵されている。これらの全体像を把握すべく、リストの作成、および作品調査を行った。

②主殿寮引継ぎ品の調査

当館には主殿寮引継として収蔵された作品がある。主殿寮は御所の調度類を管理していた部署で、奠都にともない、東京へ運ばれた屏風などが帝室博物館に移管されたものとみられる。代表的なものに国宝「檜図屏風」などがある。これら台帳上把握できる 20 数件をリストアップし、作品調査を行った。

（２）調査の成果

調査対象については、一部の著名作品についてはこれまでも展示等で活用、研究が進められてきたが、その大半はほとんど知られていない作品である。保存状態に懸念のあるものもあるが、展示等での活用の見込める作品もあることが明らかとなった。今後、さらに調査を進め、特集展示等での活用が期待される。

主殿寮引継品である「立花図屏風」（A-1067）調査の様子

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は創立150年の年であり、この周年の年にコレクションの来歴や当館の成り立ちにかかわる作品群の調査を実施した点は大きな意義が認められる。対象作品は、当館の歴史を物語作品群であり、個別の作品研究もさることながら、今後の館史研究にも寄与するところがある。加えて、従来ほとんど注目されてこなかった作品を保存状態含め改めて精査したことで、今後の展示等への活用の見込みも立った点も大きな成果として挙げられる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品調査の実施、調査研究、展示公開という見込みを立てることができた。とりわけコレクションの再評価という点では大きな意義があった。調査については、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、外部の専門家を招聘することは見送り、調査の日程及び時間についても限定して実施したが、より多角的な視野で調査研究を進めるためにも、機構内外の専門家を交えての調査は不可欠と考える。新型コロナウイルスの感染状況を慎重に見極めながら、今後の課題としたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 1411Aウ

業務実績書

中期計画の項目	（4）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ　収蔵品等の有形文化財に関する調査研究

【事業概要】

東京国立博物館所蔵の東洋絵画のうち、3 年度に本格修理が竣工した TA-694「五馬図巻」の絵画表現、題跋等付属資料、伝来、顔料・紙質・表装等の素材につき、調査研究課東洋室・工芸室、保存修復課保存修復室・調査分析室と協力して調査研究を行い、館内外での展示等のための基礎データを整備する。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室主任研究員（兼　東洋室） 植松瑞希

【主な成果】

TA-694「五馬図巻」は、長年所在不明だったが、29 年に東京国立博物館に寄贈された後、元年度から 3 年度まで本格修理が行われた。この間に蓄積された調査研究成果に加え、4 年度には下記のような追加調査を行い、その成果を『修理調査報告「五馬図巻」』、特集展示「中国書画精華」等で公開した。

・「五馬図巻」の画風、宋人による題跋等の書風につき、関連作品との比較分析を行い、その特徴を明らかにした。
・「五馬図巻」に関連する題画詩・著録等、摹本類を整理し、その伝来の過程、評価の変遷を明らかにした。
・「五馬図巻」の彩色部分につき、蛍光 X 線分析を行い、使用された顔料を明らかにした。
・「五馬図巻」の料紙につき、マイクロスコープによる観察を行い、その特徴を明らかにした。
・「五馬図巻」に使用された表装裂につき、調査を行い、その特徴を明らかにした。

『修理調査報告「五馬図巻」』表

中国書画精華展示風景

【備考】

調査完了列品件数：1 件（TA-694）
論文：植松瑞希「「五馬図巻」とその受容史」」「「五馬図巻」の修理」、大山龍顕「「五馬図巻」の料紙について」、鳥越俊行「蛍光 X 線分析による「五馬図巻」の調査結果について」、沼沢ゆかり「「五馬図巻」の表装裂について」、六人部克典「「五馬図巻」題跋の書法について」（以上『修理調査報告「五馬図巻」』東京国立博物館、10 月 24 日）
展示：日中国交正常化 50 周年　東京国立博物館 150 周年　特集　中国書画精華―宋代書画とその広がり―（東洋館 8 室、9 月 21 日～11 月 13 日）
教育普及等：1089 ブログ「特集「中国書画精華―宋代書画とその広がり―」その 2「五馬図巻」」（10 月 14 日投稿）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「五馬図巻」につき、表現様式分析、関連歴史資料の読解、素材に対する科学分析など、多角的な観点・手法による調査研究を実施し、その基礎データを整備、公開することができた。「五馬図巻」は、中国北宋時代の代表的文人画家李公麟による唯一の現存作例であり、近年まで所在不明であったことから、現在、国内外の学界における関心が非常に高い。元年度からの蓄積に、4年度の追加調査の成果を加えて、報告書及び展示の形で公開することで、今後の中国絵画史研究の動向に大きな影響を与えた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の 2 年目として、収蔵品の東洋絵画のうち、特に重要な「五馬図巻」に対して、3 年度までの達成を踏まえ、集中的に調査研究を行い、成果を公開した。本事業で採用した分析手法や公開の枠組みは、今後、東京国立博物館が所蔵する同種の重要作品に対して行う調査研究・成果公開の一つのモデルとなることが期待される。ゆえに、中期計画は順調に遂行できていると考える。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 1411Aオ

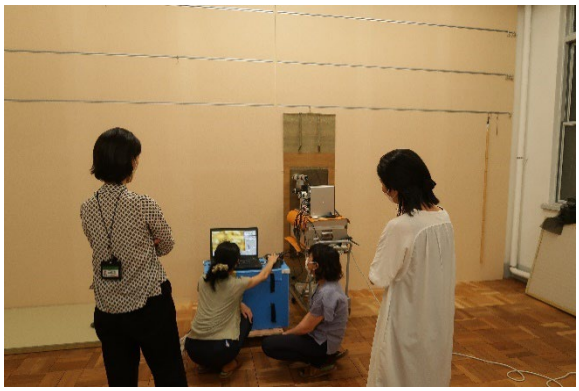
業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ　美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究

【事業概要】
東京文化財研究所と協力し、画絹（絵画の基底材に用いられた絹製品）を主な対象として、マイクロスコープを用い、経・緯の糸の太さや本数の比率、断面形状などを調査・計測し、地域や時代による特徴・傾向を抽出する。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	列品管理課長　沖松健次郎

【主な成果】
4 年度は、8 月 9～10 日、5 年 1 月 12～13 日の 2 回（計 4 日間）に渡り、東京国立博物館収蔵・寄託品のうち、下記、中国・宋時代の絵画作品の画絹 14 件の調査をし、データの整理・検討を行った。
（調査作品）TA-131 江頭泊舟図、TA-142 蓮池水禽図、TA-297 猿図、TA-298 十六羅漢図、TA-339 山水図、TA-341 竹鶏図、TA-342 竹虫図、TA-344 山水図、TA-355 雛雀図、TA-487 唐絵手鑑筆耕園、TA-489 竹塘宿雁図、TA-633 梅花双雀図、TA-643 雪中花鳥図、茉莉花図（寄託品、常盤山文庫蔵）
また、成果公開として、東京国立博物館の研究情報アーカイブズにおけるデータベース公開等の準備を進めた。プロジェクト参加メンバーにより、データベースの仕様等につき協議し、サンプルデータを整理、博物館情報課と協力し、テストページを作成、その内容について検討を重ねた。



8 月 10 日調査風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3年度に引き続き、中国・宋時代の絵画作品を集中的に調査することで、当該地域・時代の画絹に見られる特徴・傾向に対する理解が大きく進展した。中国・宋時代は、東洋絵画史において特に重視される地域・時代であり、今後、別の地域・時代の画絹についての調査を進める上でも、重要な比較対象となる。 また、近年注目を集めている画絹のデータを、出版物でなくデータベース上で公開するのは、これまでにない試みであり、学界に大きな影響を及ぼすことが期待される。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3 年度の成果を活かし、中期計画の 2 年目として、中国・宋時代の画絹の調査結果を蓄積することができた。 また、中期計画期間内における、成果公開（研究情報アーカイブズにおけるデータベース公開等）のロードマップを作り、具体的な準備作業に着手することができた。よって、中期計画は順調に遂行できていると考える。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aカ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ　東洋民族に関する調査研究

【事業概要】
東京国立博物館が所蔵する約 3,500 件の東洋民族列品を対象として調査研究を行い、展示を充実させる。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室長 猪熊兼樹

【主な成果】
(1) 調査概要
韓国の景福宮、雲峴宮、司憲府遺跡、国立中央博物館、国立古宮博物館、国立民俗博物館、公平都市遺跡展示館、普信閣（以上ソウル）、広寒楼（南原）、国立大邱博物館、大邱薬令市韓医薬博物館（以上大邱）にて朝鮮王朝の宮廷工芸の用途・分類および韓国の伝統生活文化に関する調査を行った。
(2) 調査の結果得られた知見
・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特に朝鮮王朝の宮廷の調度・服飾の分類や展示活用に資する知見を得た。
・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特に韓国の伝統的な生活習俗のなかで用いる工芸品の分類や展示活用に資する知見を得た。
(3) 調査研究の成果
・ソウルには朝鮮王朝の宮廷の宮殿・調度・服飾を公開・展示する施設がある。ソウル・南原・大邱には韓国の伝統的な建築・器物・衣服などを公開・展示する施設がある。これらの施設を訪問・調査し、当館が所蔵する東洋民族列品のうち特に朝鮮王朝の宮廷工芸や韓国の民俗資料に関する有意義な知見を得ることができた。その成果は今後の平常展あるいは特集陳列における展示の参考とする。

国立民俗博物館の建築・器物の展示

大邱薬令市韓医薬博物館の展示

【備考】
調査日程：韓国（ソウル、南原、大邱）5 年 2 月 5 日～2 月 11 日

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	元年度の韓国の調査に引き続き、韓国の宮廷・博物館・史跡などの調査を行うことで、東洋民族列品のうち朝鮮半島関係資料に関する基礎的な情報を充実させた。 当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特に朝鮮王朝の宮廷工芸の分類や展示活用に資する知見を得た。 また、韓国の伝統的な生活習俗のなかで用いる工芸品の分類や展示活用に資する知見も得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館が所蔵する東洋民族列品については、中国資料・韓国資料・東南アジア資料・南洋資料・台湾先住民族資料などから構成されている。これらの資料は、東洋館の平常展および特集陳列などにおいて展示活用が期待されるため、その分類整理を進めている。 従来、ほとんど展示活用されていなかった東洋民族列品については、東洋館リニューアル以降、東洋館の平常展示「アジアの民族文化」や特集陳列などで展示活用されており、展示内容が着実に充実してきている。 以上のことから、中期計画の 2 年目として中期計画を順調に遂行できているといえる。 5 年度以降は、韓国の宮廷工芸・伝統文化に関する調査を継続するとともに、平常展示「アジアの民族文化」における台湾先住民族資料の資料の調査にも取り組みたい。 28年度以降、当館の東洋民族資料にちなんだアジア各地の調査を継続しており、着実に資料の分類整理と展示活用が進んでいるので、引き続き、この調査を行っていく。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aキ-1

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ　特集「東京国立博物館の近世仏画―伝統と変奏―」に関連する調査研究

【事業概要】

4年度に実施した特集「東京国立博物館の近世仏画―伝統と変奏―」（本館特別1・2室）は、総合文化展の展示体系と異なるため、展示の機会が少ない江戸時代に制作された仏画を紹介することを目的に企画された。本特集準備のため、3年度に実施した特別調査「絵画」第6回の実績を踏まえ、プロジェクトメンバーである沖松・土屋とともに所蔵する近世仏画の調査を継続して行った。本特集はこれらの調査研究の成果と位置づけられる。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	平常展調整室研究員　古川攝一

【主な成果】

(1)美術史的位置づけの考察を行った

これまで仏画分野の展示や調査研究は、古代・中世の作例が中心であり、近世仏画についての調査研究は積極的になされてこなかった。そのような状況で、展示に適した作品を選定するため、作品の鑑賞性、美術史的位置づけ、保存状態を軸に近世仏画を調査できた点は、所蔵する近世仏画の全体像を把握し、考察する意義深い機会となった。

(2)展示に適した措置を行った

調査研究の成果を踏まえ、展示に適う作品を選定したが、画面に折れや浮き、絵具の剥落といった損傷、表装の繕いが必要な作例が見られたため、館内の技術者による修復処置を施した。とりわけ、A-743「五百羅漢図」（狩野一信筆）の表装部分の補修ができたことは、今後の展示活用に意義あるものとなると考えられる。

本館特別1室 展示風景

本館特別2室 展示風景

【備考】

特集「東京国立博物館の近世仏画―伝統と変奏―」（4月5日～5月29日）総出品数：22件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵の近世仏画について基礎的な調査研究を行い、美術史的な位置づけを考察したことは、所蔵する仏教絵画研究の幅を広げることになった。さらに、適切な保存修復処置は、今後の調査研究、展示活動を行う上で有意義なものとなった。 古代・中世の作例と比較して、近世仏画は図像や表現技法について古代・中世以来の伝統を基本的には継承しているものの、一部に注文者や鑑賞者、制作者の意向を反映した改変が認められた。さらに、描いた作者や制作にかかわった人物が判明する作例が多く、個々の作例の制作背景、作者による作風の違いや個人様式の検証が今後の課題である。5年度以降は、館外に所蔵される同一作者の作例も視野に入れつつ、近世仏画の調査研究を進めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵の近世仏画について基礎的な調査研究を行い、古代・中世の仏画と異なる図像や表現技法、古代・中世の作例よりも豊富な制作に関わる情報という、近世仏画を考察する二つの着眼点を明確にすることができ、中期計画2年目の計画を着実に実施できた。 5年度以降は館外に所蔵される作例も視野に入れつつ、調査を継続していく。その際、より多角的な視野で調査研究を進めるためにも、機構内外の専門家を交えての調査は不可欠と考える。新型コロナウイルスの感染状況を慎重に見極めながら、この点も今後の課題としていきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 1411Aキ-2

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ　創立 150 年記念特集「収蔵品でたどる日本仏像史」に関連する調査研究

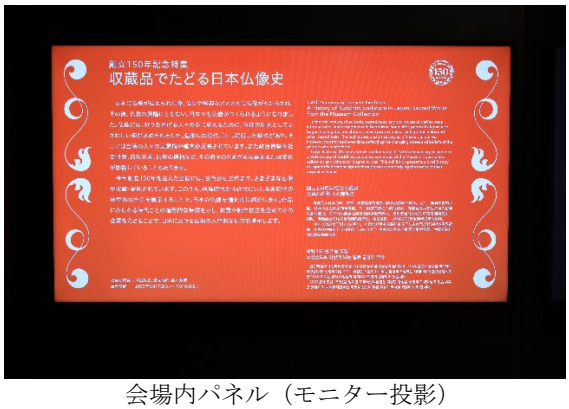
【事業概要】
館蔵及び寄託の彫刻作品のうち、各時代の特色が反映された作品を時代順に展示し、日本の仏像を通史的に紹介した。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課平常展調整室 研究員　増田政史

【主な成果】
(1) 実施概要
・作品選定のための調査を実施した。
・開催期間及び開催場所；5 月 16 日～7 月 10 日　本館 14 室
・担当者：増田政史（同上）、浅見龍介（学芸企画部長）、西木政統（学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室研究員）

(2) 主な内容
・飛鳥時代から近代にいたる各時代の特徴が表れている彫刻作品、特に銘文などにより制作年が判明している基準作例を中心に選定し、15 件を展示した。
・各時代（飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、安土桃山時代、江戸時代、近代）ごとに会場内パネルを設置し、それぞれの社会状況や政治背景を説明した上で、それが仏像の作風とどのように結びついているかわかりやすく解説し、展示をより深く理解できる工夫を行った。

展示会場風景（本館 14 室）



会場内パネル（モニター投影）

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	飛鳥時代から近代までの各時代の作品を展示することで、仏像について初心者の観覧者に対して日本の仏像の通史を紹介することができた。また、日本の仏像のほとんどは寺社に伝わっているが、明治時代以降、神仏分離令などの影響によって寺社から離れた仏像・神像は博物館に収蔵されるようになり、その代表が当館であった。当館の彫刻作品を中心に各時代の作品を展示することで、当館の創立150年の節目である本年に、当館の彫刻コレクションの形成の歴史も示すことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の 2 年目である 4 年度に、収蔵品の調査研究を通じて、特定の分野を通史的に紹介するというモデルケースを構築することができた。5 年度以降も継続して、館蔵品・寄託品の調査研究を実施して情報及び画像データの収集に努め、今回のような通史だけではなく、時代ごと、ジャンルごとといったテーマ性をもった展示も実施していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aキ-3

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ　創立 150 年記念特集「チベット仏教の美術―皇帝も愛した神秘の美―」に関連する調査研究

【事業概要】
創立 150 周年を記念して、特集「チベット仏教の美術―皇帝も愛した神秘の美―」の開催を目的として、絵画・書跡・彫刻・工芸の各分野において、チベット仏教関連資料について調査を行う。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課主任研究員 西木政統

【主な成果】
(1) 実施概要
・事前調査及び撮影：4 月 12 日、26 日、5 月 23 日、6 月 17 日、27 日、7 月 5 日、14 日
・プロジェクト担当者：西木政統（同上）、猪熊兼樹（特別展室長）、植松瑞希（絵画・彫刻室主任研究員）、三田覚之（奈良国立博物館主任研究員）、田中公明（客員研究員　公益財団法人東方学院）
(2) 主な内容
・絵画・書跡・彫刻・工芸の各分野において、チベット仏教に関係する資料を抽出し、必要に応じて実地調査を行った。その上で、チベット仏教の特色や歴史を表わす作品を選定し、並びに日本人として初めてチベットを旅した僧河口慧海の旧蔵品も再調査のうえ、特徴的な作品を選び、63 件を出品作として確定した。
・その成果は特集「チベット仏教の美術―皇帝も愛した神秘の美―」（会期 7 月 26 日～9 月 19 日　於平成館企画展示室）にて公開した。当館のチベット仏教関係資料には中国・清時代の作品が多く含まれるため、日中国交正常化 50 周年記念特別デジタル展「故宮の世界」（会期 7 月 26 日～9 月 19 日、於平成館）と同時開催とした。
・代表的な作品を掲載したリーフレット（8 頁）を発行し無料配布するとともに、公式サイトで PDF を公開した。
・オンラインギャラリートーク（【オンラインギャラリートーク】8 月「知られざるチベット仏教の美術」）を製作し、YouTube の公式チャンネル上で公開した。

展示風景

リーフレット

オンラインギャラリートーク

【備考】
・西木政統（執筆）東京国立博物館編集『創立 150 年記念特集　チベット仏教の美術―皇帝も愛した神秘の美―』東京国立博物館、7 月 26 日

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館には多分野にわたってチベット仏教関係資料が収蔵されてきたが、これまでは公開の機会に恵まれず、総合的に展示を行うのは東洋館開館30周年記念特集である「河口慧海将来品とラマ教美術」（平成11年1月5日～3月14日）以来、約20年ぶりとなった。平成29年以来進めてきた客員研究員との調査成果も反映しつつ、リーフレットの配布、ギャラリートークの配信など、多角的な情報発信を心がけ、チベット仏教関係資料への理解を深めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映できたことにより、中期計画を遂行できている。今後もチベット仏教関係資料の調査研究を継続しつつ、多角的な情報発信を心掛けたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aキ-4

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ　創立 150 年記念特集「東京国立博物館の模写・模造―草創期の展示と研究―」に関連する調査研究

【事業概要】

4 年度は当館創立 150 年の周年にあたる。これにちなみ、戦前期の当館が実施してきた模写・模造事業を振り返るため、館蔵の模写・模造作品の調査研究を進め、これらの成果を創立 150 年記念特集「東京国立博物館の模写・模造―草創期の展示と研究―」で公開することを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長　土屋貴裕

【主な成果】

(1)調査の概要

当館には多くの模写・模造作品が数多く所蔵されている。本調査では以下の 3 点に絞って調査を実施した。

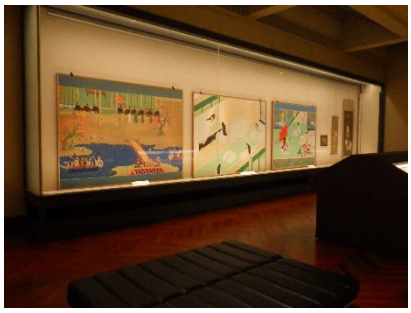
① 博物館の創立にかかわって収集・作成された模写・模造作品
② 帝国博物館時代（1889～1900）に作成された模写・模造作品
③ 帝室博物館時代（1900～1947）に作成された模写・模造作品

対象となる作品は絵画、書跡を中心に、彫刻、金工、漆工、染織、考古、歴史資料と他分野にわたった。これらの作品につき、原本・原品との比較による模写・模造制作のコンセプト、作り手の思想や時代背景、そして館史資料等も活用した制作時の社会状況や博物館に求められた役割について探究した。

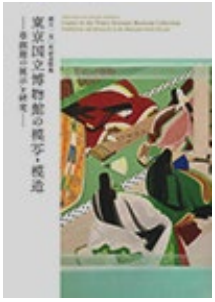
(2)調査の成果

調査研究を進めた作品は数多くあるが、これらを精選し、創立 150 年記念特集「東京国立博物館の模写・模造―草創期の展示と研究―」で展示した。会期は 9 月 6 日～10 月 30 日、前後期の展示替により総件数 96 件を展示した。また、同名の図録を刊行するとともに（120 ページ）、9 月 10 日には月例講演会を開催し、プロジェクトメンバーである土屋、古川攝一、恵美千鶴子、猪熊兼樹、福島修、皿井舞（学習院大学文学部教授。当館客員研究員）が成果公表を行った。

先徳図像（模本）（A-8426）阿部務模
昭和 5 年(1930)　調査の様子



展示風景（特別 2 室）



特集図録表紙

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	創立150年にあたり、館の歴史と深くかかわる模写・模造作品を集中的に、かつ分野横断的に調査を進めることができた。館史資料と当該作品の位置付けに関する検討や、原本・原品との比較による作品そのものの技法・材料の考察により、従来「コピー」としてあまり評価されてこなかった模写・模造作品の位置付けをすることができた。今日の展示の枠組みではほとんど活用されてこなかった作品を数多く公開できたことも大きな成果の一つである。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品調査の実施、調査研究、展示公開という流れに沿ったプロジェクトを進めることができた。ただし、今回調査しえたもののほかにも、当館にはまだ多くの模写・模造作品が収蔵されている。外部有識者の助力も得て進めていきたいが、新型コロナウイルス感染拡大防止の問題ともかかわって、これらのさらなる調査研究については今後の課題としたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 1411Aキ-5

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ　創立 150 年記念特集「再発見！大谷探検隊とたどる古代裂の旅」に関連する調査研究

【事業概要】

当館が所蔵する、大谷探検隊招来の中央アジア出土染織資料は詳細な調査が実施されておらず、また展示の機会も極めて少なかった。しかし、裂を挟んだガラス面には、現在の中国甘粛省敦煌や新疆ウイグル自治区トルファンなど、出土地を記した付箋がつけられたものもあり、オアシス都市の染織文化を伝える貴重な資料群である。本事業ではコレクションの悉皆調査を行い、その上で大谷探検隊招来裂の魅力と価値を紹介する特集展示を東洋館 5 室にて行った。なお、本特集は創立 150 周年記念事業、「博物館でアジアの旅　アジア大発見！」にも連携している。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室 研究員　沼沢ゆかり

【主な成果】

(1) 実施概要

・3 年 6 月～4 年 3 月の間に 13 回、後述する当館所蔵品の悉皆調査を行った。(調査担当者：小山弓弦葉（学芸研究部調査研究課工芸室長)、沼沢ゆかり（学芸研究部保存修復課保存修復室研究員)、廣谷妃夏（学芸研究部列品管理課登録室アソシエイトフェロー)、小笠原小枝（東京国立博物館客員研究員))

・調査結果をもとに展示を企画し、東洋館 5 室にて 9 月 21 日（水）～12 月 4 日（日）に特集展示を行った。

(2) 調査・展示内容

・TI-505,506「敦煌及吐魯番等出土裂」、TI-397「刺繍如来立像・唐草文断片」、TI-398「描絵裂」の調査を行い、技法・素材などの詳細を明らかにし、組織拡大を含む記録撮影を行い、内容を protoDB にも反映した（計 218 件)。

・調査結果より、これらが 1910 年～1914 年の吉川小一郎、橘瑞超による第三次探検隊による収集品であることを明らかにした。また、中国・旅順博物館、フランス・ギメ東洋美術館、大英博物館所蔵作品及び香川黙識『西域考古図譜』(1915 年)との比較を行い、裂の本来の姿・用途及びコレクションの収蔵経緯について考察した。

・上記の成果をもとに展示内容を検討し、大谷探検隊の旅路をたどりながら、各作品の詳細を伝える構成とした。パネル、リーフレット（オンライン公開を含む）も作成し、来館者に裂の鑑賞のポイントを伝えた。教育講座室とも連携し、オンラインギャラリートークを作成し、東京国立博物館 YouTube で公開した。

展示風景

チラシ

YouTube 動画画面

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	悉皆調査により、初めて作品の詳細を明らかにすることができ、当館コレクションの特徴について分析することができた。また、他機関所蔵の類例や『西域考古図譜』と比較することで、トルファン出土裂については被葬者との関連性、敦煌発見裂については荘厳具としての当初の姿を推測するに至った。 展示においてはパネル、リーフレットを作成し、題箋に掲載しきれなかった情報を補完することで、裂の鑑賞方法をわかりやすく来館者に提示することができた。追って公開された動画は、さらにこれを補う内容であり、インターネット上で本事業の成果と教育普及事業を恒久的に残すことができている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館において大谷探検隊将来裂を主軸とした展示は初の試みであり、調査を通し、初めてコレクション全体像を明らかにすることができた。加えて、詳細なリーフレット、動画など教育普及にも努めており、この点において本事業は中期計画に沿った取り組みであったといえる。調査研究の観点では、本事業を基礎とし、今後、他機関所蔵作品の調査も視野に入れることで、館内のみならず大谷探検隊将来裂の研究全体を促進することができると考えられる。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aキ-6

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ　創立 150 年記念特集「東京国立博物館のイスラーム陶器」に関連する調査研究

【事業概要】
当館所蔵のイスラーム陶器のコレクションの悉皆調査及び成果発表としての特集展示の企画。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部出版企画室　三笠景子

【主な成果】
(1)調査概要
・3 年度寄贈品 31 件が新たに加わったイスラーム陶器コレクションの悉皆調査を行った。
(2)調査で得られた知見
・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の神田惟氏の教示により、最新の研究成果に基づき、生産地や生産年代の特定が可能となった。また、当館コレクションの来歴から、日本国内のコレクションのなかでも収集の草創期、1920～30 年代収蔵の作品が含まれていることが改めて判明した。
(3)調査成果
・最新の研究を反映した調査成果として、東洋館 5 室において「東京国立博物館のイスラーム陶器」の特集を行い、これに関連してリーフレットを制作した。また、国内のイスラーム陶器コレクションの調査として、石洞美術館所蔵品の調査、愛知県陶磁美術館所蔵品（5 年 3 月 8～9 日　同行：神田惟氏、当館客員研究員佐藤サアラ氏）の調査を行った。

TG-1219
多彩鳥形手付瓶

TG-622
青緑釉黒彩鉢

TG-3067
ラスター彩騎馬人物文壺

【備考】
当館所蔵品調査点数：約 40 点
東洋館 5 室特集「東京国立博物館のイスラーム陶器」(10 月 4 日～5 年 1 月 22 日)
石洞美術館所蔵品調査点数：24 点
愛知県陶磁美術館所蔵品調査点数：約 30 点

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究はこれまで総括的に展示を行ったことのなかった当館のイスラーム陶器のコレクションについて、海外における最新の研究成果を反映して、調査整理を行い、その成果として特集というかたちで時代を追って公開することができた。日本におけるイスラーム陶器コレクションの先駆をなす作品が含まれており、陶磁器研究、またイスラーム文化の日本受容の側面で学術的な意義も高いものと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画2年目として4年度に開催した特集展示にて示した調査成果を受けて、5年度以降も東洋館3室及び5室等において充実した展示を行うことができると考える。さらに5年度以降は、イスラーム陶器の成立と展開に影響を与えたガラスにも調査の範囲を広げていきたい。また、国内所蔵のコレクションの調査も継続して行う予定である。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aキ-7

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ　創立 150 年記念特集「王羲之と蘭亭序」に関連する調査研究

【事業概要】

当館創立 150 周年、日中国交正常化 50 周年にあたる 4 年度に、日中で文人の憧憬の対象となった、王羲之の書法や蘭亭修禊をはじめとする雅集などに関連する書画等の作品を調査研究し、特集展示を開催して、日中に通底する文人文化を紹介する。本事業における特集展示は、当館と台東区立書道博物館の連携事業の一環として実施する連携企画展示とする。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課東洋室研究員 六人部克典

【主な成果】

(1) 実施概要

・開催期間及び開催場所：5 年 1 月 31 日～4 月 23 日　東洋館 8 室

・担当者：六人部克典（同上）、植松瑞希（学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室主任研究員）、富田淳（副館長）、猪熊兼樹（学芸企画部企画課特別展室長）

(2) 主な内容

・当館担当者と台東区立書道博物館担当者（鍋島稲子氏、中村信宏氏、春田賢次朗氏）が連携を図り、本事業の関係作品について調査研究を実施して、画像及び資料情報を収集、整理した。

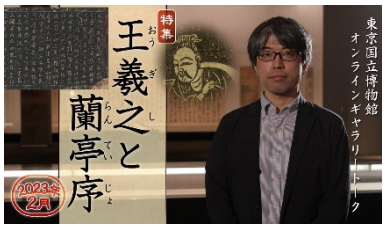
・当館では、関連する東洋書跡、東洋絵画等 115 件を選定し、「王羲之書法の伝統」「蘭亭序とその文化」「さまざまな雅集の故事」「山水画中の文人交流」の 4 章構成により展示した。

・両館の展示作品のうち、主要作品 100 件を掲載した関連図録（128 頁）において、当館担当者が執筆、編集協力を行った。

・両館担当者が連携し、月例講演会／連携講演会（2 月 25 日、平成館大講堂）及びオンラインギャラリートーク、1089 ブログにおいて本事業の成果を発信した。

展示風景

関連図録



オンラインギャラリートーク

1089 ブログ

【備考】

・台東区立書道博物館編集・東京国立博物館編集協力『連携企画 20 周年　王羲之と蘭亭序』公益財団法人台東区芸術文化財団、5 年 1 月 31 日

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「蘭亭序」をはじめとする王羲之の書法は、従来、中国書法史における重要な研究テーマとされてきたが、文人の憧憬の対象として位置づけ、その他の雅集など、文人文化に関連する書画等の作品と合わせて研究及び展示をされることが少なかった。本事業における調査研究により、当館の所蔵品及び寄託品における関連作品について情報を整理することができた。また、特集展示を通して主要な作品を公開し、関連図録、講演会、ギャラリートーク、ブログ等により、調査研究の成果を社会一般に発信することができた。台東区立書道博物館との連携事業という点では、両館が同時期に同一テーマで開催する連携企画展示の第20回（連携企画20周年）として、継続的に実施し、中国書画に関する研究成果を蓄積することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中国書画分野の文化財に関する基礎的な情報整理など調査研究の成果を蓄積し、展覧事業・教育普及活動等を通して社会一般に発信し、中期計画を遂行できている。今後も所蔵品・寄託品を主として調査研究を継続し、その成果をわかりやすい形で広く発信したい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aキ-8

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ　創立 150 年記念特集「コレクションの探求　はにわ展から 50 年」に関連する調査研究

【事業概要】
当館所蔵の埴輪コレクションの過去 50 年間の調査研究、修理など多角的に振り返る特集展示の企画。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部特別展室　河野正訓

【主な成果】

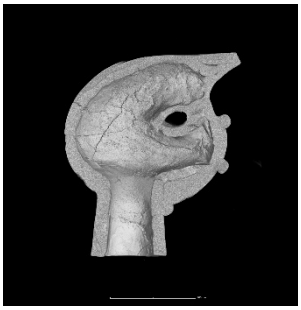
(1) 調査概要
特別展観「はにわ」(1973 年開催)から 50 年間に当館の埴輪コレクションで行われた調査研究、修理、文化財指定業務などの過去の記録や、論文・書籍で公表された成果を調査した。

(2) 調査で得られた知見
埴輪コレクションの中で、この 50 年の間で出土地が明確になったもの、出土品の性格が変わったものがあることがわかった。また、X 線 CT 撮影や三次元計測の導入により、調査研究のほかに修理や模造製作における飛躍的な発展が得られたことが判明した。また、版画家の斎藤清が、当館の埴輪コレクションを題材にして、積極的に埴輪の版画を発表したことが、近年美術史の分野から再評価されていることを知りえた。

(3) 調査成果
調査で得られた知見をもとに、平成館企画展示室について「コレクションの探求　はにわ展から 50 年」の特集を行い、これに関連してリーフレットを制作した。また、オンラインギャラリートークも行った。

展示室風景

リーフレット



鞆形埴輪の X 線 CT 画像

【備考】
平成館企画展示室　特集「コレクションの探求　はにわ展から 50 年」(5 年 2 月 28 日～4 月 9 日)
出品件数：26 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究はこれまで東京国立博物館が所蔵する埴輪コレクションの調査研究や修理など多角的な成果を振り返り、整理することで、特集という形で公開することができた。150周年記念特集にふさわしい内容で、学術的のみならず館の事業を普及公開するという側面からも意義が高いものであったと考える。 今後50年後における調査研究等を計画する指針としても、本研究は位置づけることができる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の2年目として4年度に開催した特集展示にて示した調査成果を受けて、5年度以降も本館1室や平成館考古展示室にて充実した展示を行うことができると考える。さらに5年度以降は、埴輪コレクションのうち、未公開資料を中心に調査研究や撮影を進め、ColBaseに画像を掲載し、論文や書籍、展示など、多角的に成果を公開できるように努める予定である。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aｸ

業務実績書

中期計画の項目	（4）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ　収蔵品等の有形文化財に関する調査研究

【事業概要】

当館が戦前から館蔵する埴輪等の資料に関する調査研究である。神奈川県横浜市の瀬戸ヶ谷古墳から出土した埴輪群の再検討と再整理を通じて総合文化展等の展示に活用する。

【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	考古室長　井出浩正

【主な成果】

瀬戸ヶ谷古墳は神奈川県横浜市に所在する 6 世紀後半の全長約 80m の関東地方南部を代表する前方後円墳である。昭和 18 年及び 25 年に当時の館員や地元研究者が発掘調査を実施したが、その調査成果は、戦前戦後の混乱を受け、当時のまま未登録・未整理となっており、これまで一部を除きほとんど活用されないままとなっている。そこで、賛助会寄附金「瀬戸ヶ谷古墳出土埴輪の調査研究等」を受け、3 年度より 4 か年計画で館蔵作品の再検討とその活用を目的として、上記の埴輪全体を対象とする総合的な研究を実施している。

4 年度は主に、①発掘調査時の記録資料の吟味と概要報告書や当時の日誌等の精査、②発掘調査区ごとの出土埴輪の数量把握と埴輪の分類（円筒埴輪、人物埴輪、器材埴輪等）、③分類した埴輪破片の接合検討等を実施した。

作業風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4 年度は①発掘調査時の記録資料の吟味や概要報告書や当時の日誌等の精査、②発掘調査区ごとに出土した埴輪の数量の把握と埴輪の分類（円筒埴輪、人物埴輪、器材埴輪等）、③分類した埴輪破片の接合検討を中心に計画を実施した。 ①については、発掘調査当時の状況を知るための調査であり、他機関への記録類の確認と情報提供を依頼、共有することができた。②については、アルバイトの大学院生や学生の協力を得て、コンテナ箱約 100 箱にのぼる調査区ごとの出土埴輪の数量や埴輪の種類の特定作業を継続的に実施した。③については、これまで当館所蔵品の中で確認されていない新たな器材埴輪や、展示中の当該古墳出土品の一部の可能性のある破片等の検出をすることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4 年度は当該事業の 2 か年目に位置づけられる。3 年度に実施した出土埴輪の洗浄とコンテナ箱への簡易的な仕分け作業を受け、4 年度は主に箱ごとに埴輪の分類と、分類を経た埴輪の接合を行った。ただし、作業の効率や必要に応じて、複数の箱単位とした出土埴輪の分類と接合検討作業を実施した。以上から、中期計画を順調に遂行できているといえる。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア　近畿地区を中心とする社寺文化財の調査研究　((4)-①-1))

【事業概要】
京都国立博物館では、文化財の保存と活用に資すべく、昭和 54 年度より主に近畿地区所在の社寺を対象に伝存文化財の悉皆調査を行っている。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	調査・国際連携室長　降矢哲男

【主な成果】
(1) 2 年度より継続的に実施している大徳寺塔頭・龍光院を対象寺院として、書跡・絵画を中心に 5 日間（8 月 2 日～6 日）の調査を実施した。調査件数は 65 件である。
(2) 悉皆調査が未完了であったため、4 年度刊行の『社寺調査報告』31 では掲載を見送った檜尾山観心寺（大阪府河内長野市）所蔵の彫刻について補足調査を実施し、調査成果を『社寺調査報告』32（観心寺彫刻編）として刊行した。また、過去に実施した社寺調査の調書・写真を整理するとともに、調書データの電子化を進めた。
(3) 平成 28～令和 2 年度にかけて実施した観心寺・金剛寺の調査成果を基盤として、特別展『河内長野の霊地　観心寺と金剛寺』を開催した。

調査風景

【備考】
(1)龍光院の社寺調査
・龍光院は大徳寺 156 世の江月宗玩（1574-1643）を実質的な開山とする禅宗寺院。非公開寺院であるが、国宝曜変天目をはじめとする指定文化財を多数有する。
・新型コロナウイルス感染拡大抑制のため、龍光院での実地調査はコロナ禍以前の社寺調査よりも参加人数を絞って実施した。
(2)過去の社寺調査におけるデータの整理
・新型コロナウイルス感染拡大により作業が滞る中で、補足調査を行いながら『社寺調査報告 32』（観心寺彫刻編）の刊行に向けた編集作業を行った。
・過去に実施した社寺調査の末刊行分の調書や写真資料等について整理を行った。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3 年度に引き続いて、新型コロナウイルスの影響が大きく、実地調査(龍光院)の実施が危ぶまれたが、寺院側の全面的協力もあり、5 日間の調査を行うことができ、悉皆調査終了後の報告書刊行に向けて、写真整理ならびに調書データの電子化も順調に進めることができた。また、懸案であった観心寺の彫刻に関する調査を完遂し、調査成果を報告書として刊行することができた。新型コロナウイルスの影響により、例年より調査日数はやや減少しているものの、事業そのものを着実に推し進めることができたため、Bと評価する。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に示した「有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究」事業の一環として、2 年度より大徳寺塔頭・龍光院所蔵文化財の悉皆調査を継続しており、調査は終了していないが、報告書慣行に向けての準備を着実に進められた。特記すべきは、平成 28～令和 2 年度にかけて実施した観心寺・金剛寺の調査成果を基盤とした特別展『河内長野の霊地　観心寺と金剛寺』を開催したことで、中期計画策定時には予定していなかった展覧会を通して、調査成果を分かりやすい形で公表できたことは格別大きな成果と自負しているため、特にAと評価する。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ　訓点資料としての典籍に関する調査研究　((4)-①-1))

【事業概要】

漢文を訓読するために施された、「訓点」と呼ばれる読みを表すための記号は、時代や地域によりかなりの多様性があり、その大半は経典・漢籍・和書などの典籍にみられる。これらに付された訓点により、とくに古代・中世の日本人がどのように本文を読み下していたか、という日本語の有り様が判明する。京都国立博物館では、「守屋コレクション」に代表される、国内外の良質な古典籍を数多く収蔵することから、それらを中心とする調査研究を通して得られた成果を展示や講演、及び刊行など、博物館における関連事業へと還元する。

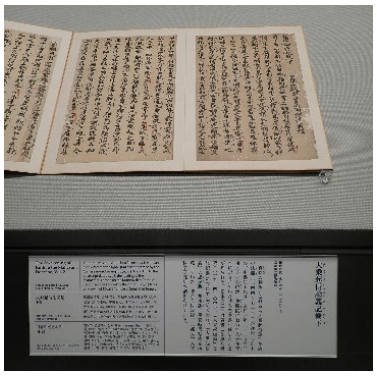
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員　上杉智英

【主な成果】

(1)訓点の研究には、その特質に応じた専門の学識者が不可欠であるため、調査スタッフに大阪大谷大学教授の宇都宮啓吾氏（日本語学）を客員研究員として迎え、新型コロナウイルス対策に十分配慮したうえで、計 5 回の調査を実施した。

(2)調査作品は「春浦和尚自筆本錦繍段抄」や「起信論義記」「性霊集」（以上、館蔵品）など 15 件に及び、今後の研究にも資するよう撮影を行った。

(3)本研究と密接にかかわる聖教を特別展、および名品ギャラリーで展示し、記念講演会や図録掲載論文を通して調査成果の公表に努めた。



「起信論義記」展示風景
（「松本コレクションの名品」より）

【備考】

・調査回数及び件数 5 回・15 件
・成果の公開（展示）　平成知新館特別展「最澄と天台宗のすべて」（4 月 12 日～5 月 22 日）
・成果の公開（展示）　平成知新館特別展「河内長野の霊地 観心寺と金剛寺」（7 月 30 日～9 月 11 日）
・成果の公開（展示）　平成知新館名品ギャラリー「松本コレクションの名品」（1 月 31 日～2 月 26 日）
・成果の公開（特別展記念講演会）「観心寺・金剛寺の聖教」（9 月 3 日）
・成果の公開（刊行論文）　上杉智英「金剛寺本『遊仙窟』断簡、発見の意義」（特別展図録『河内長野の霊地 観心寺と金剛寺』、7 月刊行）
・成果の公開（講演会）　宇都宮啓吾「訓点資料概説」（訓点語学会主催「第 1 回訓点資料講習会」9 月 4 日）
・成果の公開（講演会）　宇都宮啓吾「訓点資料調査法」（訓点語学会主催「第 2 回訓点資料講習会」12 月 18 日）
・成果の公開（刊行論文）　宇都宮啓吾「西墓点の創始と伝播を巡る一考察―西墓点資料の複層性について―」（『訓点語と訓点資料』150 輯、5 年 3 月）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの感染拡大をうけ、調査の実施は必要最小限に留めたが、3年度より調査回数・撮影件数等は増加しており、一点一点堅実に成果を蓄積している。併せて、調査成果の公開も着実に展示・講演・図録の刊行へと反映でき、所期の目標は達成していると判断した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の2年目である4年度は、新型コロナウイルスの感染拡大抑制に留意しつつも、調査回数を増やすことができた。また、これまでの基礎的・探究的な調査及び研究の蓄積を踏まえ、展示・講演会という公衆に対しての情報発信にとどまらず、若手の訓点研究者に対する講習会（前掲主な成果(3)）など、多面的な成果発信ができており、着実に中期計画を遂行していると考えるため、Ｂと評価する。5年度以降も引き続き調査・研究を推し進め、文化財の収集・保存修理・展観等の事業に反映させていく。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 1411Bｳ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ　旧家伝来の工芸品に関する調査研究　((4)-①-1))

【事業概要】
関西圏を中心に、旧家伝来工芸品の調査を実施することにより、地域の暮らしの在り様を物質的に探る。作品の管理・保存への助言を行うとともに、寄贈・寄託・貸与に結び付け、博物館の収蔵品と展示の充実を図る。

【担当部課】	学芸部工芸室	【プロジェクト責任者】	企画室長兼工芸室長　山川曉

【主な成果】

・科学研究費の研究課題として採択された岡山県の野﨑家所蔵文化財の悉皆調査を 6 月、8 月、11 月、3 月にのべ 11 日間実施した。調査は野﨑家塩業歴史館と共同で行い、収蔵管理及び展示についての助言も行った。

・6 月、京都市内の旧家の整理に当たって調査依頼を受け、染織品の調査を実施した。そのうちの 1 件を当館にて受贈し、もう 1 件を他館の受贈へとつなげた。

野﨑家漆工調査風景

【備考】
野﨑家調査　4 回 11 日間　作品調書 151 件　調査画像 1271 カット
染織調査　　1 回 1 日間　作品調書 2 件　調査画像 27 カット

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近年の生活様式や社会環境の急激な変化により、地域共同体において中心的な役割を果たしてきた旧家では邸宅や蔵の建て替えが進行し、収蔵する美術工芸品についての調査が急務となっている。本プロジェクトの目的は、この社会的要請に応え、旧家の暮らしの物質的な基礎データを蓄積し、失われゆく生活文化を記録し研究につなげることである。あわせて、旧家のかつての生業の聞き取り調査等も行い、歴史学・民俗学的な観点からも、美術品をめぐる文化の全体像の把握につとめている。 4年度は科研費研究課題である「備前児島の野﨑家に伝わる文化財の総合調査：塩田王の美術コレクション」（永島明子・基盤研究Ａ）を中心に作品の基礎データ収集を進め、新型コロナウイルス感染防止への配慮をしつつ、作品調書や画像を蓄積することができた。また、京都市内の旧家の調査依頼に応え、1件の寄贈に結び付けた。5年度以降も、引き続き基礎データを蓄積するとともに収蔵品の充実に努めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京都文化を中心とした文化財を収集・展示対象とする当館において、基礎的な研究の一翼を担う事業である。新型コロナウイルスの感染状況をみながらではあるが、調査を継続することができた。5年度以降も調査を継続し、所蔵者による文化財の収蔵管理への助言を行うとともに、当館への寄託や寄贈へと結びつけ、展示や収蔵品の充実を図る。中期計画の2年目として、順調に課題を遂行できている。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bｴ

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 エ　京都周辺出土の考古遺物に関する調査研究　((4)-①-1))

【事業概要】

調査成果と展示や研究に広く活用することを目的として、京都周辺出土の考古遺物を中心に、本館所蔵品や寄託品の資料整理・実測図作成・三次元計測等を進め、その成果を広く発信した。また、地方公共団体や大学、所蔵者等と連携をとりながら、考古遺物の保存に対する助言や共同研究を進めた。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	考古室長　石田由紀子

（主な成果）

1　所蔵品の調査・研究

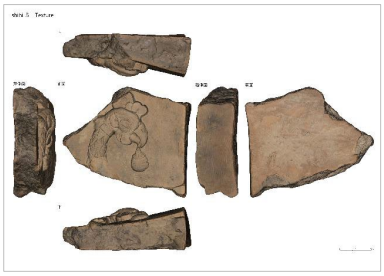
・これまで凹凸が強く平面実測が困難であった平安京の鳳凰文鴟尾５点（いずれも寄託品）に対して、SfM－VMS を用いた三次元計測を行い、三次元データでフルモデルを作成し、成果を『学叢』で公開した。

・兵庫県たつの市西宮山古墳出土品について、3 年度に続き非鉄金属製品の科学分析(蛍光 X 線等)と、未報告の埴輪及び土器の整理と調書・実測図作成を進めた。特に、埴輪については、報告書作成を念頭におき研究者を招聘して研究会を行い、出土品の年代的位置づけなどについて意見交換した。金属製品については、3 年度同様『学叢』に報告した。

2　考古資料の保存に関する助言、及び共同研究

・左京区福田寺の境内に所在する花脊別所経塚出土仁平元(1151)年銘の石柱に対して、所蔵者や地元住民とともに現状の状況について確認し、保存に対する助言を行った。

・京都市北区の上ノ庄田瓦窯出土鴟尾に関して、報告書作成に関する協力・助言を行った。



鳳凰文鴟尾の三次元モデル

西宮山古墳出土品の調査・研究会
(9/10:当館)

花脊別所経塚石柱の調査
(5/18:福田寺)

【備考】

鳳凰文鴟尾(三次元データフルモデル5点　画像 1280 点)
西宮山古墳出土非鉄金属製品(蛍光 X 線分析:金銅装胡籙金具約 5 点・同 馬具約 10 点・同装身具約 2 点・同三輪玉 1 点)、埴輪(実測図約 30 点　調書約 50 点　画像 325 点)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館は京都府周辺の考古資料を多く所蔵しており、従来から調査・研究の成果を名品ギャラリー、特集展示などで積極的に活用し公開してきた。3年度より継続して実施している西宮山古墳出土資料の研究・調査に関しては、4年度も計画的に資料の整理や実測図作成などを進め、さらに9月には古墳時代の研究者を招聘して研究会を実施した。また、収蔵品の整理の一環として4年度は新たにSfM-VMSを用いた三次元計測の手法を導入し、これまで平面実測図作成が困難であった鳳凰文鴟尾に関してフルモデルの図面を作成することができた。 さらに地方自治体や大学、所蔵者の要請に応え保存に関する助言や、発掘調査報告書刊行に関する協力を行った。今後もこれらの要請に積極的に応えていく。 以上の成果を鑑み、総合的評価はBと判断した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	三次元計測などを新たな調査手法を取り入れつつ、考古遺物の整理・調査を着実に進めることができた。調査成果は、5年度以降の名品ギャラリーや特集展示等に反映させ、展示を充実させる予定であり、中期計画を順調に遂行できていると考えるため、Bと評価する。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bオ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)所蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ　特集展示・特別企画に関する調査研究　((4)-①-1))

【事業概要】
(1)「特別公開　熊本・宮崎の古墳文化―石人と貝輪―」
（会期： 6 月 28 日～7 月 24 日、7 月 30 日～9 月 11 日／5 年 1 月 2 日～2 月 26 日）
・熊本県立装飾古墳館・宮崎県立西都原考古博物館及び京都大学総合博物館との相互交換展示に基づく企画展示。
(2)「特集展示　新発見！蕪村の『奥の細道図巻』」（会期： 6 月 14 日～7 月 18 日）
・新たに発見された与謝蕪村筆「奥の細道図巻」を、関連する当館所蔵品とともに公開した。
(3)「新春特集展示　卯づくし―干支を愛でる―」（会期：5 年 1 月 2 日～1 月 29 日）
・5 年の干支、卯（兎）をテーマとした収蔵品による新春恒例の企画展示。
(4)「特集展示　雛まつりと人形」（会期：5 年 2 月 4 日～3 月 5 日）
・伝統的な年中行事である雛まつりを、人形を通して紹介する恒例の企画展示。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　尾野善裕

【主な成果】
(1)「特別公開　熊本・宮崎の古墳文化―石人と貝輪―」：石材や貝殻の多用にみられる独自性の高い熊本及び宮崎県地方の古墳文化の地域的特色を示す古墳出土品を展示した。
(2)「特集展示　新発見！蕪村の『奥の細道図巻』」：与謝蕪村が芭蕉の俳諧紀行『おくのほそ道』の全文を書写し、関連する絵を添えた『奥の細道図巻』が新たに発見されたため、年度当初には予定していなかったが急遽開催。初公開となった新発見作品とともに、関連する所蔵品も展示した。
(3)「新春特集展示　卯づくし―干支を愛でる―」：分かりやすい解説文の設置、低年齢層に向けたワークシートの配付等を行い、子供から大人まで幅広い層が楽しめる入門的な展示とした。
(4)「特集展示　雛まつりと人形」：現代では目にすることが少ない御殿付きの雛飾りを通し、雛まつりの変遷と意味を伝えた。4 年度は京人形のうち衣裳人形を特集し、雛人形と京人形を紹介するリーフレットを作成した。

【備考】
(1)「特別公開　熊本・宮崎の古墳文化―石人と貝輪―」：熊本・宮崎県の古墳出土品 27 件を、2 期に分けて展示した。併せてリーフレット『熊本・宮崎の古墳文化―石人と貝輪―』（4 頁）を刊行し、展示の理解促進を図った。
(2)「特集展示　新発見！蕪村の『奥の細道図巻』」：初公開の新発見作品とともに、関連する所蔵品も展示した。併せて、新発見作品の全図と解説を掲載したリーフレットを刊行、会場で無料配布し、新発見の意義と重要性を広く周知することに務めた。
(3)「新春特集展示　卯づくし―干支を愛でる―」：重文 1 件、重美 1 件を含む収蔵品 24 件を通して、日本と東アジアの人々が、どのような想いを込めて兎を表現してきたのかを紹介した。

特別公開　展示風景

(4)「特集展示　雛まつりと人形」：収蔵品 82 件を通し、現代にも続く日本文化における人形の愛好を多言語題箋により紹介した。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は、例年特集展などを開催している夏期に特別展「河内長野の霊地　観心寺と金剛寺」（会期：7月30日～9月11日）を開催したため、企画数自体は4（3年度は5企画）にとどまったが、例年同様多分野にわたるバラエティ豊かな展示とすることができ、引き続き新型コロナウイルス感染症の影響はあったものの、入館者数は3年度を大きく上回った。また、リーフレットの作成や関連講演会の開催を通して、来館の文化財に対する理解促進を図ることもできたと考えるため、Ｂと評価する。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	その年の干支をテーマにした特集展示「卯づくし」や、桃の節句に因む特集展示「雛まつりと人形」のように例年の恒例としている展示と、4 年度の固有の独自企画である特別公開「熊本・宮崎の古墳文化」、特集展示「新発見！蕪村の『奥の細道図巻』」をバランスよく開催することができ、中期計画を順調に遂行できている。5 年度以降も、計画的に調査・研究を進め、展示を魅力あるものとするよう努力する。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bカ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ　日本近代における中国書画の受容に関する調査研究　((4)-①-1))

【事業概要】

館蔵の中国書画コレクションは、上野理一や須磨弥吉郎の旧蔵品など、日本近代に活躍した実業家のすぐれた蒐集の成果を継承するものが中核をなしている。明治期に航路が開かれて以降、直接人とモノが往来するようになった時期に行なわれたこれらの中国書画蒐集は、江戸時代以前のものとは性格を異にしており、歴史・文化的な意義を多分に含んでいる。本事業では、館蔵の中国書画コレクションの形成や受容に関連する書簡や記録類など膨大な資料を整理し、目録化や図録の刊行によって基礎データとして活用できるようにすることで、これらの作品群の特色を活かした多角的なアプローチの可能性を拓き、将来の展覧会等での発信につなげていく。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員　森橋なつみ

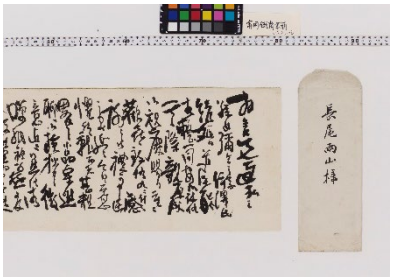
【主な成果】

・長尾雨山旧蔵の中国書画関連資料の調査・撮影、目録との突合作業（2 か月に 1 回程度、計 5 回）
・図版目録Ⅱ刊行に向けた須磨コレクション作品の新規撮影（34 件分、撮影終了）
・図版目録Ⅱ刊行に向けた須磨コレクション作品の釈文起こし（112 件分、完了）

【備考】

・調査・撮影など客員研究員の呉孟晋氏（京都大学准教授）に全面的な協力をいただいた。

『図版目録Ⅱ』用新規撮影
（A 甲 913）



長尾雨山宛　富岡鉄斎書簡

長尾雨山所用印（一部）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	この間、継続的に整理を進めている須磨コレクションに関しては、元年に刊行済みの『図版目録Ⅰ』にならう形で情報を整備し、北京・広東を中心に活躍した画家の作品112点を収録する『図版目録Ⅱ』の出版に向けた準備を進めた。また、長尾雨山旧蔵の中国絵画関連資料についても、4年度より状態確認や撮影・調書作成、旧目録との突き合わせなどの作業を進めており、未紹介の書簡や近代書画家の印章など重要資料の存在を確認している。総じて、整理・調査が着実に進んでいるため、Ｂと評価した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの再流行に起因して、調査回数がやや減少していることもあって、進捗は中期計画で想定していた作業量の約 3 割にとどまっている。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う様々な制約が解除される見込みであることを踏まえるならば、残る 3 ヶ年で充分に挽回は可能と見込んでおり、5 年度中の『図版目録Ⅱ』の刊行にも見通しがつきつつあるため、Ｂと評価する。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 1411Bキ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ　書跡及び絵画の伝来と散逸に関する調査研究　((4)-①-1))

【事業概要】

ある作品が生み出されてから、今に到るまでにたどった歴史を考えるにあたり、「伝来」と「散逸」は「だれが所蔵していたのか」「どのように受容されてきたのか」といった、それぞれに固有の情報と繋がるため、重要なキーワードとなる。これらについて、作品及び附属品、あるいは関連資料により得ることのできる知見から、書跡及び絵画のアーカイブ充実を図り、今後の調査研究活動に供する。あわせて、成果を展示、講演や刊行など、博物館における関連事業へと還元する。

【担当部課】	学芸部美術室	【プロジェクト責任者】	列品管理室長兼美術室長　羽田聡

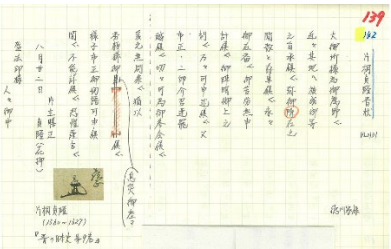
【主な成果】

(1)調査は、新型コロナウイルスの感染対策に配慮したうえで５回を実施し、「布袋図　善阿印」（館蔵品）、「古文書貼交屏風」や国宝「秋景冬景山水図」（以上、寄託品）など、書跡と絵画の作品 10 件に及んだ。

(2)調査作品のうち、「古文書貼交屏風」は６曲２双の屏風に大量の古文書が貼り込まれているため、画像を対照しながら翻刻作業ができるよう、詳細なデジタルデータを撮影した。

(3)特記事項として、「古文書貼交屏風」は、『京都府古文書等緊急調査報告　本法寺文書』（京都府教育委員会、1974 年３月）において、目録作成と主要部分の翻刻がなされていたが、全点を徹底的に調べ直し、従前の不明点や誤りをほぼ改めた。また、今後の研究に資するよう花押データベースを作成し、基盤研究Ｂ「博物館史資料アーカイブズを活用したメタ文化財情報構築の検討」（3～6 年度、研究代表者　羽田聡）の成果も取り入れ、近代以降の活用状況を明らかにすることができた。

(4)知見を公開する手段として、展示・講演・刊行を得、４年度は当館で茶の湯に関わる特別展を開催したことにともない、中国から日本にもたらされた「唐物」の受容という観点から、とくに中国絵画と書跡において成果をあげることができた。



古文書の調査ノート（部分）

作成した花押データベース（部分）

【備考】

・調査回数　５回 10 件
・撮影コマ数　164 カット　　古文書の翻刻　290 点　　花押のデータベース作成　313 点
・成果の公開（展示）　特別展「京に生きる文化　茶の湯」（10 月８日～12 月４日）
・成果の公開（講演）　森橋なつみ「日本の茶文化における中国絵画受容」（特別展記念講演会　10 月 29 日）
・成果の公開（刊行）　羽田聡「金地院所蔵　国宝『秋景冬景山水図』の附属書状について」（特別展図録『京に生きる文化　茶の湯』、10 月）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度から新たに始まったプロジェクトであるため、調査回数や撮影コマ数など、いずれも比較の対照となるべき実績値を持ち合わせていないが、成果の公開は展示・講演・刊行に及び、社会や学会への貢献度が高いため、所期の目標を達成していると判断した。また、大量の古文書について、継続的に全点を翻刻及び調査し、かつての不明点や誤りを正したことで、精度の高い情報を提供できる準備が整い、今後の研究の基礎となりうる点も判断の材料として加味している。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作品を中心に据えた諸活動を行う博物館にとって、これらに関わる情報を充実させていくことは、根幹に位置する地道な作業である。かような重要性に照らし、社会や学会への発信において成果をあげているため、所期の目標は達成できていると判断した。5年度は、書跡と絵画とで、横断的な成果を提示できるような調査対象も設定したい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1441Cア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア　復元模写制作に伴う仏教絵画の調査研究

【事業概要】

仏教絵画の制作当初の姿を復元的に描く模写制作に際し、現状では変色や剝落によって肉眼の観察のみでは判別できなくなっている料絹・料紙や顔料などの素材について、事前に高精細デジタルカメラや蛍光エックス線分析器等を用いた光学的調査を入念に実施し、そこで得られたデータを模写制作に活用・公開する（(4)-①-1)）

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　谷口耕生

【主な成果】

新型コロナウイルス感染防止のため、調査人数の制限、マスク着用・手指消毒の徹底を行うなどの対策を講じ、計画どおり下記の成果を挙げることができた。

(1) 愛知県立芸術大学が進める当館蔵千手観音像の模写制作のため、同作品の原本熟覧及び手板色合わせ等の調査を 2 度実施した（4 月 27 日、9 月 28 日）。また同作品に用いられる顔料特定のため、当館の光学機器を用いた蛍光エックス線分析調査を実施した（11 月 14 日）。

(2) 東京藝術大学が進める信貴山縁起絵巻模写制作のため、同絵巻（延喜加持巻）の原本熟覧及び手板色合わせ調査を 2 度実施した（5 月 16 日、9 月 26 日）。同模写制作にあたっては、東京文化財研究所と当館の共同研究報告書『朝護孫子寺蔵　国宝　信貴山縁起絵巻　調査研究報告書－光学調査編－』『同報告書－研究・資料編－』の成果に基づき使用する顔料の検討を重ねた。

(3) 東京藝術大学が進める平安仏画復元模写事業の素材調査の一環として、当館蔵十一面観音像、当館蔵大仏頂曼荼羅、当館蔵十王図の原本熟覧及び東京文化財研究所の高精細デジタルマイクロスコープを用いた上記作品の料絹繊維調査を実施した（12 月 22 日）。

愛知県立芸術大学による復元模写制作に伴う蛍光エックス線分析器を用いた当館蔵千手観音像の顔料調査（11 月 14 日）

【備考】

調 査 回 数：6 回（4 月 27 日・9 月 28 日・11 月 14 日：愛知県立芸術大学調査、5 月 16 日・9 月 26 日：東京藝術大学信貴山縁起絵巻調査、12 月 22 日：東京藝術大学平安仏画調査）

調査作品数：5 件（当館蔵千手観音像 1 幅、信貴山縁起絵巻（延喜加持巻）1 巻、当館蔵十一面観音像 1 幅、当館蔵大仏頂曼荼羅 1 幅、当館蔵十王図 10 幅）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルス感染拡大防止のため、調査受け入れ人数の変更等の制約はあったものの、愛知県立芸術大学・東京藝術大学による復元模写制作のため、当館の館蔵・寄託品の熟覧・色合わせ等の作品調査を実施し、当館及び東京文化財研究所の光学機器を用いた顔料・料絹の調査データを提供した。その結果、当館収蔵の仏画作品に関する復元模写制作の精度を飛躍的に向上することが可能となり、模写制作を通じて得られた当該文化財の顔料・基底材等の知見を蓄積することができたことから、左記の評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業では、中期計画の2年目として、精度の高い光学的調査・熟覧の成果に基づいて彩色・料絹等の復元的考察を加え、芸術系大学が進める復元模写制作に反映するという目標を達成することができた。以上のような成果を蓄積していくことは、絵画作品を中心とする文化財の素材研究にも大きく寄与するものであり、中期計画に沿った事業として順調に推進できたことから、左記の評定とした。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ　古代・中世の写経と聖教に関する基礎的研究（(4)-①-1））

【事業概要】

我が国には、寺院を中心に古代・中世の写経や聖教が数多く伝来している。それは、人文科学全般にとって重要な研究資料であるが、仏教学以外の分野での利活用は低調である。本研究は、当館の主要な蔵品である古代・中世の写経と聖教を基軸に、文化財学的な立場から資料を調査し、多分野での利用に堪える基本情報の蓄積と提示を目指すものである。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	資料室長　野尻忠

【主な成果】

(1) 写経等の調査

・個人寄託の法華経一品経全 4 巻のうち 3 巻を、材料科学の専門家とともに調査した（5 月 18～20 日）。現状、金色に発色している部分の調査において、これまで金泥塗りと想定されていたが、実は銀泥の上に金泥を重ねて塗る技法が用いられていることが判明した。

・館蔵の華手経巻第十二など奈良時代写経 4 巻を、外部の典籍学・仏教学の専門家とともに調査し、軸端の年代観などについて意見交換した（7 月 20・21 日）。

・丹生都比売神社寄託の法華経 8 帖を、外部の国語学の専門家とともに調査した（9 月 22 日）。本品は従来、12 世紀の作とされてきたが、仮名字点は 11 世紀のものと考えられ、書写自体も 11 世紀に遡る可能性が高いと判断されるに至った。同時に調査した館蔵の法華経巻第一は、こちらは 12 世紀の作とする従来の推定が妥当。

・長谷寺寄託の法華経一品経 34 巻を、同寺の事業として全巻写真撮影するのにあわせ、料紙装飾の様相などを簡易に調査した（12 月 15・16 日）。

(2) 聖教の調査

・勧修寺寄託の御法流遺状を調査し、周辺資料と照合させた結果、本品は、同寺に「勧修寺聖教」として伝来する資料群（国重要文化財）の一部であったことが判明した（5 月 14 日）。

・仁和寺聖教調査（文化庁主宰）に、職員 2 名を派遣した（7 月 26～29 日、3 月 27 日～29 日）。

・館蔵品で、4 年度に保存修理中の南都寺社古文書古記録等につき、解体作業まで完了した全点を写真撮影するとともに、本紙紙背の状態や裏打紙の紙質等を目視により調査した（8 月 5 日）。

・園城寺寄託の智証大師関係文書典籍の保存修理に向け、3 年度に引き続き、美術史学や中世史学の外部識者を交えて調査した（10 月 6 日）。また、一部の文書典籍は修理が開始され、解体作業の進む典籍等を、智証大師関係文書典籍保存活用専門委員会の委員とともに、修理工房で実見、調査した（12 月 5 日）。

・館蔵の造仏所作物帳 3 件を、保存状態の観察を中心に調査した（12 月 14 日）。

(3) 研究成果の開示

以上の調査に基づく知見は、平常展・特別展を問わず展覧会場の題箋やパネル類、図録をはじめとする館の刊行物、さらには職員による講演会などの内容に反映されている。

【備考】

・野尻忠「古代の戸籍と正倉院文書について」（講演、奈良国立博物館サンデートーク、10 月）など、執筆物 1 件、講演 1 件で研究成果を発信。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵品や寄託品を中心に、古代・中世の写経・聖教の調査を着実に実施できている。外部識者を交えての調査も機会を捉えて実施し、件数としては例年並みであったが、上に記したとおり従来の定説とは異なる調査結果が得られるなど、成果を上げることができている。特に、材料科学との協業には、今後も計画的に取り組んでいきたい。館外に所在する資料の調査は、機会が徐々に増えているが、新型コロナウイルスの影響がまだある中、どのように諸方面と調整を図っていくか模索中である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の調査と研究は、着実に実施できている。研究成果は、展示会場の解説文や展覧会の図録をはじめとする館の出版物のほか、新聞・雑誌等の外部機関の発行物への寄稿など、様々な形で発信している。このことから、中期計画に言う、調査・研究成果の展覧事業への反映も、順調に実施できていると言える。写経や聖教は、そこに文字として書かれている内容は従来から研究対象であったが、現在は、モノの形状や作成経緯、伝来過程、さらには資料群の中での個々の資料の位置づけなど、資料が持っている様々な情報が研究対象となっている。写経と聖教を数多く所蔵する研究機関として、それらの研究に寄与できる情報を提供し続けるため、今後も地道な調査活動を継続していく。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cｳ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ　仏教工芸・上代工芸の総合的調査((4)-①-1))

【事業概要】
仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表する。対象は館蔵品、寄託品、一時預かり品をはじめ、展覧会等に際して借用した作品、他の機関、社寺等が所蔵する作品にも及ぶ。また、展覧会の出品候補となる作品や、当館のある奈良周辺の文化財など、各所の文化財についても積極的に調査を実施し、基礎情報の蓄積に励む。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室　研究員　三本　周作

【主な成果】
(1) 館蔵品の調査
・渋谷区立松濤美術館で 4～5 月に開催された特別展「SHIBUYA で仏教美術―奈良国立博物館コレクションより―」における出陳作品の調査を実施し、図録解説に成果を反映した。
・館蔵品の「首懸駄都種子彩絵舎利厨子（重要文化財）」について CT 調査を実施し、外観では確認できない部分の形状を確認することができた。この画像については 5 年 4 月からの平常展にてパネル展示する予定である。
・館蔵品の「伎楽復元衣装」について、東京国立博物館名誉館員で古代染織史が専門の沢田むつ代氏の指導を得て調査を実施し、基礎データの収集・整理を進めた。本作品については近年、館外への貸し出しなど活用の機会が増加しており、基礎データの整理が大きな課題となっている。
(2) 展覧会に際して借用した作品の調査
・4～6 月の特別展「大安寺のすべて―天平のみほとけと祈り―」に出陳された「金銅透彫舎利容器（国宝）」（奈良・西大寺蔵）、「金銅舎利容器屋根」（京都国立博物館蔵）、「釈迦如来石鉢」（奈良・般若寺蔵）の調査を実施し、図録解説に成果を反映した。
・7～8 月の特別展「中将姫と當麻曼荼羅―祈りが紡ぐ物語―』に出陳された「蓮糸織阿弥陀三尊来迎図」、「蓮糸織霊山浄土図」、「蓮糸織阿弥陀聖衆来迎図」（いずれも福岡・福聚寺蔵）について、蓮糸織の技法や素材の詳細を把握する調査（北九州市立いのちのたび博物館主催）に参加した。
(3) 展覧会の出品候補となる作品の調査
・6 年度開催予定の特別展「空海　KUKAI－密教のルーツとマンダラ世界―（仮）」への出品候補となっている曼荼羅群像や密教法具（いずれもインドネシア国立中央博物館蔵）について現地調査を実施し、インドネシアにおける金工作品の構造・技法などの知見を蓄積した。

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの影響下ではあったが、海外を含めた館外調査や、外部機関を受け入れての調査を一定程度実施することができ、館外との交流も図ることができた。 一方、館蔵品については、3年度に引き続き、これまで基礎情報が十分整理・公表されてこなかった作品を調査し、一部については図録解説を通じて広く発信することができた。特に、CT調査を実施したことによって作品の内部の形状を画像データとして取得できたケースもあり、今後公表することで、館蔵品の魅力のアピールを強化することが期待される。 また、借用作品の調査では、重要品でありながらこれまで詳しく紹介されてこなかった作品を調査・展示し、多くの方に認知していただく機会を設けることができた。 以上の点から、Ｂ評価とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画では、収蔵品をはじめとした文化財の基礎的・総合的な調査研究とその発信に重点が据えられている。その 2 年目にあたる 4 年度は、外部機関との共同調査や海外調査も実施し、学術交流を図りつつ文化財の調査研究を深めることができたのは特筆される。また館蔵品に関しては光学機器を使用した調査を実施することで新たな知見が得られたのも大きな成果であった。5 年間の計画遂行に向けて、着実に成果を蓄積できているものと考える。5 年度は一層収蔵品に関する調査を充実させ、成果の発信に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cｴ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 エ　寺院出土品の調査研究（(4)-①-1））

【事業概要】
寺院出土品の学術調査を通じて展示活用や研究発信に貢献する

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長　中川あや

【主な成果】
（１）館蔵品・寄託品等の調査
・館蔵の寺院出土瓦（内藤コレクション・原田コレクション・野田コレクション）について基礎情報の整理を行い、外部からの調査等に迅速に対応できる管理体制を整えた。
・当館が昭和 30～50 年代に関わった、全国各地の寺院跡の発掘調査で撮影された記録写真や出土資料写真（フィルム、スライド、紙焼き）を全点スキャンし、データ化した（4,258 点）。刊行物未掲載の画像も多く含まれており、今後様々な形で活用するための素地が整った。
（２）展覧会における借用作品の調査
・4 年度特別展「大安寺のすべて―天平のみほとけと祈り―」で借用した大安寺旧境内出土品（奈良市、奈良文化財研究所所蔵）について、一部の資料の新規写真撮影と X 線 CT 撮影を実施し、展覧会図録や講演会において成果を公表した。
・5 年度特別展「聖地　南山城―奈良と京都を結ぶ祈りの至宝―」での借用候補作品として、南山城地域の寺院出土資料の事前調査を実施した。

大安寺旧境内出土陶枕
（奈良市埋蔵文化財センター・
奈良文化財研究所）

【備考】
・中川あや「大安寺-美術、史料、考古が織りなす歴史」『大安寺のすべてー天平のみほとけと祈りー』（展覧会図録）
・中川あや「大安寺の祈りと営みー出土品を中心にー」（「大安寺のすべて展―天平のみほとけと祈りー」公開講座、5 月 21 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵品や寄託品、また、他機関所蔵品にわたり、様々な寺院出土資料について、調査、研究を行うことができた。中でも、膨大な館蔵資料（瓦、寺院跡調査写真）のデータが整理され、蓄積されたことは、将来的に内外での活用につながるもので、大きな成果である。また、展覧会に即した作品の調査・研究内容、新規撮影写真の迅速な公開は、公共への貢献度が高いと考えるため、左記の評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、寺院出土品の調査・研究を通じて展覧会や講演会で成果の発信を行うことができ、目標を着実に実行している。また、5年度の展覧会についても先行した調査を実施し、5年度の調査・研究の基礎を構築できたと言える。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cオ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ　南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究((4)-①-1))

【事業概要】
展覧会開催に際して借用した作品や館蔵・寄託作品、また館外の寺社等の作品のなかから、南都地域（奈良市及びその周辺地域）伝来もしくは南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品を選び、詳細な調書の作成とデジタル高精細画像の写真撮影やＸ線ＣＴスキャン調査を通じ、データの収集・蓄積を行う。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長　岩井共二

【主な成果】
(1)館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。作品名は下記のとおり。
(2)調査を通じて日本古代から中世までの彫刻に関する構造・技法について、Ｘ線ＣＴスキャン調査やファイバースコープなど最新光学機器を駆使することによって、像内銘文の発見や表面観察では判定できない構造など、従来知り得なかった学術的知見を得ることができた。
(3)特別展や名品展における図録の解説や題箋の執筆、講座等における報告、また論文等刊行物のかたちで新知見の発表を行った。一部については、4 年度及び 5 年度の刊行物に発表する。
［作品名］
専修寺阿弥陀如来立像（4 月 5 日）/MIHO_MUSEUM 伎楽面（4 月 23 日）/個人蔵伎楽面(5 月 1 日)/（大安寺十一面観音立像（4 月 25 日）/永興寺四天王立像（4 月 25 日/5 月 23 日）/鷲峰寺四天王立像（5 月 9 日）/當麻寺菩薩面（5 月 18 日）/大安寺広目天立像（5 月 30 日）/大安寺馬頭観音立像（6 月 6 日）/香雪美術館阿弥陀如来立像（6 月 28 日）/香雪美術館地蔵菩薩立像（6 月 28 日）/西福寺観音菩薩立像（7 月 8 日）/西福寺不動明王坐像(7 月 8 日)/西念寺薬師如来坐像（7 月 8 日）/泉橋寺地蔵菩薩立像（7 月 8 日/12 月 14 日）/鶯瀧寺薬師如来坐像（7 月 8 日）/鶯瀧寺地蔵菩薩立像（7 月 8 日）/常念寺釈迦如来坐像及び両脇侍像（7 月 8 日/11 月 4 日）/東慶寺釈迦如来坐像（7 月 11 日）/當麻寺中将姫坐像（8 月 1 日）/西念寺仏像群（8 月 19 日）/大安寺伝楊柳観音立像（9 月 7 日）/ 今宮戎神社男神坐像(9 月 29 日)/西明寺薬師如来坐像(10 月 3 日)/西教寺地蔵菩薩坐像(10 月 3 日/12 月 14 日)/神童寺不動明王立像(11 月 10 日)/神童寺愛染明王坐像(11 月 10 日)/春日大社獅子・狛犬（2 対）（12 月 26 日)/西明寺薬師如来坐像(5 年 1 月 11 日)/金蔵院観音菩薩立像（1 月 11 日）/笠置寺毘沙門天立像(1 月 18 日)/笠置寺誕生釈迦仏立像(1 月 18 日)/巌松院釈迦如来立像(1 月 30 日)/禅定寺十一面観音立像(1 月 30 日)/不退寺観音菩薩立像（1 月 31 日）/鶯瀧寺泰澄坐像(2 月 2 日)/薬師寺四天王像(2 月 6 日)/燈明寺伝六観音像（2 月 14 日）/西念寺薬師如来坐像(3 月 2 日)

【備考】
大安寺所蔵の彫刻の調査成果は東京国立博物館で開催された特別企画「大安寺の仏像」（5 年 1 月 2 日～3 月 19 日）の展示や図録等で活用した。新規撮影された写真や調査成果は、今後開催される特別展「聖地　南山城―奈良と京都を結ぶ祈りの至宝―」（5 年 7 月 8 日～9 月 3 日）をはじめ、展覧会や写真の借用依頼への対応に寄与するものである。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の成果は、4年度及び5年度開催の特別展の展示解説などに反映させるための貴重な資料の集積となった。調査方法は、実測、撮影、3D計測、X線CTスキャンなど多岐にわたる。また、これらの調査には、展覧会輸送の事前点検も含まれ、文化財の安全な活用に資する成果を多分に含んでおり、5年度の特別展、特別陳列のみならず、講座等にも反映させることができる。特に、奈良との関連が深い木津川市や京田辺市の彫刻調査の成果及び撮影写真は、5年度開催の特別展「聖地　南山城―奈良と京都を結ぶ祈りの至宝―」（5年7月8日～9月3日）の図録や会場パネル等の作品解説で公開ができる予定である。 東慶寺釈迦如来坐像は寄託の縁があり、CTスキャン調査により材質や造りが初めて明らかになった。なお、本件は昭和17年以来の博物館での公開となったこともあり学術的価値が非常に高い。また、当館蔵釈迦如来立像はCT調査により頭部納入品の詳細が明らかになり、文献に伝わる逸話に近い納入品が確認されたりと、多大な研究成果が得られた。最終的には所期の目標を上回る成果が得られたと言える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画期間を通し、奈良市域を中核とする南都に伝来ないし南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品について、調書の作成や記録写真の撮影、X 線 CT 等の光学的修法による調査を行い、データの収集・蓄積に十二分の成果をあげることができた。このように、中期計画の２年目として、研究成果の展示・公表・蓄積に着実に取り組んだといえる。以上より、所期の目標を上回る成果をあげることができたため、A評定とした。次期中期計画期間は、例年同様のペースで調査・撮影を進めつつ、新たな研究成果を発表できるよう努めていく。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cカ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ　東京文化財研究所との共同による仏教美術の光学的調査研究((4)-①-1))

【事業概要】

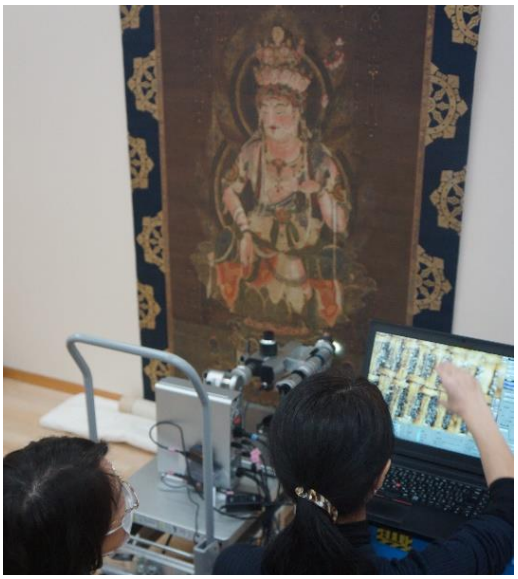
東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づいて、当館が所蔵及び保管する仏教絵画を中心とする美術作品について、高精細デジタルカメラや蛍光 X 線分析器など最新の光学機器を用いた文化財調査を実施し、併せてデジタルコンテンツの作成を行うものである。上記の調査を通じて、色料や基底材など作品に用いられる素材の情報や、制作技法に関する情報、補彩・補絹など補修箇所に関する情報を大量・精緻に蓄積し、報告書等でその成果を広く公表することで、美術史的研究や将来の修理に資することも視野に入れている。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　谷口耕生

【主な成果】

(1) 東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」と関連し、平安仏画を中心とする絹本著色絵画の技法史的展開を解明するための素材調査の一貫として、平安絵巻の代表作である国宝十一面観音像（当館蔵）、重要文化財大仏頂曼荼羅（当館蔵）、重要文化財十王図（当館蔵）を対象に、東京文化財研究所が所有する高精細デジタルマイクロスコープ（Hirox 製 RH－8800）を用いて画絹を高倍率で撮影し、絹糸の形状等を観察するとともに、深度合成機能を利用して絹糸の幅と高さの計測等を実施した（12 月 22 日）。

(2) 東京文化財研究所との覚書に基づく「装潢分野の修理における接着剤の除去法に関する共同研究」の一貫として、当館文化財保存修理所内で修理中の寄託品・宝珠台（海住山寺蔵）の彩画の表面に塗布された接着剤を明らかにするため、FTIR（フーリエ変換赤外分光光度計）を用いた採取サンプルの分析調査及び調査所見に基づく検討を重ねた（11 月 8 日・12 月 20 日）。また上記共同研究の期間延長を前提に、今後の長期的な調査計画についても協議を行った。



国宝十一面観音像（当館蔵）のデジタルマイクロスコープを用いた画絹調査（12 月 22 日）

【備考】

調 査 回 数：館蔵十一面観音像・大仏頂曼荼羅・十王図調査 1 回（12 月 22 日）、海住山寺蔵宝珠台調査 2 回（11 月 8 日・12 月 20 日）

調査作品数：合計 4 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京文化財研究所との共同研究に基づいて、新規に当館蔵十一面観音像・大仏頂曼荼羅・十王図及び海住山寺蔵宝珠台の光学的調査を実施し、当館収蔵の文化財に関する顔料や基底材、接着剤に関する基礎情報を収集するとともに、調査で得られた所見をもとに協議・検討を重ね、その成果を文化財の模写・修理の実施計画に反映するなど、年度計画を着実に達成することができたことから、左記の評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業では、中期計画の2年度目して、東京文化財研究所との共同研究に基づき、精度の高い光学的調査によって高精細デジタル画像及び顔料・基底材・接着剤等の基礎データを着実に蓄積し、その成果の一部を文化財の模写・修理に活用することができた。以上の成果は、絵画作品を中心とする文化財の素材研究にも大きく寄与するものであり、中期計画に沿った事業として順調に推進できたことから、左記の評定とした。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1411Dア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア　X 線 CT スキャナ等による文化財の構造や製作技法に関する調査研究（(4)-①-1)）

【事業概要】

本研究では、X 線 CT スキャナ及び 3D デジタイザ等を使用した調査によって各種有形文化財の構造及び製作技法を明らかにすること並びに得られた成果を展覧事業及び教育普及活動に活用することを目的とする。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長　木川りか

【主な成果】

(1) 展示関連作品の調査

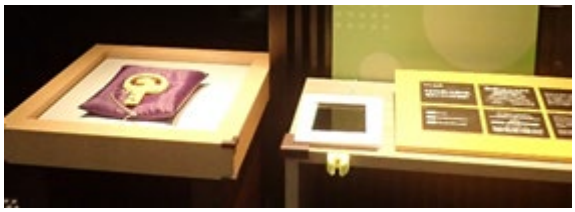
徳川美術館所蔵の国宝「初音の調度」のうち刀掛、寄り掛り、及び掛硯箱（胡蝶蒔絵）の X 線 CT スキャンを実施した。刀掛の柱と梁や脚はほぞ継ぎにより接合されていること、寄り掛りの天板及び底板は複数枚の板が接ぎ合わされていること、掛硯箱（胡蝶蒔絵）の天板・底板と側板は組継ぎにより接合されていること等が判明した。

また、特別展「琉球」に出陳した朱漆竹虎連珠沈金螺鈿座屏（浦添市美術館所蔵）及び丸櫃（個人蔵）の状態並びに内部構造を X 線 CT によって調査し、今後の修理の際に活用できる成果を得た。

(2) 3 次元データの活用

3 年度の特別展「最澄と天台宗のすべて」に出陳した性空上人坐像（兵庫・圓教寺蔵）の X 線 CT スキャン調査を行った。その結果、頭部に陶器と推定される骨壺が納められ、その内部に遺骨が納められていることを明らかにした。4 年度には、引き続き関係者と検討を重ね、壺及び遺骨のデータを抽出し、3D プリンタでレプリカを作製した。

また、これまで本事業によって作製してきた金銅単龍環頭柄頭などのレプリカを、文化交流展示「ならべてわかる本物のひみつ～実物とレプリカ 2022～」でハンズ・オン展示を行った。



レプリカを用いたハンズ・オン展示風景
「ならべてわかる本物のひみつ～実物とレプリカ 2022～」

【備考】

・X 線 CT 調査件数 48 件、調査回数 208 回
・3D デジタイザ調査件数 12 件、調査回数 22 回

＜論文等＞

・渡辺祐基、川畑憲子、板谷寿美、吉川美穂、田中麻美、木川りか「国宝『初音の調度』のうち刀掛、寄り掛り、掛硯箱（胡蝶蒔絵）の木地構造および制作技法の X 線 CT 調査」『日本文化財科学会第 39 回大会研究発表要旨集』116-117（9 月）
・川畑憲子、渡辺祐基、和泉田絢子、田中麻美「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度の木地構造について（3）化粧道具（手箱）」紀要『東風西声』18 号、p.77-86（5 年 3 月）
・若杦善満、渡辺祐基、田中麻美、岡寺　良「土製地蔵菩薩 坐像の製作過程の復元的考察―中世九州北部に出土する特徴的な一群について―」紀要『東風西声』18 号、p.17-35（5 年 3 月）
・大西智洋、渡辺祐基、金城聡子「黒漆孔雀牡丹唐草沈金食籠の修復実績と X 線 CT 調査報告」『浦添市美術館紀要』18 号、p.10-18（5 年 3 月）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は60件の文化財等の調査を実施し、保存状態及び製作技法に関する情報を得た。取得したデータに基づきレプリカを作製し、展示等に活用した。さらに、3次元データの解析及び加工に用いるワークステーションを更新し、3Dプリンタ用データの効率的な加工処理やこれまで以上に高度な数値解析が可能な環境整備を行った。以上から年度計画は完遂したと評価し、Ｂ評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画2年目である4年度は、3年度に引き続き各種文化財の3次元調査を推し進め、これまでに得られたデータをレプリカとして展示で活用した。5年度以降も調査を継続するとともに、展示、学会発表、論文、教育普及等で成果を幅広く公表し、今まで同様の中期計画の円滑な推進に努める。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1411Dイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)　収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 特集展示「御所の器－公家山科家伝来の古伊万里」に関する調査研究

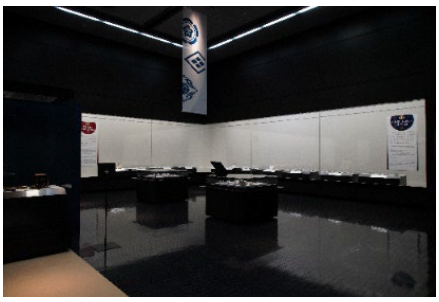
【事業概要】

旧公家山科家に伝来する、江戸時代に宮中より下賜された禁裏御用品（古伊万里）約 200 点を、製作年代を整理、装飾された有職文様の分析を実施し、伝来品の特徴を明らかにした。さらに山科家に関連する史料や装束を研究し、下賜の背景にあった宮中における職務について明らかにした。その成果を 9 月 27 日から 11 月 20 日まで特集展示「御所の器―公家山科家伝来の古伊万里」として一般公開した。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	研究員　酒井田千明

【主な成果】

・30 年度から 3 年度までの科学研究費補助金（基盤研究 A）「アジアの文化財の伝統的製作・修理技法の詳細調査と国際修理プロジェクトの応用」（研究代表者：伊藤嘉章）の研究の一環として、山科家、同志社大学、東京藝術大学と協力して、約 200 点の悉皆調査を実施し、全点の撮影を行った。
・考古学及び美術史的観点から、全点の年代整理及び装飾された有職文様を分析し、伝来品の 9 割は肥前（現佐賀県）・有田の辻家を中心に生産された染付磁器であると判明した。生産地が不明なものは辻家の指導を受けて整理した。
・他の禁裏御用品の伝来品との比較研究で、山科家伝来品の特徴が数十枚単位の組物が多いこと、同じデザインでもサイズの異なる碗や皿で構成されたセットがあることを明らかにした。
・山科家に関連する史料や装束を研究し、山科家が宮中で内蔵頭と御厨所別当を務めていたことが、磁器が下賜されるきっかけとなった可能性を指摘した。
・特集展示「御所の器―公家山科家伝来の古伊万里」として一般公開し、会期中に山科家、同志社大学、東京藝術大学の研究協力者と共に、講演会・トークセッションを実施し、研究成果を公表した（10 月 16 日）。



特集展示「御所の器―公家山科家伝来の古伊万里」展示風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	従来、調査研究や公開実績が少なく、実態のよく分からなかった禁裏御用品中の古伊万里について、宮中職の衣紋道を務めた山科家との関連性に迫り、体系的に整理し公開した。また、図録を作成し、共同研究者らと共に、講演会・トークセッションを実施するなど、学術的意義を広く伝えた。以上の成果から年度計画の所期の目的以上の成果を上げたと評価し、A評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	2018年以来の山科家・同志社大学・東京藝術大学との共同研究の集大成として、旧公家である山科家に伝来した禁裏御用品の全貌を史上初公開し、宮中で使用された古伊万里についての研究を大きく前進させた。本調査研究や展観を契機として禁裏御用品への関心が高まっており、宮中で使用された陶磁器の実態解明に資する内容である。古伊万里研究の新領域を開拓し、中期計画を越える成果をあげたと評価し、左記の評定とした。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1411Dｳ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ　水中遺跡の保存活用に関する調査研究　((4)-①-1))

【事業概要】

本事業は、国内の水中遺跡保護体制の整備とその充実を図ることを目的として 30 年度より実施している。4 年度は、韓国内の水中遺跡研究の拠点である國立海洋文化財研究所と、調査研究、展示、教育普及事業について意見交換した。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長　河野一隆

【主な成果】

3 年度で、文化庁が刊行した『水中遺跡ハンドブック』作成支援に係る諸事業が終了した。4 年度前半は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、海外との自由な往来が制限されたが、後半に緩和されたことを受けて、韓国國立海洋文化財研究所からの依頼に応じ、対面での意見交換を行った（10 月 26 日）。

訪問者と協議内容は、以下の通りである。

【訪問者】

申鍾國　　國立海洋文化財研究所　展示教育課 課長
李柱憲　　同　西海文化財課 課長
金炳堇　　同　遺物科學チーム チーム長
朴禮理　　同　展示教育課 學藝研究士
主税英徳　琉球大学　考古学研究室

韓国國立海洋文化財研究所との交流

【協議内容】

・國立海洋遺物展示館の展示に係る研究と資料調査
・相互交流・協力に向けての意見交換
・展示作品の演出技術と方法についての実地検討

水中遺跡の保存・活用に係る実績は、日本より韓国の方が先進的であり実績も蓄積されている。一方、当館は奈良文化財研究所と共同で文化庁による『水中遺跡ハンドブック』の作成を支援し、水中遺跡研究の松浦市とも連携した保存活用の取組を蓄積している。今回の意見交換は、水中遺跡についての情報共有を国際的に推進すると共に、将来的な研究交流に寄与する機会となった。

【備考】

当館での対応者
小泉恵英 副館長、河野一隆 学芸部長、白井克也 文化財課長

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化庁の受託事業は終了したが、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着き海外渡航の制限が緩和されたことを受けて、韓国の水中遺跡調査研究機関との交流を再開した。リモートでなく、博物館現地での対面による意見交換ができたことは意義があり、年度計画が達成できたためＢ評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	『水中遺跡ハンドブック』を刊行し、水中遺跡の情報共有に係る国際交流を行うなど、調査研究を円滑に推進できた。水中文化遺産に関連する国内外からの依頼に対応し、調査研究や展示事業に積極的に協力することで、中期計画を推進したと評価し、左記の評定とした。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412Aｱ-1

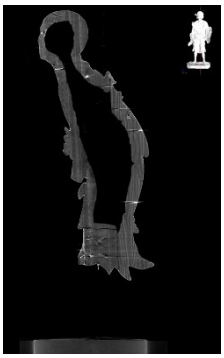
業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア　特別展「空也上人と六波羅蜜寺」に関する調査研究

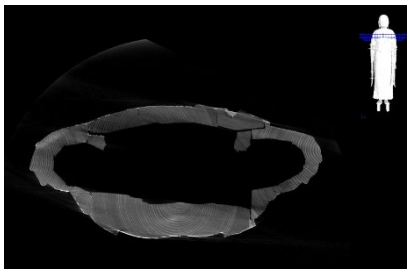
【事業概要】
平安時代に空也上人が開いた六波羅蜜寺（創建当初の名称は西光寺）に伝わる仏像、仏画等を展示した。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	浅見龍介

【主な成果】
出品作品のうち、重要文化財空也上人立像（康勝作）、重要文化財地蔵菩薩立像（伝定朝作）のＸ線 CT 調査、その他出品作品のデジタルカメラによる撮影を行った。
空也上人像は、背中を丸めているので、背面に材を足すが、頭部から脚部の主要部分は一材から造っていること、右足は衣との境で割矧ぎ、左足は水平に鋸で引いたうえで割っている。
地蔵菩薩立像は体幹部の前後材、左右側面材ともに木心のある材を用いて造っていることがわかった。節の多い木であり、制作の事情に関わると考えられる。



空也上人立像
Ｘ線 CT 断層画像



地蔵菩薩立像
Ｘ線 CT 断層画像

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	空也上人立像は、鎌倉時代の巨匠運慶の息子康勝の作として重要な作例であるが、六波羅蜜寺で常時公開しているため、十分な調査研究が行われたことがなかった。今回展覧会の出品を機に、精細な調査、特にＸ線 CT 撮影を実施したことにより、構造技法に新知見が得られた。伝定朝作の地蔵菩薩立像のＸ線 CT 画像とともに調査報告を『MUSEUM』に掲載することで、注目を集め、今後の研究に寄与するものと考えられる。 また展覧会についても、通常正面からしか見られない空也上人立像を 360 度全方向から見ることができるような展示の工夫を行ったことで、満足度は 80%を超えた。コロナ禍にも関わらず 14 万 6 千人あまりが観覧に訪れ、注目度の高い展覧会になったといえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏像等大型立体彫刻の内部および構造を把握できるX線CT装置は文化財機構の国立4館にしかない。そのため、館所蔵作品はもとより、特別展で借用した重要作例のX線CT調査は学界でその報告が待ち望まれている。また、造形の特色をとらえる多様な角度からの写真は彫刻研究のために欠かせないものであり、出品作品の撮影は可能な限り行っている。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-2

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア　沖縄復帰 50 年記念特別展「琉球」に関する調査研究

【事業概要】

特別展「琉球」は、4 年度に復帰 50 年の節目を迎えた沖縄の歴史と文化について、かつて存在した琉球王国に焦点を当て、明治以降の近代化や戦争といった苦難を奇跡的に乗り越えて今日まで伝えられた作品とその意義を紹介するものである。これにあたり、絵画、墨跡、彫刻、金工、陶磁、漆工、染織、考古、民族、歴史資料の各分野の調査を九州国立博物館の担当者と連携して、沖縄県内外において行った。

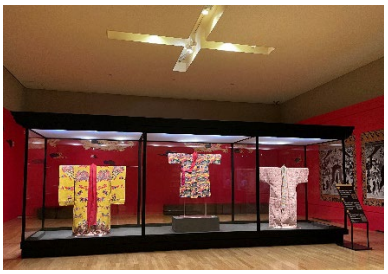
【担当部課】	学芸企画部企画課特別展室	【プロジェクト責任者】	学芸企画部出版企画室　三笠景子

【主な成果】

展覧会では、戦後進められてきた各分野の研究成果を反映した充実した展示を行うことができた。展覧会会期中には、金工や漆工作品の CT 撮影を行い、新しい調査データを得た。また、当館所蔵品でもこれまでまとまって展示する機会のなかった冊封使の墨跡を公開したことや、沖縄本島のほか八重山や宮古を含め、諸地域で展開した染めや織りの多彩な技術を多くの染織作品から紹介したこと、さらに現代の復元技術に視点を広げ、琉球文化を未来へ伝える活動まで取り上げたことなどは、とりわけ意義深いと考える。

また、展覧会関連事業として連続講座を開催し、沖縄から高良倉吉氏、外間政明氏、與那嶺一子氏を招聘して琉球の歴史と美術工芸、また琉球美術のコレクション形成に関する講演を行い、当館研究員とのセッションも行なった。

展示会場風景
（1 室　万国津アジアの架け橋）



会場風景（3 室　国宝尚家宝物）

会場風景（4 室　手わざ復元事業）

【備考】

特別展「琉球」（5 月 3 日～6 月 26 日）　総出品数：363 点
展覧会連続講座（6 月 11 日（土））

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査の遂行にあたっては新型コロナウイルス感染拡大のため、国外所蔵品や沖縄本島以外の島々の調査については延期や中止をせざるを得ないものもあったが、多方面から琉球の歴史と文化に迫る大規模な展覧会を開催することができた。また、展覧会にかかる調査や沖縄の研究者との交流によって、新たな研究課題も見いだされており、継続して調査研究を進める必要があると考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画2年目として、4年度は様々な専門分野の調査の成果を展覧会に公開することができた。これを受けて、今後本館16室の総合文化展「アイヌと琉球」の展示充実を図り、琉球文化の理解を深めるための活動を継続して行っていきたいと考える。 また、当館の明治期購入の琉球関係資料については、伝来や収蔵経緯に関する一次資料に乏しく不明なことが多かったが、本調査を契機として、新たな手がかりが見いだされている。5年度以降も引き続き沖縄県立美術館・博物館や那覇市歴史博物館等と連携して、調査研究を進めたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-3

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア　日中国交正常化 50 周年記念　特別デジタル展「故宮の世界」に関する調査研究

【事業概要】

4 年度に開催した特別デジタル展「故宮の世界」は日中国交正常化 50 周年を記念した展覧会である。展覧会を 2 章立てで構成し、第 1 章では故宮博物院と凸版印刷が進めてきたデジタル・アーカイブのデータを活用した再現ＶＲコンテンツや高精細な文物のデジタル展示を行い、第 2 章では東博が管理する清朝皇帝が愛蔵した書画や清時代の工芸品を展示する。本展の開催にあたり、内容をより充実したものにするため、展示作品の調査研究を実施した。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室長 猪熊兼樹

【主な成果】

デジタル展示空間を作るにあたり、故宮博物院と凸版印刷が長年にわたって蓄積してきたデジタル・アーカイブのデータを活用して紫禁城の宮殿の外観や内装を再現し、また、北宋の名画「千里江山図」を高約 3 メートル、幅約 22 メートルの大画面に投影することで山水画を没入体感するように鑑賞するなどの実験的展示を行った。そして当館が管理する清朝皇帝が愛蔵した書画や清時代の工芸品を展示することで、デジタル展示と相互補完を行うなど、次世代型の鑑賞方法を試みた。これらの展示内容は、コロナ禍での海外渡航制限があるなかで、故宮博物院の研究員および凸版印刷の技術者とオンライン会議やデータ通信なども利用した協議を重ねて作り上げた。また展示内容は清朝の紫禁城が中心であったが、調査研究の対象を中国の考古資料やチベット仏教資料ついても視野を広げることで、より多角的に清時代の宮廷文化を捉えることができた。その成果の一部は、展覧会の閉会後に東京美術より刊行された『もっと知りたい中国の美術』として一般に普及することができた。

「千里江山図」のデジタル展示

清時代の書画工芸の展示

『もっと知りたい中国の美術』

【備考】

・日中国交正常化 50 周年記念特別デジタル展「故宮の世界」7 月 26 日～9 月 19 日、平成館特別展会場（1・2 室）
・特別デジタル展「故宮の世界」鑑賞ガイドブック（会場にて無料配布）
・富田淳監修『もっと知りたい中国の美術』2022 年 10 月、東京美術

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	故宮博物院と凸版印刷が進めてきたデジタル・アーカイブのデータを活かし、デジタル技術を活用した展示を行った。コロナ禍による海外渡航制限を受けて、日本と中国の間を通交することができなかったために故宮博物院が所蔵する実物作品の確認作業に不十分な点も生じたが、オンライン会議やデータ通信によって日本側と中国側との意思疎通に努力した。これまでに故宮博物院が構築してきたデジタル展示の技術を応用しながら、本展では北宋の名画「千里江山図」を没入体感する展示を開発するなど、創意工夫にも努めた。また当館が管理する実物作品も併せて展示することで、デジタル展示と相互補完する工夫を行った。本展の成果は、今後にデジタル技術を活用した展示を進めてゆくうえで大いに参考されるものとなるであろう。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展の開催に伴う調査研究により、当館が管理する中国の書画工芸、考古・チベット仏教の資料などの学術的価値が一層明確になった。また近年著しく発達を遂げているデジタル技術を取り入れた展示方法について長所（ストロング・ポイント）と短所（ウイーク・ポイント）が明確になった。このことからも中期計画を順調に遂行できているといえる。これらの成果を活かして、今後の特別展や総合文化展にも反映させる。これを契機として、5 年度以降も引き続き当館が管理する中国関係の文化財および次世代型の展示方法に関する調査研究を進めたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 1412Aｱ-4

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア　東京国立博物館創立 150 年記念 特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」に関する調査研究

【事業概要】

4 年度に開催した特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」は、当館の創立 150 年を記念したものである。第 1 部では所蔵する国宝 89 件すべてを展示し、第 2 部では 150 年の歴史を物語る作品や関連資料を展示した。本展の開催にあたり、内容をより充実したものにするため、展示作品の調査研究を実施した。

【担当部課】	学芸企画部企画課特別展室	【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課 登録室長　佐藤寛介

【主な成果】

展示作品の解説にあたり、それぞれの分野におけるこれまでの調査研究成果を反映させて、最新の学術的知見と評価を盛り込んだ。さらに、一部の展示作品については由来伝来や修理記録などを併記し、第 2 部では収蔵時期に沿って展示することで、当館の歴史や文化財コレクションの成り立ち、博物館の社会的役割を紹介した。また、作品の展示についても、これまでに培われた展示技術によって、質の高い鑑賞体験を提供することができた。

第 1 部　展示風景（絵画）

第 1 部　展示風景（刀剣）

第 2 部　展示風景（彫刻）

【備考】

特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」（10 月 18 日～12 月 18 日）　総出品数：150 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国内最大級である当館の文化財コレクションの最高峰といえる国宝89件すべてと、日本の博物館の歴史ともいえる150年の歩みを組み合わせることで、当館の全体像を多角的に紹介することができたことの学術的意義は計り知れない。創立150年という大きな節目に相応しい内容であり、本展による成果は当館のみならず、日本の博物館の来し方行く末の大きな道標になるものといえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展の開催に伴う調査研究により、当館所蔵品の学術的価値が一層明確になった。この成果をさらなる調査研究に活かすとともに、今後の総合文化展にも反映させる。中期計画の 2 年目として、総合的かつ充実した調査研究を行うことができた。これを契機として、5 年度以降も引き続き当館の文化財コレクションの調査研究を進めたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-5

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア　特別企画「大安寺の仏像」に関する調査研究

【事業概要】
奈良市の大安寺の宝物館に安置される奈良時代の木彫像７体を中心に、当館所蔵の大安寺ゆかりの瓦などを展示した。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課平常展調整室 研究員　増田政史

【主な成果】
(1) 実施概要
・調査：事前調査（10 月 18 日）、写真撮影（11 月 30 日）、X 線 CT 撮影（11 月 25 日、12 月 1 日、2 日）
・開催期間及び開催場所：5 年 1 月 2 日～3 月 19 日　本館 11 室
・担当者：増田政史（同上）、丸山士郎（学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室研究員）、児島大輔（学芸研究部調査研究課東洋室主任研究員）

(2) 主な内容
・出品作品の事前調査、写真撮影、X 線 CT 撮影を実施に、作品の基本情報および画像データを収集した。
・大安寺の仏像 4 躯の X 線 CT 撮影を実施し、対象像の詳細な構造や過去の修理と判断される箇所などの情報を得ることができた。
・大安寺から借用した作品 8 点、当館所蔵の作品 6 点、当館所蔵の図書資料 1 点（参考出品）を選定し、特別企画「大安寺の仏像」を開催した（令和 4 年度日本博主催・共催型プロジェクト）。
・調査によって得られた知見を反映したパンフレット（16 頁）を 13,000 部作成し、無料で配布した。
・大安寺の仏像について説明した講演会を動画撮影し、オンラインで配信した。

11 月 30 日の調査（X 線 CT 撮影の調査）

展示会場風景（本館 11 室）

【備考】
特別企画「大安寺の仏像」パンフレット（総論 1 本：増田政史、コラム 2 本：増田政史、山本亮、作品解説 14 件：増田政史、山本亮）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本企画では、大安寺の奈良時代の貴重な木彫像9軀のうち、宝物殿に安置される7軀を借用し、調査研究を実施した。7軀ものまとまった数を一度に調査することができた貴重な機会であり、調査によって得られた成果を展覧会パンフレットや会場内解説パネルなどに反映することができた。また、X線CT撮影を実施した作品については、今後さらに研究を進め、逐次刊行物等によって紹介したい。 また、館外から借用した作品を展示する特別展の性格を有しながらも、基本的に収蔵品で構成される総合文化展（平常展）の展示室で開催することで、総合文化展の活性化を促進することができた。また講演会の動画配信によって、展示の補助および来館できない人に対する工夫も行った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	借用した文化財を対象に写真撮影や X 線 CT 撮影を実施した。これにより、借用文化財に科学的手法を適切に用いて、学術的・芸術的な価値の究明とコンディションの分析等を行い、中期計画の 2 年目として適切な保管・展示の環境維持や修理等の処置に資するという中期計画に沿った調査研究をすることができた。また展覧会パンフレットを発行し、有形文化財に関する調査研究の成果等の発信を行うという中期計画を順調に遂行できているといえる。このほか、今回の調査研究で得た情報を今後の展覧会企画や出版物のなかで広く発信していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-6

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア　特別展「東福寺」に関連する調査研究

【事業概要】

特別展「東福寺」は、14 か年にわたって行われた明兆筆「五百羅漢図」の修理完成を記念して開催するもので、同寺の寺宝をまとめて紹介する初の機会となる展覧会である。本展では、「五百羅漢図」全幅を修理後初公開するとともに、草創以来の東福寺の歴史を辿りながら、大陸との交流を通して花開いた禅宗文化の全容を幅広く紹介する。本展の開催にあたり、絵画・書跡・彫刻の各分野の調査撮影を、京都国立博物館の担当者と連携して、東福寺及び塔頭寺院において行った。

【担当部課】	学芸企画部企画課特別展室	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員　高橋真作

【主な成果】

(1) 調査概要

・場所：東福寺（京都市東山区本町十五丁目 778）及び塔頭寺院

・期間：絵画調査撮影：4 月 26 日～28 日（小型作品）・6 月 22 日～23 日（大型作品）、書跡調査撮影：5 月 31 日～6 月 2 日、彫刻調査撮影：7 月 20 日～22 日・8 月 30 日～31 日・10 月 26 日～28 日（一部工芸作品）

・担当者：高橋真作（同上）、六人部克典（学芸研究部東洋室研究員）、浅見龍介（学芸企画部長）

(2) 主な内容

3 年度に実施した予備調査の成果をふまえ、展覧会へ出陳する候補作品を選定したうえで、京都国立博物館担当者（森道彦氏・淺湫毅氏）とともにそれらの調査撮影を重点的に行った。東福寺の所蔵品は大型作品や連作が多く、機材やセッティングを変えて撮影する必要があったため、作品の形状や特徴に応じて、数度に分けて実施した。

絵画調査風景

彫刻調査風景

彫刻撮影風景

【備考】

特別展「東福寺」：5 年 3 月 7 日～5 月 7 日　出品数：157 件　　記念講演会（月例講演会）：5 年 3 月 25 日

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	寺内に保管されながらもこれまで未紹介であった作品について、調査を通じてその学術的価値を見出し、それらを展覧会場で初公開するとともに、図録に詳細な解説を付して紹介した。また、既知の作品においても、これまで課題として残されてきた作品の筆者認定や制作背景等について新たな知見を提供し、今後の新たな研究基盤を築くことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画2年目として、基礎的かつ総合的な調査の成果を展覧会に還元することができた。また、図録や講演会等を通じて、研究成果を広く一般に発信した。当館所蔵品には、明兆をはじめとする東福寺派画人の作例も多くあり、それらの今後の研究に寄与できたことの意義も大きい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-7

業務実績書

中期計画の項目	（4）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア　浄瑠璃寺九体阿弥陀修理完成記念　特別展「京都・南山城の仏像」に関する調査研究

【事業概要】
5 年秋実施の浄瑠璃寺九体阿弥陀修理完成記念特別展「京都・南山城の仏像」にかかわる調査研究。本展は京都の南山城地域に所在する寺院の仏像等の展示を行うものである。本プロジェクトでは主に当館寄託品の調査研究を中心に実施した。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室研究員　丸山士郎

【主な成果】
(1) 実施概要
・事前調査及び写真撮影（12 月 1 日、5 年 3 月 17 日）
・担当者：丸山士郎（同上）、増田政史（学芸研究部列品管理課平常展調整室研究員）、児島大輔（学芸研究部調査研究課東洋室主任研究員）

(2) 主な内容
特別展「京都・南山城の仏像」では、京都の南山城地域に所在する寺院の仏像等の展示を予定している。同地域に所在する京都・浄瑠璃寺の地蔵菩薩立像（重文）が当館に寄託されており、その調査及び写真撮影を実施した。当該作品は、平安時代中以降に流行した「定朝様」という作風が見られる作例のひとつとして知られるものの、これまで詳細な比較検討は行われていなかった。4 年 3 月～5 月にかけて当館で開催した特別展「空也上人と六波羅蜜寺」に出品された京都・六波羅蜜寺の地蔵菩薩立像（重文）と作風が近似していることから、六波羅蜜寺像の調査時に得た知見をもって、当該作品との作風上の比較検討を行った。また、制作当時の彩色文様を留めており、色彩や文様のモチーフの詳細な調査を実施した。また、同じく当館寄託の京都・浄瑠璃寺の広目天立像（四天王立像のうち）（国宝）について、制作当時の彩色文様の調査を実施した。

12 月 1 日の調査（写真撮影）

5 年 3 月 17 日の調査

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京都の南山城地域は知名度こそ決して高くはないものの、京都と奈良の間に位置し、奈良時代以降、独自の仏教文化が育まれてきた。そこに伝わった作品の調査研究を実施したことで、作品を通じて当該地域の歴史や彫刻史における意義の高さを浮き彫りにすることができた。展覧会が開催される5年度は、寄託品だけではなく現地での借用予定作品の事前調査を実施し、展覧会の内容や図録等に反映させていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4 年度の調査では、過去の展覧会に出品された類品との比較検討を行うという手法を用いて調査対象作品の新たな特徴を見出し、それによって今後の展覧事業の企画等に資するという中期計画に沿うことができた。4 年度は寄託品の調査のみであったが、展覧会が開催される 5 年度は事前調査を数多く実施し、また 6 年度以降は展覧会会期中に収集した作品情報および画像データを用いて、逐次、定期刊行物などで報告していく。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-8

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア　特別展「やまと絵―受け継がれる王朝の美―」に関する調査研究

【事業概要】
5年秋実施の特別展「やまと絵―受け継がれる王朝の美―」にかかわる調査研究。本展は前近代の日本絵画において主要な主題であったやまと絵について、平安から室町時代までの優品によって紹介するものである。本プロジェクトでは主に館蔵及び寄託の古代・中世やまと絵の調査研究を実施した。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長　土屋貴裕

【主な成果】
(1) 調査の概要
本展出品予定の作品のうち、約3割80件程度が当館の所蔵もしくは寄託品である。画像等の撮影は既に実施しているものが大半のため、詳細な実物観察を行った。特に画像等では細部の表現の確認しにくい中世やまと絵系屏風を対象とし、重要文化財「浜松図屏風」(A-11533)、重要文化財「浜松図屏風」(A-12476)、重要文化財「日月山水図屏風」(A-1065)、重要文化財「月次風俗図屏風」(A-11090) の4点を取り上げた。
(2) 調査の成果
調査対象はいずれも室町時代やまと絵屏風の代表作とも呼べる作品である。一部作品には室町時代やまと絵屏風に特有の、下地全体に雲母を掃くなどの特徴があり、画像では確認しにくいこれら細部表現について知見を深めることができた。これら雲母の使用に加え、この時代のやまと絵屏風には金銀の加飾が特徴として挙げられるが、一部の黒線について、通常の墨線か黒化した銀によるものなのか判別できないものがある。これらについては目視では結論を出すことが叶わなかったが、今後蛍光X線分析など、科学的調査による分析が有効であるとの見通しを改めて確認することができた。

重要文化財「浜松図屏風」(A-12476) 調査の様子

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、借用予定作品の調査等を実施することは断念したが、館蔵の作品を詳細に調査しえたことは大きな成果である。とりわけ調査対象とした室町時代のやまと絵屏風は現存作例も少なく、本研究成果は今後の作品研究の基礎となることが期待される。本研究の成果は5年度の特別展における会場解説、図録解説等に反映する。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品調査の実施、調査研究を進めることができている。館蔵品以外の室町時代やまと絵屏風の調査研究については、5年度以降、展覧会での借用時の調査を含め、さらに進めていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1412Bア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア　特別展「河内長野の霊地　観心寺と金剛寺－真言密教と南朝の遺産－」に関する調査研究 ((4)-①-2))

【事業概要】特別展「河内長野の霊地　観心寺と金剛寺―真言密教と南朝の遺産―」の実施に向けて調査研究を行い、その成果を展示、図録、会期中の講座、ホームページなどを通して公開する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室研究員　井並林太郎

【主な成果】

平成 28 年度（2016）から令和元年度（2019）の科研調査と 3 年度までの補足調査によって、展示作品の基礎調査と撮影はほぼ完了していたので、4 年度はそれらの成果をもとに、地域や寺の歴史、あるいは各分野の作品にかかわる先行研究を改めて博捜し、知見をまとめて展示のほか図録解説や講座で発表した。

たとえば、科研調査では重要文化財『遊仙窟』（天野山金剛寺蔵）の欠失部分を発見し、全体の約 95 パーセントを復元できたことについて、図録にコラム「金剛寺本『遊仙窟』断簡、発見の意義」を掲載し、100 年以上にわたる金剛寺での同書の復元経緯も記して、その意義をわかりやすく示した。この成果については、講座やウェブサイト（虎ブログなど）でも積極的に情報発信した。また、「金剛寺に伝えられた三躯の大日如来坐像」や「天野山金剛寺所有木造大黒天像の像内銘」（いずれもコラム）では、調査やその後の考察によって明らかになった彫刻作品の新知見を示し、古代中世の彫刻史・仏教美術史研究に資する情報の公開に努めた。その他、図録では巻頭論文や作品解説においても、美術史、仏教史、日本史などに関わる調査研究の幅広い成果を発信した。

また、京都市教育委員会や河内長野市教育委員会と連携し、河内長野市の高校生が京都市の中学生に本展の内容を解説する催しを企画するなど、地域間の人的交流を育む新たな教育普及活動にも取り組んだ。

なお、展覧会終了後も所蔵寺院の理解の下、展示品の一部を寄託品として預かり、万全な環境での保管を期すとともに、今後の展覧や研究にも役立てる環境を整えた。

重要文化財　鉄燈籠（観心寺蔵）展示作業風景

【備考】展覧会会期　7 月 30 日～9 月 11 日
展覧会図録の作成　多言語による展覧会鑑賞ガイドの作成　記念講演会 5 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の中核部分は過年度事業ではあるが、調査を踏まえて研究を熟成させ、その成果を展覧会という形で一般に還元することができた本調査研究は、文化財の保護・研究・発信を使命とする当館にとって、理想的な形で遂行できた事業であったといえる。調査で見出した作品を実際に観覧できる展示そのものや、新知見を盛り込んだ図録によって、来場者の多くに作品や寺の魅力や、文化財保護・研究の意義を、存分に発信することができた。調査を通して文化財の記録と保全を期するのはもちろんのこと、展示によって京都と歴史的に繋がりのある地域寺院の営みを通史的に明らかにしたことで、日本史・仏教史・美術史いずれの分野にも資する成果を示した本調査研究事業は、多分野の研究員を擁する当館が、その社会的使命を果たした点においてきわめて高い意義を有するものであり、A評価が妥当と考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本特別展に関する調査研究は、当館が 1980 年代より進めている「社寺調査」の一環であり、その成果発表を 10 年ぶりの自主予算による特別展である本展のようなかたちで完遂できたことは、単に学術的成果を挙げたことにとどまらず、当館がその使命の根幹である文化財の保護・調査研究・発信のいずれにおいても、その社会的責務を果たしたものとして、高く評価できる。また、当初特集展示として計画していた本展覧会を、調査研究成果の大きさを考慮して特別展へと昇格させ、1 年間に 3 回の特別展を開催したことは、中期計画では年 1～2 回程度としていた目標を大きく上回るものでもあるため、Aと評価する。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 1412Bｲ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 イ　特別展「京に生きる文化　茶の湯」に関する調査研究　((4)-①-2))

【事業概要】
特別展「京に生きる文化　茶の湯」実施に向けて調査研究を実施し、その成果を展示、図録、教育普及や会期中の講演会などを通じて広く一般に公開する。

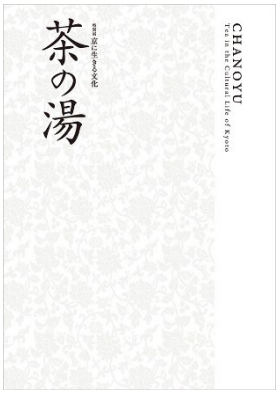
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	調査・国際連携室長　降矢哲男

【主な成果】
「茶の湯」に関する調査研究は、これまで盛んに行われてきたこともあり、研究分野としては新規開拓の難しい分野であるといえるが、今回の展覧会に向けた調査研究では、「茶の湯」が京都を中心として形づくられた文化であることを示すべく、京都御所や京都の古社寺伝来品の調査を意識的に行い、次に示すような研究上の新たな知見を得た。

・京都御所に伝来した類品の調査を通して、京都の霊鑑寺に孝明天皇遺愛品として伝わる台子の小襖が、三上左近将曹によって描かれたものであることが判明した。また、台子と台子に付属する下船の組み合わせが、慶応３年（1867）に明治天皇の御用品として調進された京都御所伝来品と酷似しており、孝明天皇遺愛品という霊鑑寺の伝承の確からしさを確認した。
・京都の金地院が所蔵する国宝「秋景冬景山水図」に付属する書状の史料的な吟味を通して、そのうちの１通「三章令彰書状」が慶長 20 年のものであることを明らかにした。

なお、上記研究成果を、「南蛮毛織」と呼ばれる銅製品の産地をイラン地方とする最新の研究所見とともに、図録の特論や展示品解説に反映させた。

【備考】
・図録総論１本
・図録特論２本
・図録作品解説 245 件
・会期中図録販売冊数 8760 冊
・図録購買率 9.8％



特別展『京に生きる文化　茶の湯』図録

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「茶の湯」に関する展覧会は、既に数多く開催されてきており、新たな研究成果を反映させて展覧会を構成することが甚だ難しいが、「茶の湯」文化形成の中心的な舞台である京都にことさら焦点を当て、調査・研究を進めたことによって、いくつかの新たな研究上の知見を得ることができた。新たな知見という研究上の成果を、展示・図録という形で速やかに公開・公表することができたためＢと評価する。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルス感染症の影響により、実地調査を進める上での困難は非常に大きかったが、各分野の研究員の努力により、展覧会や図録に新知見を盛り込むことができた。調査・研究成果を踏まえた図録の内容が評価されたこともあってか、会期中の図録販売冊数は 8760 冊、総観覧者数に対する図録の購買率 9.8％と、コロナ禍下の展覧会としては高い数値を記録することができたため、中期計画に対して一定の成果を挙げることができたと考え、Ｂと評価する。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1412Bｳ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ウ　特別展「親鸞　生涯と名宝」に関する調査研究　((4)-①-2))

【事業概要】特別展「親鸞　生涯と名宝」の実施に向けて文化財調査・研究を行い、その成果を展示・図録・会期中の講座などを通して、広く一般に公開する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員　上杉智英

【主な成果】

本事業は、多くの人を魅了し、門徒数が国内最大を誇る浄土真宗の開祖、親鸞（1173～1262）の生誕 850 年にあたり、生誕の地であるとともに、臨終の地でもある京都を会場として開催する特別展に向けての調査研究である。親鸞や本願寺に関する展覧会は、遠忌毎に各所で開催されているため、これまでの展覧会と如何に差異をつけるのかが大きな課題であると考え、本調査研究を進めるにあたっては、総合性と新規性の 2 つの視点を特に意識した。

作品調査・撮影風景　　東本願寺

総合性では、展覧会に真宗十派より組織される真宗教団連合の特別協力が得られたことを踏まえ、十派全ての寺院からの出陳を通して、現存する親鸞の自筆自賛の名号 4 件、自筆書状 12 件の全ての展示を実現した。また、東本願寺・専修寺・西本願寺が所蔵する『教行信証』の親鸞自筆本や鎌倉時代の書写本を 3 件並べての展示も、史上初めてのことである。

新規性では、これまで親鸞に関連する作品とは考えられていなかった「藤原範綱消息」「門葉記」「慈鎮和尚伝」「慈鎮像」を敢えて取り上げ、新たな親鸞像の提示に努めた。とりわけ後 2 者は、館蔵品・寄託品であり、普段からの収蔵品調査・研究の成果を展示に反映させたものである。

収蔵品はもちろんのこと、各機関の協力を得て、東西本願寺・専修寺・龍谷大学図書館・大谷大学博物館・妙源寺・叡山文庫等でも調査・写真撮影を実施し、その成果を図録に反映させた。

【備考】
・出陳件数　180 件（うち国宝 11 件、重要文化財 75 件）
・展覧会会期　5 年 3 月 25 日～5 月 21 日（予定）
・展示図録の作製、多言語による解説、記念講演会 7 回（予定）、文化財からうかがえる親鸞の生涯に関する映像上映

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	総合性と新規性という 2 つの視点による作品選定により、よく知られた親鸞像を改めて紹介するだけでなく、既存の親鸞像の枠を広げるという目標を達成することができた。特に、完全な新出作品ではないものの、既に知られている作品を親鸞というフィルターで改めて調査・研究することにより、親鸞に関する歴史資料としての新たな側面を見いだしたことは、今後の親鸞研究にも少なからず寄与できたのではないかと自負している。図録も、学術的に充実した内容のものとすることができたが、本調査研究を通して得られた知見や情報を必ずしも盛り込み切れていないことと、やや書跡に偏った内容となり、工芸品の展示がほとんどないことは、展示としていささかバランスを欠いたと思われるので、この点に鑑みてＢと評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	事前調査や日常的な館蔵品・寄託品の調査を通して、多くの新知見を得ることができ、それを一程度まで展示・図録に反映させることができた。また、新規撮影により新たな画像資料も増やすことができており、中期計画を順調に遂行したと考える。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1412Bｴ

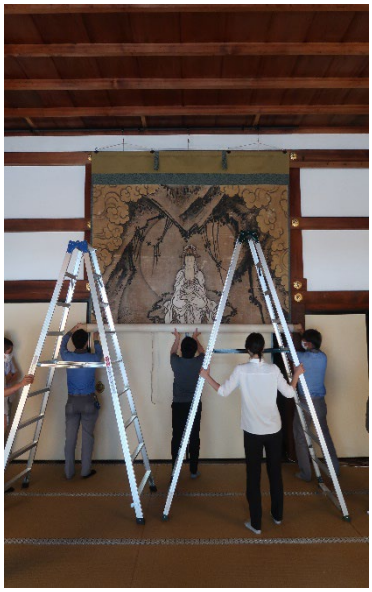
業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 エ　特別展「東福寺」に関する調査研究　((4)-①-2))

【事業概要】
東京国立博物館及び当館で開催する特別展「東福寺」の実施に向けた大規模な文化財調査を行い、その成果を図録等で示した。また５年度の当館開催に向けて、展示公開や教育普及等に向けての準備を実施した。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室研究員　森道彦

【主な成果】
京都五山の一角を占める東福寺は、我が国の禅宗寺院のなかでも随一の巨大な伽藍と膨大な文化財を擁する、中世禅宗文化の殿堂である。本山及び塔頭が所蔵する国指定の美術工芸品は国宝５件、重要文化財 87 件に達し、未指定文化財の数も膨大で、一寺院の蔵品としては質量ともに比類ない。
東福寺を大きく特徴づけるのは、鎌倉から室町時代にかけての大勢のすぐれた留学僧の活躍や貿易への関与、またそれに伴う東アジアの国際交流をうかがわせる、巨大で大陸的な文物の数々である。東福寺派の僧たちは、大陸文化に学びながら典籍・書跡の収集や文筆活動、書画制作などに従事し、際立った個性を発揮して東福寺文化圏ともいうべき場を作り上げた。ことに絵画に関しては、日本水墨画の黎明期を支えた人物に東福寺関係者が多く、特に南北朝～室町時代に活躍した同寺の画僧明兆は、雪舟や狩野派などその後の多くの画人たちに画聖として学ばれ、絵画史上に巨大な足跡を残した。
東福寺を総合的に紹介する展覧会は、日本史や美術史など各方面で待ち望まれてきたが、長らく果たされず、今回が初めての機会となる。このたび東福寺の全面協力を得、長期間かけて本山及び有力塔頭が所蔵する美術工芸品をかなり悉皆的に調査し、写真撮影を実施してアーカイブ化した。多くの新出文化財が見出されたほか、従来よく知られる名品についても定説の変更をはじめとする新たな重要知見が少なからず得られ、その多くを図録に反映し、成果として打ち出すことができた。展覧会出品物以外にも大規模な寺宝調査・撮影を実施し、当館の中世文化に関する研究情報の著しい充実につながった。


作品調査・撮影風景　東福寺方丈

【備考】展覧会図録の作成
科学研究費「仏教儀礼的観点に基づく明兆作品の総合的研究」を活用した関連調査・撮影の実施
展覧会期：5 年 10 月 7 日（土）～12 月 3 日（日）予定
※先行して東京国立博物館で 3 月 7 日（火）に開幕済
出品件数：208 件　及び　別途、特別出品 2 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	書画、彫刻、工芸品等各分野にわたって広範な事前調査を実施し、多くの新出作品や、重要作品にまつわる新知見を得て、展示計画や図録に盛り込むことができた。対象物が非常に大型で、撮影や調査が難航することも少なくなく、また見出した重要作例の全てを網羅的に紹介しきれたわけでもないが、当館にとって貴重な研究資料や写真素材を多数蓄積することができ、今後の展覧会計画に大いに生かされるものとなった。東福寺の所蔵品の特性上、近世の美麗な金碧障壁画など一般の観覧者に訴えかけやすい華やかな蔵品が全体的に少なく、訴求効果の点で必ずしも満点ではないかもしれないが、壮大な伽藍空間をはじめ場の魅力は十分に伝える展示計画となったと思われる。図録も学術的に充実した内容となっている点に鑑み、Ｂ評価としたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大規模な寺内調査を幾度も実施し、担当研究員による事前の作品把握を十分に行えた。写真アーカイブも非常に充実し、これらを反映して、展覧会の構成や作品選定にも議論を尽くすことが出来、日本史や美術史学界から期待を寄せられるこの主題に大いに応える内容に仕上がったといえる。 ただし東福寺は日本の中世文化を考える上で欠かせない存在であり、寺内外にはまだ未調査の重要資料や作品が少なからず眠っているものと判断されることから、5年度の展覧会終了後も継続的に調査研究を実施しつつ、当館の他の展示や研究事業に生かすなど、その成果の社会還元に努めていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1412Cア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2）特別展等の開催に伴う調査研究 ア　特別展「中将姫と當麻曼荼羅」に関する調査研究((4)-①-2))

【事業概要】
本展覧会の主要出陳品となる貞享本當麻曼荼羅の作品調査を行うとともに、関連する諸作品についても調査を実施し、より深い作品理解を得る。當麻曼荼羅と中将姫に対する信仰の歴史を、関連作品の調査を通じて広い視野をもって捉えることで、作品が示す新たな文化史的価値を提示する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員　北澤菜月

【主な成果】
(1)調査概要
・貞享本當麻曼荼羅（當麻寺蔵）について、蛍光エックス線による顔料調査、裏彩色の調査、細部描写の調査、軸内納入品の調査などを行うとともに、詳細な分割写真を撮影した。その成果は展覧会の出陳品選定、図録の図版や総論、解説などの内容に反映された。
・展示内容に深く関わるが展示がかなわない作品である綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）、裏板曼荼羅（當麻寺蔵）、文亀本當麻曼荼羅（當麻寺蔵）についても、特別展を見据えて撮影及び調査を進め、その成果は貞享本當麻曼荼羅の研究成果とともに、図録の図版、総論、解説や会場内に設置したビュアーに示した。
・當麻曼荼羅信仰と中将姫信仰に関する作品について、これまで展覧会という場では詳しく紹介されたことのなかった近世・近代の、芸能資料や引札資料などを含めた幅広い資料について調査を行い展示に活用した。
(2)展示会場・図録
・貞享本當麻曼荼羅及び、展示内容に深く関わるが展示がかなわない作品である綴織當麻曼荼羅、文亀本當麻曼荼羅の三つの曼荼羅について、国立情報学研究所の協力を得て、細部まで鑑賞・比較ができるビュアーを開発し、会場内に設置し、観覧者に分かりやすく示した。
・同様に展示がかなわない作品である裏板曼荼羅の画像を資料として図録に掲載し、より深い理解を促すようにつとめた。また、貞享本當麻曼荼羅、綴織當麻曼荼羅、文亀本當麻曼荼羅の軸内納入品文書について、翻刻を行い図録に掲載した。

【備考】
図録には論考として、総論１件、各論３件を、資料として軸内納入品文書および軸銘文の翻刻を掲載。
公開講座を次の２回行った。①「貞享本當麻曼荼羅とその周辺」(講師：北澤 菜月　奈良国立博物館学芸部主任研究員、8 月 6 日)、②「中将姫説話の展開」(講師：日沖 敦子 氏　文教大学文学部日本語日本文学科准教授、8 月 20 日)。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・重要文化財に指定される貞享本當麻曼荼羅（當麻寺蔵）の修理成果を十分に活用し、広くそれを公開する機会とすることができた。また貞享本を軸にすることによって、これまで詳しく展覧会として取り上げられることのなかった、近世の當麻曼荼羅信仰を紹介することができた。 ・貞享本當麻曼荼羅（重文、當麻寺蔵）に関連する重要な作品について、展示作品以外についても調査を行い、特別展でその成果を公開することができた。 ・當麻曼荼羅と中将姫の信仰を近代までを視野にいれて紹介することによって、日本における女性の信仰史という視点を含めて提示することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	奈良の古寺古社と連携しながら調査・展示活動を進めるのは当館の基本かつ長期的な方針であり、今般の事業は平成 25 年（2013 年）に当館で開催した特別展「當麻寺」等を通じ、同寺との間に築いた良好な信頼関係のもとに行うことができた。その点で中期計画の実施状況に照らして、十分な成果を挙げたと考えられる。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1412Cｲ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2）特別展等の開催に伴う調査研究 イ　「第７４回正倉院展」に関する調査研究((4)-①-2))

【事業概要】
特別展「第７４回正倉院展」の開催に当たり、円滑かつ安全に展覧会を遂行し、最新の成果を広く国民に周知するため、当該年度に出陳される宝物を含む宝物全般についての調査・研究、展示環境について調査・研究、観覧環境についての調査・研究、その他宝物の輸送方法など、多角的に研究を行う。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室　研究員　三本　周作

【主な成果】
(1) 宝物についての調査・研究
・宮内庁正倉院事務所の協力を得て、出陳宝物に関する調書を閲覧し、宝物に関する詳細な情報を収集した。
・上記で得た知見は、展覧会図録の作品解説や論考（宝物寸描）、会場での解説パネル、公開講座などに反映した。
(2) 展示環境についての調査・研究
・学芸部保存修理指導室を中心に、これまでの展覧会開催時の展示室・展示ケースの温湿度データを精査し、適切な環境下での宝物の展示を検討した。
・会期中も展示室や展示ケースの温湿度を常時監視し、必要に応じて設定変更を行うなど対処し、適切な保存環境を維持した。
・上記については宮内庁正倉院事務所との事前協議や逐次の情報共有を行った。
・会期終了後には塵埃の検査を実施した。
(3) 観覧環境についての調査・研究
・3 年度の入館実績や昨今の感染状況を踏まえて適切な入場制限のあり方を検討し、大きな混乱なく 3 年度より多くの方に鑑賞いただくことができた。また、車椅子を利用される方にも見やすい展示とするため、展示台を低くするなど種々の工夫を検討した。
(4) その他
・宝物の安全な輸送方法について、宮内庁正倉院事務所職員と検討した。
　また、実際の輸送時には奈良県警の協力による防犯の面でも安全な輸送を実施した。
・出陳宝物の魅力的な展示方法について、造作・照明業者と検討した。

【備考】
・宝物に関する内部検討会を 2 回実施した。
・新たに執筆された解説文について、学芸部職員全員が参加する研究会で検討した。
・公開講座　2 回
　髙畑　誠 氏（宮内庁正倉院事務所保存課保存科学室員）「正倉院宝物の保存―宝物を覆う―」
　三本　周作（当館学芸部工芸考古室研究員）「正倉院の仏具－奈良時代の寺院と法会の世界－」

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・新型コロナウイルス感染症への対応が強いられる中、時間当たりの入場人数やチケット販売方法など事前に周到な検討を重ね、大きな混乱なく展覧会を運営することができた。3年度に引き続き、インターネットを通じた動画配信（読売テレビ制作映像、読売新聞社主催の講演会の模様など）も行われ、広範な広報が図られるとともに、来場が叶わなかった人にも楽しんでいただけるような取り組みも充実された。 ・宮内庁正倉院事務所が継続して実施している宝物に関する調査研究、及び当館の研究員による調査研究の成果を、会場の題箋やパネル、図録、公開講座などで発信することで、宝物研究の最前線に触れていただける場を提供することができた。 ・正倉院宝物の安全の確保が、正倉院展を開催するための大きな前提である。4年度もこれまでの実績を踏まえつつ、会場の温湿度環境などの現状を正確に把握し、また宮内庁正倉院事務所と密な連絡をとりながら、着実に安全性を確保することができた。特に4年度は、宝物の梱包方法についてより安全性の高い手法が検討され実行されたが、これらは将来の展覧会に貢献できるものである。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画においては宝物に関する調査研究とその成果の発信が重点項目となっている。中期計画の 2 年度となる 4 年度もコロナ禍の影響で来場者数制限やイベントの縮小などの制約が伴ったが、展覧会を安全な形で開催し、所期の目標を達成できたものと考える。 宮内庁正倉院事務所の協力を得て、調書の閲覧や実見調査を実施し、出陳宝物を中心とした宝物に関する情報を収集・蓄積することができた。また、この調査研究の成果については、会場での解説パネルや図録、公開講座、動画配信などを通じて広く発信することができた。特に 4 年度は解説パネルの充実に力を注ぎ、よりわかりやすい展示を実現させ、宝物に親しんでいただける場を提供することができた。 上記のような観点から、当該項目の中期計画を着実に遂行できている。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1412Cウ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2）特別展等の開催に伴う調査研究 ウ　特別展「春日大社 若宮国宝展」に関する調査研究((4)-①-2))

【事業概要】

本展覧会の主要出陳品となる国宝・若宮古神宝類の全貌把握と作品調査を通して、平安時代の工芸技術の高さや美意識を探求する。また、約 900 年間の伝統をもつ造替事業について、春日大社に残る史料や遺品を調べ、その文化継承の歴史の重要性を認識し、先の作品調査成果と併せて展覧会の構成や解説に反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　吉澤悟

【主な成果】

(1)調査概要

・国宝・若宮御料古神宝類の金鶴及銀樹枝、銀鶴洲浜台及び木造彩色洲浜形などについて、3 年度より当館の CT や蛍光 X 線分析等で素材や構造分析を続けてきた。その成果を春日大社では神宝の復元新調に活用し、同時に当館では展覧会図録等に反映し、さらに展覧会場で完成した復元新調品を初公開した。

・若宮社より撤下された獅子・狛犬の調査を行い、同像が鎌倉時代に遡る優品と判明した。その調査成果を図録等に反映させ、原品を展覧会で初公開した。

(2)展示・図録の工夫

・国宝・若宮御料古神宝類の毛抜形太刀や平胡籙の原品及び復元模造品を比較検討し、展覧会ではパネル等を多く活用して、平安時代の高度な技術と煌びやかさを観覧者に分かり易く伝えた。

・春日大社の式年造替の歴史を調べ、それが単なる一神社の社殿修繕の歴史ではなく、社殿はもとより調度品や装束、祭儀や有職を含めて古制を伝える文化継承事業であったと認識、これを展覧会の本テーマに据え直し、解説等でもその意義を伝えることにした。

・式年造替やおん祭（若宮社の祭礼）の理解を深めるため、社殿から撤下された千木や日使装束（日使はおん祭における奉仕者行列の主役的立場。関白の束帯を着る）などの現物を展示に組み込んだ。

千木の展示

【備考】

図録論考　総論１、展示概説１、各論２により、展示品の調査成果を盛り込んだ

公開講座　松村和歌子（春日大社国宝殿）「王朝文化が蘇る 春日若宮古神宝とその復元」

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・とかく社寺の「名宝展」になりがちな展覧会において、若宮社の特性や神宝の高度な技術、式年造替の意義など、新たな視点や研究成果を多く採り入れた展覧会にすることができた。 ・平安時代の名工による古神宝（国宝）原品と、近年の人間国宝の手による復元模造品を並べて展示し、平安貴族が賛嘆した煌びやかな世界を実感できるよう展示工夫を行った。これは春日大社との綿密な打合せや事前調査による成果である。 ・若宮社の獅子・狛犬など未調査作品の調査を実施し、その年代や作風などの成果を展示や図録で公表できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	奈良の古寺古社と連携しながら調査・展示活動を進めるのは当館の基本かつ長期的な方針であり、今般の事業は良好な信頼関係のもとに完遂した点で、十分な成果を挙げたと考えられる。これは次年度以降も恒例の「おん祭展」等に引き継がれるものであり、中期計画における着実な歩みと評価できる。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1412Dｱ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア　特別展「加耶」に関連する調査研究((4)-①-2))

【事業概要】
特別展「加耶」の実施に向けて、韓国からの借用予定作品と、国内各地からの借用資料（予定を含む）を調査した。成果は特別展「加耶」のディスプレイ、図録等における解説、リレー講座、さらに『東風西声』所載の論文において公表した。

【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	課長　白井克也

【主な成果】
韓国からの借用作品について、当館に先立つ巡回館であった国立歴史民俗博物館において、9 月 26 日～30 日、11 月 3 日、12 月 12 日～15 日の 3 度にわたって調査した。加耶の特徴的な鉄製品である有刺利器に関する知見は、当館での展示解説に反映した。加耶各地の土器の製作技法についての知見は、新羅土器の製作技法とも比較した。
国内の借用（予定も含む）作品については、甘木市教育委員会所蔵品（7 月 4 日）、宗像市教育委員会所蔵品（10 月 14 日）、四條畷市教育委員会所蔵品（10 月 20 日）、大阪府教育委員会所蔵品（10 月 20 日）、市原市教育委員会所蔵品（11 月 2 日、11 月 28 日）、木島平村所蔵品（11 月 25 日、12 月 21 日）について調査した。
このほか、東京国立博物館では関連作品の調査（7 月 8 日）を行い、また、借用予定作品の最新の研究状況に関しても意見交換した（11 月 8 日）。
これらの調査研究成果は、当館での特別展「加耶」展示解説や図録のコラム、5 年 2 月 4 日、11 日に館員が登壇して実施したリレー講座、さらに『東風西声』所載の論文「加耶の広口壺」においても公表した。

【備考】

国立歴史民俗博物館での展示調査

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展「加耶」は、加耶を取り上げた大規模な展覧会として国内では約30年ぶりであるが、さらに当館では巡回作品による第一部「加耶の興亡」に加えて、国内所蔵作品による第二部「渡来人」を追加したため、第一部、第二部の双方に関連して、作品を調査した。その結果、3～6世紀の倭（当時の日本）と加耶のかかわりを多面的にとらえ、当時の日韓交流の実態に関する新たな歴史像を提示することができた。 その成果は展覧会の構成、図録の解説やコラム、リレー講座など、さまざまな形で発信した。 以上から年度計画を達成したと判断し、Ｂ評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は 4 年度実施の特別展の事前準備のために実施した。当館は九州を中心としたアジアや世界との文化交流を重視する理念から、本研究の成果が文化交流展示の充実に資するところは大きい。当館では、最も近い外国である朝鮮半島の関連作品は、所蔵品、寄託品とも必ずしも多くなく、今後の収集、展示に活かすためにも、特別展終了後も関連研究の継続が今後の課題である。以上の成果より、中期計画を円滑に推進したと評価し、左記の評定とした。

【書式Ｂ】　施設名 文化財活用センター　処理番号 1413Hア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ア　レプリカやVR等先端技術を使った、文化財の活用についての調査・研究((4)-①-3))

【事業概要】

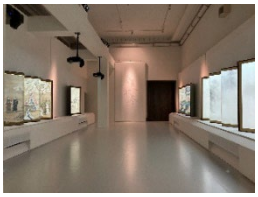
多くの人に文化財に親しむ機会を提供することを目的として、先端技術による文化財のレプリカやデジタルコンテンツの開発に係る調査研究、文化財の活用事例についての調査・研究を行った。それらの知見をもとにコンテンツの開発と体験型展示等を実施し、それらの実施事業を通して、効果の測定並びに人々のニーズの調査を行った。

【担当部課】	本部文化財活用センター	【プロジェクト責任者】	副センター長　丸山士郎

【主な成果】

(1)キヤノン株式会社、凸版印刷株式会社、シャープ株式会社、NHKとの連携による共同研究プロジェクトを継続して実施し、コンテンツの新規開発・改良を行った。キヤノン株式会社、シャープ株式会社、NHKと実施した研究の成果については、東京国立博物館創立150年記念特別企画「未来の博物館」として一般公開し、150,296名（1日平均3,131名）が鑑賞した。

シャープ株式会社との共同研究により制作した、8Kで文化財「みほとけ調査」は「2022年度グッドデザイン賞」（主催：公益財団法人日本デザイン振興会）を、2年度よりNHKと東京国立博物館が3年間共同研究として取り組んできた「８K文化財プロジェクト」（文化財活用センターはマネジメントを担当）が、教育コンテンツのみを対象とした国際コンクール「日本賞」においてデジタルメディア部門の最優秀賞（経済産業大臣賞）を受賞した。



東京国立博物館創立150年記念 特別企画「未来の博物館」実施風景（各コンテンツはNHK（左）、キヤノン（中央）、シャープ（右）と連携して制作）

(2)レプリカ制作やデジタルコンテンツ制作に関して優れた技術を持つ企業・機関等や、それらを使ったコンテンツの公開、活用を行っている施設の視察・インタビューを行った。

(3)機構内各施設や地域のミュージアムと連携し、レプリカやデジタル技術を活用したコンテンツ開発と体験型展示、教育プログラム、体験者へのアンケート調査を実施した。

(4)「2021年度ぶんかつアウトリーチプログラム報告書」を刊行した。

※4年度は新型コロナウイルスの影響により国外調査ができなかった。

アウトリーチプログラムの様子

【備考】

(2)主な調査先／名探偵コナンの脱出ゲーム、Inter BEE、ミラクルマイル株式会社

(3)アンケート調査実施事業／東京国立博物館創立150年記念 特別企画「未来の博物館」（10月18日～12月11日）、日本美術のとびら（6月18日・2023年1月28日に来館者調査）、デジタル法隆寺宝物館（1月31日～2月28日〔日本博アンケート〕）、8Kで文化財「ふれる・まわせる名茶碗」（愛知県陶磁美術館4月1日～3月5日）、ぶんかつアウトリーチプログラム（4年度全25回実施）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・企業等との共同研究プロジェクトの成果を「未来の博物館」として公開し、15万人を超える来館者が体験した。また、開発したコンテンツが各種賞を受賞するなど、文化財活用の新しい可能性を示唆する活動として高い評価を得た。 ・文化財に親しむ手法の拡大を目指して、企業等の先進事例の調査・研究を行った。そこで得た知見をもとに、コロナ禍でも安全に実施可能な文化財体験、地域の活性化の核となる文化財体験を開発・提供することによって、研究成果を一般にも発信することができた。 ・地域の博物館や教育機関との連携を深め、先進事例の調査、コンテンツ開発、一般への公開・検証を合わせて行うことで、文化財活用の新たな道を拓く有意義な実施手法を構築する。また、今後はより広い範囲の地域・会場で簡便に活用してもらうためのコンテンツの一部改修なども行う。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の2年目として、文化財の理解促進に資する展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究等の成果を新たな事業に反映させ、一般にも発信することができた点において、中期計画を順調に遂行できている。今後は、より広い地域の博物館・教育機関をはじめとする組織との連携を深めて、「未来の博物館」で好評を得たコンテンツ等を各地域において公開しやすく、地域の活性化にも貢献しうる文化財として活用できるコンテンツに改善していくために、調査・研究を深めることが課題となる。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 1413Aア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ア　博物館環境デザインに関する調査研究

【事業概要】
当館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。

【担当部課】	企画課デザイン室	【プロジェクト責任者】	矢野賀一

【主な成果】
(1)「本館特別１室展示室改修」「未来の博物館（本館 T3 室・東洋館)」「本館２階特別１室テーブルケース製作設置」「博物館でアジアの旅」「本館１階 14 室展示ケース製作設置」「親と子のギャラリー『翼と羽』」「本館１階 14 室展「未来の国宝」展示デザイン」「法隆寺宝物館 M2 階改修」「博物館で初もうで」「広報展」「新収品展」「野口宇宙飛行士」の展示デザインを行った。
(2)「お正月・お花見」のポスター、「150 周年記念グラフィック」「サイネージサイン」「キャプションフォーマット」「チケット」のデザインを行った。
(3)本館１室解説、特別１室の解説パネルのサイネージ化を行った。

本館１階 14 室展示ケース製作設置

つたえるつなぐ博物館広報のあゆみ

【備考】
・他館のデザイン調査：国内の博物館・美術館でのデザインを調査し、特に４年度においては総合文化展の展示デザインのための参考とした。
調査先／大阪市中之島美術館、藤田美術館、江之浦測候所、MOA 美術館

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	年度当初の目標を達成している。国内外の美術博物館デザインの最新事例を調査した成果を、総合文化展示及び特別展への展開することが達成されている。5年度は引き続き国内外の美術博物館デザインの調査を行う。また最新の情報技術など、本館の総合文化展示や展示室のスマート化などへ展開できるよう調査研究を進める。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の2年目として、本館特別1・2室で特集展示するため、高透過低反射合せガラスや小型LED照明器具を用いた展示ケースをデザインし、観覧環境の向上につながる改修を行った。 5年度以降は展示照明のLED化、3Dデザイン、3Dプリンターを使った展示デザイン、3Dプリンターを使った支具の製作などの調査研究及び本館展示改修のデザインを進める予定である。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1413Aイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 イ　博物館教育に関する調査研究

【事業概要】さまざまな来館者に向けて、博物館に親しみを持ち、鑑賞体験を豊かにすることを目的とした、博物館教育の理論を基盤とした調査研究と実践を行った。

【担当部課】	博物館教育課	【プロジェクト責任者】	課長　鈴木みどり

【主な成果】

(1) 3年度に引き続き、オンラインプログラムの開発と運営に関する研究と実践を行い、対面でのプログラムが困難な時期において、ワークショップ、スクールプログラムの一部、ギャラリートーク、キャンパスメンバーズ連携セミナー、ボランティア研修等で、事前視聴動画やウェビナー等を利用した同時配信を実践した。

(2) 日本文化体験プログラムとして、トーハク新時代プランに基づいた「日本文化のひろば」を引き続き実施し、外国人のみならず、日本人にとっても日本文化に改めて親しみを持てるアプローチを検討、研究し実践した。

(3) 障がい者に向けたプログラムの開発・調査研究を継続して行った。博物館教育課内に「みんなの博物館」プロジェクトを立ち上げ、室の枠を超えて、職員と客員研究員で事例研究等を通して、共通意識を持って実践に繋げた。また、ボランティアバリアフリー班の研修を行った。視覚障がい者に対しては、盲学校のためのスクールプログラムの実践や、新たに漆の技術を表した触察ツールを制作、聴覚障がい者に対しては講演会やワークショップでのUDトークやヒアリングループの使用を行い、障がいを持たない人にも理解補助になるようユニバーサルデザインを意識してコンテンツを作成した。また新たに感覚過敏の来館者を対象に「センサリーマップ」の調査研究を行い、公式ウェブサイト上に制作物の掲載と、「トーハクなび」において、新たなコースを開発し公開した。センサリーマップ研究は国内の博物館では先駆的な事例であり、シンポジウム分科会で発表したほか、他館への助言を行った。

(4) 低年齢層を含むファミリーグループへのプログラム開発と運営、調査を「月イチ！トーハクキッズデー」において12回行い、よりスムーズな運営と来館者の博物館体験の充実を図れるよう、年間を通じて改善を行った。

(5) 未就学児童から高校生までが作品鑑賞をできる仕組みを研究し、「みんなで描く記念チケット」のプログラムを行った。

(6) 高校生の博物館への親和性を高め、鑑賞教育とキャリア学習の一環となるよう「高校生の学芸員体験」を通して、研究と実践を行った。

(7) ボランティア組織のマネジメント及びボランティアの事業について、新型コロナウイルス感染予防の観点から、活動の方向性や内容に関する調査・研究を行った。これに基づき、オンラインを利用した研修や、展示室以外の作品紹介の場を設け、スライドトーク形式で行うなど、新たな方法での実践を行った。

「高校生の学芸員体験」の様子

【備考】
・150周年事業「月イチ！トーハクキッズデー」、「触察ツール」「みんなで描く記念チケット」「センサリーマップ」「高校生の学芸員体験」
・ワークショップ、スクールプログラム、講演会、「トーハク月イチ！キッズデー」、「高校生の学芸員体験」で、終了後にアンケートを実施

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	オンラインプログラムの研究を通して、遠隔からの参加やより多くの参加を可能にし、さらに対面と組み合わせて行うなど、多様なプログラムを開発することができた。 また、障がい者対応と研究の継続により、共通意識を持って実践することができた。新たな対象として加えた、感覚過敏の来館者に向けた「センサリーマップ」の研究と開発は、日本の博物館の中でも先進的なものであり、新たな来館者層への今後の取り組みにも繋がり、さらなる研究と実践が期待される。 さらに、150周年事業を通し、低年齢層やその家族、高校生、障がい者など、さまざまな来館者を対象とした調査研究と実践を行った。 以上の実績により、年度計画を達成できたと評価した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は新型コロナウイルスにより、引き続きオンラインの良さを生かし実施したものと、対策を講じながら対面で行ったものがあったが、そうした中においても、中期計画の2年目として、より幅広い来館者に向けた鑑賞支援プログラムや、生涯学習ボランティアの活動・運営を持続可能とする調査・研究と実践を目指し、一定の成果を得た。また、150周年事業において、多角的な来館者への取り組みを行ったことが、今後の博物館教育研究と実践にさらに生かされるように努めたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1413Aウ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ウ　凸版印刷及び文化財活用センターと共同で実施するミュージアムシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究

【事業概要】
文化財のデジタルアーカイブを活用した、文化財の新たな公開・鑑賞手法を、凸版印刷株式会社と共同で研究する。

【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長　村田良二

【主な成果】
・「東博のミイラ　デジタル解剖室へようこそ」を４月１日～7 月 24 日に公開した。
・企画課特別展室長・猪熊兼樹が監修し、改編したコンテンツ「故宮 VR 紫禁城・天子の宮殿　TNM & TOPPAN ミュージアムシアター編」を、関連する特別デジタル展「故宮の世界」の会期を含む 7 月 26 日～10 月 16 日に公開した。
・企画課特別展室研究員・高橋真作が監修した新作コンテンツ「雪舟 ―山水画を巡る―」を製作し、雪舟筆の国宝が出品された東京国立博物館創立 150 年記念 特別展「国宝 東京国立博物館のすべて」の会期を含む 10 月 19 日～12 月 25 日に公開した。
・「鳥獣戯画　超入門！」を５年１月２日～3 月 3 日に公開した。
・「雪舟 ―山水画を巡る―」を５年３月８日より公開した。

【備考】

雪舟筆「四季山水図」撮影の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	既存のコンテンツの再演とともに、特別展と連動した改編コンテンツおよび新作コンテンツ各1作品を公開することができ、文化財のデジタルアーカイブ蓄積の有用性を再確認できた。 また、「東博のミイラ　デジタル解剖室へようこそ」は6,758人（定員充足率16.2%）、「故宮VR 紫禁城・天子の宮殿　TNM & TOPPAN ミュージアムシアター編」は13,211人（定員充足率16.2%）、「雪舟 ―山水画を巡る―」は6,834人（定員充足率39.7%）、「鳥獣戯画　超入門！」は7,060人（定員充足率29.9%）の来場者があり、デジタルデータを活用した新たな鑑賞手法の有用性が立証された。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の２年目として、新たなデータ取得手法の確立を含め、デジタルアーカイブのデータ取得に関する調査研究を行い、新規データの取得による新作コンテンツを開発し、集客力のあるコンテンツの継続的な公開を行い、中期計画を遂行できている。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 1413Aエ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 エ　ICT を利用した博物館見学ガイドの開発に関する調査研究

【事業概要】

来館者の鑑賞体験を深めることを目的とした日英中韓４言語による鑑賞支援アプリ「トーハクなび」及び児童生徒のための鑑賞ガイドアプリ「学校版　トーハクなび」を、より利便性あげて運用するとともに、「トーハクなび」のユーザー動向解析によりより豊かな鑑賞体験の創造に関する調査研究を行った。また、通常の総合文化展に加え、特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」における試行と動向解析や、新たに「休息コース」の設定を行った。

併せて、オンラインで提供する「おうちでギャラリートーク」を QR コードの利用で、より気軽にアクセスできるよう運用した。

【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長　鈴木みどり

【主な成果】

(1)鑑賞ガイドアプリ「トーハクなび」（日英中韓４言語対応）を継続し運用するとともに、より利用者にわかりやすく使いやすい形を追究し、改善を図った。

(2)当館公式ウェブサイト、国立博物館所蔵品統合検索システムColBase、ProtoDBと連携し、最新の展示情報や作品解説が常に更新される仕組みについて、引き続きシステムや表現など細部の調整を行った。

(3)来館者の操作が最小限にかつスムーズに行えるよう、引き続き展示室内に設置したビーコンの位置の見直しや増設を行い、作品鑑賞につなげた。

(4)ウェブサイト上に公開した感覚過敏の来館者のための「センサリーマップ」に関連して、「トーハクなび」上に「休息スポット」を新たに開発のうえ設定し、「トーハクなび」の新たな来館者層への使用法の提案を行った。

(5)特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」において、特別展解説のためのプログラムの試行を行った。

(6)継続して「トーハクなび」のユーザーログを集積し、総合文化展に加え、特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」における観覧者動向を分析した。

(7)学校団体で来館する児童・生徒を対象としたスクールプログラムの一環として開発したタブレット端末によるアプリ「学校版トーハクなび」をより利用者にわかりやすく使いやすい形を追究し、改善を図るとともに、端末貸出しと運用を行った。また、「トーハク月イチ！キッズデー」では低年齢層を含むファミリーグループなど、個人来館者にも貸出しを行い、活用の機会を広めた。

(8)ICT を利用した博物館ガイドについて、他館への情報提供や意見交換を行った。

(9)「トーハク月イチ！キッズデー」（毎月第４日曜日）に際し、オンラインで提供する「おうちでギャラリートーク」の QR コードを平成館や本館のラウンジ、キッズスペースなどに設置し、より気軽にアクセスできるよう取り組みを行った。

特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」
トーハクなび試行画面

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「トーハクなび」アプリと「学校版　トーハクなび」を、より利便性の高い形を追究し、プログラムの修正やビーコン位置の増設などを重ねて、改善することができた。また、新たに感覚過敏の来館者にも活用いただけるよう、ウェブサイトの「センサリーマップ」とともに利用できるよう、「トーハクなび」に「休息スポット」の新たなコース開発を行った。さらに、特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」に応用して「トーハクなび」で視聴できるよう試行を行い、特別展において日本語に加え、外国語での鑑賞支援と情報提供の機会を作ることがきた。 「トーハクなび」ユーザーの動向については、引き続きデータを集積し、分析することができた。また「トーハクなび」以外のオンラインを利用した動画のアクセシビリティを検討し、利用しやすくできた。 以上の実績により、年度計画を達成できたと評価する。今後は、さらに利用者のニーズに応じたICTの利便性を高め、来館者の博物館体験の充実につなげたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の2年目として、アプリの利便性を高め、より利用しやすくなるように改善するとともに、新しいコースや特別展での使用など、プログラムの開発を実現することができた。また、展示室内のビーコンからログデータを集積することで、ユーザー動向を分析することができた。学校団体の来館者の「学校版　トーハクなび」の本格的運用や、トーハクキッズデーにおける低年齢層を含むファミリーグループへの提供も行うことができた。 引き続きアプリの改善点の検討や要求に応じたアップデートを心掛け、さまざまな対象に対して、快適な観覧機会の提供に資するよう努めたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1413Aオ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 オ　レプリカや VR 等先端技術を使った、文化財の活用についての調査・研究

【事業概要】収蔵品に関して、先端技術を用いた文化財のレプリカや高精細画像、映像を使用したデジタルコンテンツを開発し、その文化財の活用手法についての調査・研究を行った。本調査・研究を通じて得られた成果を、今後の展示活動に活かす。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長　松嶋雅人

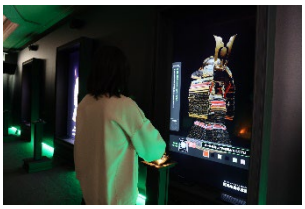
【主な成果】

(1) 2 年 9 月 25 日に開始した NHK との共同研究「みんなの 8K 文化財」プロジェクトにおいて、8K 技術を用いて、これまでにない文化財の鑑賞方法を開発する調査・研究の一環として、4 年度には「樫鳥糸肩赤威胴丸」「能面小面（天下一河内印)」「能面　伝山姥」の 8K 文化財を制作した。

(2) (1) の研究成果である 8K 文化財の一部を 10～12 月に開催された特別企画「未来の博物館」で公開した。また、「未来の博物館」ではキヤノン株式会社、シャープ株式会社との共同研究により制作した複製品や 8K コンテンツも開発し、公開した。(特別企画「未来の博物館」内〈時空をこえる 8K〉〈四季をめぐる高精細複製屏風〉〈夢をかなえる 8K〉)

(3)「日本美術のとびら」を継続開室（4 月 1 日～8 月 31 日、5 年 1 月 2 日～3 月 31 日、本館特別 3 室)。

※「未来の博物館」会期を除く。5 年 1 月 2 日～3 月 12 日は「四季」として「未来の博物館」〈四季をめぐる高精細複製屏風〉で公開した展示内容で再開室。



8K 文化財の成果を体験型展示に展開
未来の博物館　第 1 会場〈時空をこえる 8K〉

高精細画像を用いたレプリカの展示
未来の博物館　第 2 会場〈四季をめぐる高精細複製屏風〉

【備考】

(1)共同研究の成果として、以下の番組が放送された。
・「見たことのない文化財～秘仏　救世観音～」（4月5日・BS8K放送）
・「沼にハマってきいてみた」（9月27日・NHK　Eテレ）
・「鑑賞法は無限大！未来の博物館へようこそ」（10月29日・NHK総合）

(2) 事業の開催期間と会場は以下の通り。
・「未来の博物館」（10月18日～12月11日、〈時空をこえる8K〉本館特別5室、〈四季をめぐる高精細複製屏風〉特別3室、〈夢をかなえる8K〉東洋館エントランス）

(3)共同研究の成果として、3年収録の「救世観音像のデジタル調査会」がDAPCON産業賞において技術賞を、日本賞2022において、8K文化財プロジェクトがデジタルメディア部門最優秀賞（経済産業大臣賞）を受賞した。

(4)国際公共放送会議（PBI）東京大会において未来の博物館内覧実施（11月16日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査・研究は文化財の鑑賞法や活用法への新たなモデルとなり、今後の文化財の展示並びに普及活動を考える上で、ますます重要な意味を持つこととなった。文化財の原品には保存上の制約がある中で、こうした活用法は館内外において、さらなる展開が求められるものである。4年度は放送番組や、新たな手法による展示機会を得たことで、今後の調査研究の多様性とともに、発展性を期待できるものとなった。4年度の成果をもとに、5年度以降も、新たな文化財の活用方法を考究していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の 2 年目として、教育普及活動等に関する調査研究を実施し、文化財の理解促進に資する展示活動や番組の放送等により、広く一般への研究成果の発信に努めた。したがって、中期計画を順調に遂行できていると評価した。今後は、さらに先進技術を用いた展示手法、方法論の検討を深めていきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 1413Aカ

業務実績書

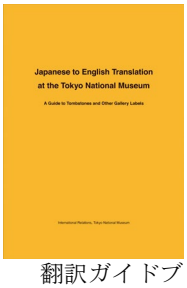
中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 カ　博物館広報・国際交流活動に関する調査研究

【事業概要】当館の広報活動の充実と効果的な実施及び国際交流活動を推進するため、博物館における広報及び国際交流活動について調査・研究する。
4 年度は広報活動については、創立 150 周年にあたりこれまで当館で行ってきた広報活動の歴史を振り返り、特集展示を開催する。国際交流活動については、日本・アジア美術に関する用語の当館としての英訳の標準を示すガイドブックを出版・公開する。また、外国人向けの多言語による SNS の発信内容について継続的に検証する。

【担当部課】	学芸研究部広報室、同部企画課 国際交流室	【プロジェクト責任者】	学芸研究部上席研究員兼広報室長 鬼頭智美、国際交流室長　楊鋭

【主な成果】
(1) 主な内容
-1　博物館広報：広報の歴史をテーマに特集展示を開催。またウェブサイトの利用状況の調査分析を行った。
特集タイトル「つたえる、つなぐ―博物館広報のあゆみ―」　9 月 27 日～11 月 6 日　平成館企画展示室
-2　国際交流：当館の標準英訳語を示すガイドブックを出版、国際交流と多言語対応事業、SNS 発信の検証
(2) 内容の詳細
-1　・1872 年の創立年を起点とし、戦後を中心に当館の広報活動の流れを検証、特別展のポスターや館案内パンフレットなどを展示するとともに、展示概要を紹介するリーフレットを制作し、研究成果の普及に努めた。
・特集で公開した過去の特別展ポスターの画像データをアーカイブ化し、当館公式ウェブサイト上で公開した。
・月例講演会（10 月 1 日、平成館大講堂）及び 1089 ブログにおいて本事業の成果を発信した。
・ウェブサイトのアクセス数と増減の傾向を記録・分析し効果的な情報発信のタイミングを検討・実施した。
-2　・当館の総合文化展等で使用した日本・アジア美術に関する用語を抽出、当館としての標準英訳語を示した。
・3 年度からスタートした英語、中国語、韓国語による SNS（Twitter、Instagram、Facebook）投稿のアクセス数、ユーザー年齢層と所在地域などデータを分析し、発信内容の充実と改善を図った。
・国立博物館 4 館の多言語対応担当者による国際交流と多言語対応の進め方について意見交換会を当館において開催した。

広報特集展示



翻訳ガイドブック

英語版インスタグラムのリーチ（11 月）

【備考】
意見交換会：　12 月 6 日開催

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館広報については、創立150年の記念の年にあたり、これまであまり紹介されてこなかった当館の普及・広報活動について網羅的に調査し、特集展示という形でまとめて一般に公開することができた。またその展示のためにこれまで物理的に収集・保管していた特別展のポスターを調査・整理し、アーカイブ化してウェブサイトで広く一般に公開できた。ウェブサイトは継続して利用状況を調査、効果的発信に繋げた。 国際交流については、近年蓄積してきた文化財関連用語の英訳語について、当館として標準の訳例をまとめたガイドブックを出版、ウェブサイト上で公開することで、日本・アジア美術の翻訳のガイドラインを示すことができた。また、多言語による SNS 投稿内容の検証と改善により、フォロワー数の増加に繋げることもできた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	創立 150 年という節目の年に合わせ、普及・広報活動の研究成果を展示やアーカイブという形で披露できた。5 年度以降、新しい広報活動を模索する上で指針となるよう調査研究を進めていきたい。現在「ウィズコロナ」の生活形態が模索され、海外からの来館者も戻りつつある。4 年度は国外へ向けての発信力を高めるべく、中期計画にのっとり国際交流の具体的施策展開に向けて準備を整えることができた。外国人来館者への施策を積極的かつ効果的に実施するよう中期計画を今後も推進する。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1413Bｱ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関連する調査研究 ア　博物館教育及びボランティアに関する調査研究　((4)-①-3))

【事業概要】
文化財を活用した効果的な展示や、博物館における教育活動の充実を目指して、4 年度は「学校教育との連携」、「感染症対策と博物館教育の両立」の 2 つをテーマに調査・研究を進めるとともに、これまでの調査・研究成果を展示・シンポジウム等に反映させた。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室主任研究員　水谷亜希

【主な成果】
1)「学校教育との連携」に関する調査・研究
・文化財ソムリエ 21 人の育成にかかるスクーリング（21 回）、「文化財に親しむ授業」（7 回・501 人）、職場体験の受け入れ（1 回・2 人）に際して、参加者のアンケート調査を行い、今後の博物館教育の在り方について考えるべく、その分析を行った。
・「記者体験 in 京都国立博物館」（1 回・60 人）に際して、河内長野市の高校生（レクチャー）と京都市の中学生（取材）という異なる自治体の生徒間の交流をはかる試みを実験的に行った。
・教員による複製を活用した授業（3 校・生徒のべ約 500 人）の支援、「社会科教員のための向上講座」（1 回・34 人）の実施に際して、今後の事業の在り方について考えるべく、教員からの聞き取り調査と意見交換を行った。
・「文化庁 令和 4 年度 Innovate MUSEUM 事業」の助成（2,361 千円）を受け、「誰もが楽しめる鑑賞の授業（多様な見え方・感じ方）」をテーマとして、他施設の実態調査（7 件）、小中学校の教員向けの小冊子「授業で使える！日本の絵画 鑑賞のヒント」（1,000 部）の発行を行った。
2)「感染症対策と博物館教育の両立」に関する調査・研究
・他館の教育活動に関する感染症対策について調査（10 件）し、5 年度に予定している京博ナビゲーターの再開に備えた。
3)調査・研究成果の講評・反映
・これまでの調査・研究成果を踏まえて、入門的な特集展示「新春特集展示　卯づくし―干支を愛でる―」（5 年 1 月 2 日～1 月 29 日）を企画し、展示に関連するワークシート「うさぎうさぎ、なにといっしょ？」（日英 11,000 部・中韓 3,000 部）を発行した。
・これまでの調査・研究成果を踏まえて、国際シンポジウム「アジアの博物館教育は、いま―国立博物館の事例から―」を企画し、登壇して研究報告をすると共に、海外に向けての情報発信に努めた。

【備考】
・本研究を踏まえた事業の実績については、処理番号 1311B、1312B も参照。

京博ナビゲーター
募集チラシ

「授業で使える！日本の
絵画 鑑賞のヒント」

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	学校教育との連携に関しては、「文化庁 令和4年度Innovate MUSEUM事業」に採用され、館の教育事業全体に還元できる情報の意識的収集に努めたほか、教員に向けた小冊子の発行を行った。また、新型コロナウイルスの影響は引き続き大きかったものの、異なる自治体に属する生徒間の交流や職場体験の受け入れなど新たな事業を展開することができた。さらに、入門的な新春特別展示や国際シンポジウムに調査・研究成果を反映させ、海外、特にこれまで注目度が低かったアジア地域の博物館教育担当者との交流を推進し、世界に向けた情報の発信を行うことができたためＡと評価する。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの影響で、3 年度に続いて館内でのボランティア活動（京博ナビゲーター）は休止せざるをえなかったが、鑑賞ガイドやワークシートの作成、オンラインコンテンツの充実を通して、一定の代替措置を講ずることができた。また、これまでの調査・研究活動を特集展示や国際シンポジウムでの研究発表に繋げるなど、館内ボランティア活動の休止を補うに足る事業展開ができた。さらに、5 年度での京博ナビゲーター活動再開の見通しもつきつつあるためＢと評価する。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1413Cア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3）文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ア　歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究（(4)-①-3)）

【事業概要】
奈良を中心とした寺社の歴史や伝統文化に関連する教育普及コンテンツやプログラムをつくり、学習の機会を提供するとともに、対面型・オンライン型いずれの教育活動も展開し、多様な形で地域学習の拡充を図る。

【担当部課】	教育室	【プロジェクト責任者】	教育室長　谷口耕生

【主な成果】

・学校プログラム「ならはく『世界遺産学習』」を小・中学校や高校等の学校団体を対象に実施した（30 校、2,318 人）。事前学習キットを各学校に提供するほか、来館した際にはワークシートを用いる形で仏像を見学してもらい、それをボランティアがサポートする等、児童・生徒が楽しくかつ主体的に作品を見て学べる方法の実践を重ねた。

ボランティアによるワークショップ実施風景

・大分県や奈良市と連携し、学校団体を対象としたオンライン中継授業を計 18 回、574 人を対象に実施した。各学校の教室となら仏像館をオンラインでつなぎ、ボランティアが仏像について解説した。児童・生徒達の仏像に対する興味・関心を喚起させるために、案内の際にボランティアが仏像に扮するほか、仏像に関するクイズを出題する等、様々な工夫を取り入れた。また、この取組の一層の拡充を図るために、複数の小学校（奈良市立鼓阪北小学校と大分県国東市立国見小学校）と複数の博物館（当館と大分県立歴史博物館）をオンラインでつなぎ、相互の地域の歴史や文化財等について学びあうプログラムを 1 月 30 日に実施した（計 2 回、43 人を対象に実施）。

・地下回廊の一角に新たに設けたワークショップスペースにて、ボランティアによるワークショップの実施を開始した。11 月よりワークショップの実施を開始し、計 12 回行った。仏像のレプリカを活用したワークショップでは、体験参加者の反応等を確認しながら、実施方法の改良を重ねた。

・奈良教育大学と連携し、7 月 16 日から 8 月 28 日にかけて開催した子ども向けの展覧会わくわくびじゅつギャラリー「はっけん！ほとけさまのかたち」の関連ワークショップ動画「なりきり！ほとけさまのかたち 十一面観音菩薩編」と「なりきり！ほとけさまのかたち 文殊菩薩編」を制作した。各編につき 2 本の動画を制作し、公式ウェブサイト上で公開した。この動画を制作するにあたり、動画を見た子ども達の工作を通して仏像の様々な形について学びを深める方法とその効果について検証した。

【備考】
・地下回廊のワークショップスペースにおけるワークショップ
実施回数：12 回、見学者数：1,045 人、体験参加者数：284 人

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は、対面型・オンライン型など、多様な形で学習の機会を提供することができた。学校プログラムを来館する学校団体30校を対象に実施したほか、博物館と各学校をオンラインでつなぎ、遠隔地より展示を見学してもらう等、主に学校団体を対象とした地域学習の強化を図ることができた。そのほか、文化財のレプリカを活用したワークショップを幅広い層に向けて実施する等、歴史や伝統文化、文化財等に対する興味・関心の醸成を図ることができたのも成果といえる。よって、年度計画を着実に遂行できている。5年度は、教育普及事業の更なる拡充を目指す。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	奈良市等の行政機関や奈良教育大学等の大学との連携、地域の担い手であるボランティアと協働で様々な事業や活動を展開することができた。よって、中期計画を無事に遂行できているといえる。今後はより一層、様々な機関や団体等との連携を強化し、奈良の歴史や伝統文化を次世代に継承するために、若年層へのアプローチを図る。まずは文化財や歴史をより身近に感じることができるプログラムを展開することにより、それらに対する興味・関心の醸成することを目指す。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1413Cイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3）文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 イ　わくわくびじゅつギャラリー「はっけん！ほとけさまのかたち」における教育普及プログラムの実践（(4)-①-3)）

【事業概要】
7 月 16 日から 8 月 28 日にかけて、東新館にて子ども向けの展覧会わくわくびじゅつギャラリー「はっけん！ほとけさまのかたち」を開催し、その中で様々な教育普及プログラムを実践し、各効果について検証した。

【担当部課】	教育室	【プロジェクト責任者】	教育室研究員　翁みほり

【主な成果】
7 月 16 日から 8 月 28 日にかけて、東新館にて子ども向けの展覧会わくわくびじゅつギャラリー「はっけん！ほとけさまのかたち」を開催した。仏像の主な 4 つのグループ「如来」「菩薩」「明王」「天」のそれぞれの形の特徴と、その見分け方を子ども向けにわかりやすく紹介する展覧会で、子どもが仏像等の文化財に親しめることを目的に、以下の様々な教育普及事業を実践した。

作品と題箋の展示風景

・作品解説や展示パネルは子ども向けに平易にするとともに、仏像や当館公式キャラクター「ざんまいず」のイラストを多用した。
・会期中の開館日毎日 2 回、会場内中央に設けたワークショップスペースにて、ワークショップ「ほとけさまに服を着せよう！」を開催した。これはぶんかつの協力により作成した裸の姿の仏像のレプリカに服を着せる内容のワークショップで、如来の仏像がどのように服を着ているのかを学んでもらうことを目的に実施したものである。ボランティアが着つけの実演を行った後に、希望者が実際に仏像のレプリカに服を着せる体験をし、体験が完了した後には仏像のレプリカとともに記念撮影ができるという構成で実施した。見学者数は 2,709 人、体験参加者数は 502 名に上り、子どものみならず、大人が体験を希望する事例も多かったことから、幅広い層に楽しんでもらえるプログラムであることが確認できた。
・展示作品を目の前にスケッチできる体験型要素も取り入れ、さらに来場者が描いた絵を掲示できるおえかきギャラリー「みんなが描くほとけさまのかたち」をワークショップスペースに設けた。絵の掲示枚数は 1,371 枚となった。
・クイズ形式のワークシート「クイズではっけん！ほとけさまのハテナ」を会場入口にて配布した。クイズ参加者数は 15,182 人で、入場者のうちクイズ参加率は 41.4%にも上った。クイズ参加者には、景品として特製シールを配布したことにより、ワークシートの利用率が想定を大きく上回る結果となった。

【備考】
本展では、会場出入口付近に設置した通常のアンケートに加え、子ども向けのアンケート調査を行い、合計で 2,232 件回収できた（来場者数に対し回収率 6.1%）。そのうち、通常のアンケートは 1,471 枚で、本展の満足度についての設問に対する回答は 754 件あった。その回答の内訳について、「期待以上」は 609 件、「期待通り」は 138 件、「期待していたものとはちがった」は 7 件だった。「期待以上」と回答した率は 80.8%、「期待以上」と「期待通り」の回答を合わせた率は 99.1%にも上ったことから、本展に対する満足度は非常に高かったといえる。
また、子ども向けアンケートは 761 枚回収できたが、子どもの満足度を詳細に確かめるため、調査途中より、展覧会の満足度を 100 点満点での点数でたずねる設問項目を追加したところ 557 件の回答があり、満足度の平均点数は 95.1 点だった。さらに、100 点満点もしくは 100 点以上と回答した件数は 388 件で、その率は 69.7%にも上った。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業では、子ども向けの新たな教育普及プログラムを実践したが、主要な対象である子どものみならず、大人からの反響も大きい結果となった。当館における展覧会アンケートの回収率は3年度実績では1%未満であることが多いのに対し、本展のアンケート回収率は6.1%にも上った。本展の満足度についても、「期待以上」もしくは「期待通り」と回答した率は99.1%にも上り、非常に満足度が高いことがわかった。この事業の効果並びに発展性が感じられることから年度計画を遂行できており、A評価とした。今後も継続的に幅広い層が文化財に親しみをもてるようなプログラムを継続的に開発・実践していく。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	アンケート調査により、本展に対する子どもの満足度が100点満点中で平均95.1点にも上った結果に加えて、557件の回答のうち100点満点もしくは100点以上との回答があった件数が388件あり、その率は69.7%にも上ったことから、主な対象である子どもの満足度は予想を上回り、非常に高い数値となった。そのため、中期計画を順調に遂行できていると評価できる。今後はより多様な方法で教育普及プログラムを展開し、どんな層に効果があるのか、またどのような形・方法で実施すればより高い効果を生み出せるのかを確認しながら都度改善するという調査・研究を継続していく。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1413Dｱ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)　文化財を活用した効果的な展示や、教育活動に関する調査研究 ア　展示のテーマに則した解説パネル・冊子・ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究((4)-①-3))

【事業概要】
展示をより分かりやすくするための教育普及活動を実施している。4 年度は弥生時代の棺である甕棺のレプリカを活用したワークショップを行った。また、それに伴い、副葬品も制作した。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　西島亜木子

【主な成果】
弥生時代の「甕棺」に関する 2 種類のワークショップを行った。本ワークショップは 27 年度から元年度まで実施した「きゅーはく女子考古部」の部員や来館者の「甕棺に入ってみたい」という声に応えて企画した。甕棺レプリカの展示だけではなく、実際に甕棺に入るという体験を提供した独創的な企画である。寸劇に参加しながら学ぶワークショップは、過去の特別展で採用した手法を発展させた。いずれも 3 年度に制作した文化交流展示室に展示中の甕棺模型と同じ伊都国（福岡・糸島市）の王墓模型を活用した。

・「甕棺墓埋葬体験ワークショップ　甕棺に入ろう」では、弥生時代の王の衣装を着用し、みずらを付けて副葬品のレプリカと共に甕棺の中に入る体験を提供した。甕棺の中でどのような体勢で埋葬されたかなど、体験を通して学べるワークショップである。（参加者：25 人）
・「甕棺墓埋葬体験ワークショップ　伊都国王のお葬式」は、王が亡くなってから甕棺に埋葬され、地中に埋められるまでの流れを、寸劇に参加しながら学ぶワークショップである。甕棺についての説明や分布など解説も加えた。参加者は、貫頭衣を着用し王の埋葬を手伝う役を担い、セリフを発するものではなく、子どもから大人まで誰でも参加が可能である。（参加者：20 人）
・上記ワークショップを実施するにあたり、伊都国王墓の副葬品 56 点を制作した。体験を通して臨場感を高め、作品解説を加えて理解を深めた結果、参加者全員から非常に高い満足度を得た。

「甕棺墓埋葬体験ワークショップ　甕棺に入ろう」

「甕棺墓埋葬体験ワークショップ　伊都国王のお葬式」

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本ワークショップでは、甕棺に入ったり、副葬品に触れ衣装を着用したりなど、体全体を使った体験を提供した。この手法は、幅広い年齢層や視覚障がい者や、外国人などを対象としても可能で、応用性、多様性、発展性に富む。この独創的な取り組みにより、年度計画を達成したと評価でき、Ｂ評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は甕棺を使った新しいワークショップで、参加者の満足度は非常に高かった。寸劇という手法は年齢層に関係なく誰にでも理解できるもので、非常に高い満足度を得た。以上から、中期計画の展示に関する教育普及について順調に遂行したと評価し、左記の評定とした。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1413Dｲ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)　文化財を活用した効果的な展示や、教育活動に関する調査研究 イ　文化交流展示室における障がい者向け展示解説プログラムに関する調査研究（(4)-①-3)）

【事業概要】
当館では多様な方が博物館の楽しさを享受できるよう、元年度より多岐にわたる取り組みを行ってきた。
4 年度は、視覚・聴覚に障がいがある当事者の意見を取り入れたコンテンツの活用や新たなワークショップを実施することにより、包括的な施設としての博物館を目指す。

【担当部課】	展示課 学芸部企画課 交流課	【プロジェクト責任者】	課長　齋部麻矢 主任研究員　加藤小夜子 主任研究員　西島亜木子 主任研究員　今井涼子

【主な成果】
(1)文化交流展示室 第 7 室「ならべてわかる本物のひみつ～実物とレプリカ 2022～」
・来館する前に作品数や順路を把握したいとの要望から、視覚障がい者団体には立体プリンターで作成した配布型の触知図、白黒反転の作品配置図を送付した。また関連イベントとして、当館ボランティアの協力を得て、手話通訳付きミュージアムトークを行った。(8 月 27 日に 2 回実施。参加者：1 回目 16 人、2 回目 34 人)
・2、3 年度で最も要望が多かった音声での解説を、ナビレンスタグによりすべての作品につけることができた。点字を使用しない視覚障がい者への情報保障とした。
(2)手話通訳付きバックヤードツアー
・手話通訳と要約字幕を付けたオンラインバックヤードツアーを 5 年 3 月 4 日に実施した。
(3)「みんな de きゅーはくを楽しもう!!　模型 de 博物館たんけん隊」
・当館の建築模型を使い、文化財を守るための建物の工夫を文化交流展示室内で紹介した。ボランティアの協力を得て手話通訳と要約字幕を付け、参加者は建築模型に触れて博物館への興味関心と文化財保護への理解を深めた。(11 月 20 日 参加者：午前 16 人、午後 20 人)
(4)「みんな de きゅーはくを楽しもう!!　視覚障がい者向けバックヤードツアー」
・視覚障がい者を対象に、バックヤードツアーを実施した。通常のバックヤードツアーでは触る体験が含まれないが、視覚障がい者からの要望に対応し、当館の建築模型、収蔵庫の壁面模型、免震装置の模型と実物の免震装置、大型エレベーター、トラックヤードのシャッターなど、触れる体験を重視した内容とした。参加者からは非常に高い満足度を得た。(11 月 27 日実施。参加者：25 人、内訳：当事者 13 人、同伴者 12 人)
(5)「みんな de きゅーはくを楽しもう!!　視覚障がい者向けレプリカ＆楽器体験」
・視覚障がい者を対象に、ハンズオン資料を活用したレプリカと楽器体験のワークショップを実施した。作品担当研究員や外部指導者の協力のもとに、触察をしながら作品解説を聞く体験を行い、質の高い内容を参加者に提供することができた。(11 月 27 日実施。参加者：16 人、内訳：当事者 7 人、同伴者 9 人)
(6)視覚障がい者と観覧する対話型鑑賞ツアー
視覚障がい者と晴眼者が対話しながら作品を鑑賞するワークショップを①特別展「ポンペイ」、②文化交流展示「ならべてわかる本物のひみつ～実物とレプリカ 2022～」で行った。当館では初の試みで、通常の解説以上に分かり易いと参加者から非常に高い満足度を得た。(①11 月 10 日・11 日実施。参加者:12 人)(②9 月 3 日実施。参加者:12 人)
(7)視覚障がい者に音声解説を提供するスマートフォンアプリ「ナビレンス」を開始した。作品解説や経路案内も可能で、展示室をはじめ館内外各所に専用タグを設置し、パネルによる周知で活用を図った。5 年度からは動画による解説も追加する予定で、手話通訳による解説動画約 30 件を制作し、5 年度以降も随時解説動画の制作を進める。

視覚障がい者と晴眼者が作品について対話しながら鑑賞するツアー

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスに関する規制が緩和され、障がい者団体の来館やイベントが徐々に再開した4年度は、これまでのヒアリングや作製したコンテンツを生かすことができた。より充実した取り組みを行うことができ、来館者の満足度も高く、年度計画を達成したと評価してＢ評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでの蓄積や新たな試みの検証を活かし、4年度は、展示、ワークショップ、バックヤードツアーを計画的に展開した。研究員のみならず全職員が社会包摂を意識した取り組みや検証を行い、視覚、聴覚以外の障がい者にも対応した内容に高めていくことが今後の課題である。以上の成果から、中期計画を円滑に遂行したと評価し、Ｂ評定とした。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1421Aア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア　博物館の環境保存に関する調査研究

【事業概要】当館による文化財の活用に伴い保全の必要性が生じる、収蔵環境、展示環境、輸送環境について調査研究し、今後の環境の向上を目的として実施する事業。

【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　和田浩

【主な成果】

1）輸送環境に関する調査研究成果

文化財輸送時に生じる振動の影響を検証するため、レプリカを用いた加振試験を実施し、その結果から振動応答特性を推定する手法に関しての成果を論文で発表した。文化財の梱包に頻繁に用いられる綿の衝撃吸収特性を落下衝撃試験によって調査した結果を検証し、学会で発表した。ハンドリフトを用いた博物館施設内輸送で生じる振動を計測した結果を検証し、学会で発表した。

2）収蔵環境に関する調査研究成果

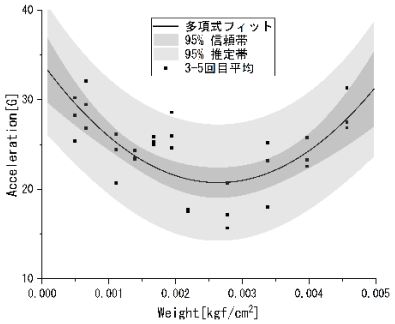
空調設備の無いコンクリート造の建造物内の温湿度変化に関して解析を実施し、来場者の入室による影響を検証し、学会で発表した。

3）展示環境に関する調査研究成果

展示室における換気対策が与えるエネルギー消費への影響を考察し、学会で発表した。

4）その他の調査研究成果

博物館施設のデジタルツインの利活用による保存環境制御の最適化と効率化を目指した研究を開始した。



綿の衝撃吸収特性に関する検証

【備考】研究成果の学会発表・論文発表

1）輸送環境に関する調査研究成果

・屏風の振動応答特性を検証するための基礎的研究（日本包装学会誌 31(3)）
・美術品輸送の安全対策に関する研究動向（日本包装学会誌 31(4)）
・綿の衝撃試験についての基礎的研究（日本包装学会第 31 回年次大会）
・ハンドリフトを用いた文化財の施設内輸送時に生じる振動の原因と対策に関する研究（文化財保存修復学会 44 回大会）
・美術品輸送包装の課題と研究開発（総務省電波資源拡大のための研究開発「同期・多数接続信号処理を可能とするバックスキャッタ通信技術の研究開発」令和 4 年度 第 1 回実利用推進検討会）
・博物館施設内輸送における振動計測（第 60 回全日本包装技術研究大会）
・文化財を安全に運ぶ-振動解析による施設内輸送の安全性評価-（『文化財をしらべる・まもる・いかす　―国立文化財機構 保存・修復の最前線―』）

2）収蔵環境に関する調査研究成果

・法隆寺金堂収蔵庫における壁画の保存・公開に関する研究 -2021 年限定公開における収蔵庫内環境測定値の検討-（日本文化財科学会第 39 回大会）

3）展示環境に関する調査研究成果

・入場者数の展示室内環境への影響の検証を目的とした特別展覧会における室内滞留者数傾向の解析（国立民族学博物館研究報告 47(4)）
・展示室における換気対策が与えるエネルギー消費への影響と持続可能な博物館環境の維持に関する考察（文化財保存修復学会 44 回大会）

4）その他の調査研究成果

・災害情報の統合と都市と文化財のデジタル化と防災（震災遺構資料科研中四国九州保存修復研究会合同研究会）
・2022 年度災害対策調査部会の活動報告（文化財保存修復学会 44 回大会）
・都市と文化財のデジタル化で生まれる博物館の新たな展開（教職課程センター紀要 7）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	各項目に関して、当初の計画よりも多くの論文及び学会発表を行い、社会に対して十分に研究成果を還元できたものと評価する。専用コード作成により解析を半自動化するといった、データサイエンス技術を駆使することで、研究の効率化を図ったことが成果に直結したと考えられる。具体的には、本プロジェクトからは、3年度、4年度を通して、査読論文3件、査読無し論文5件、国内学会発表18件が学術的成果として上がった。 特に、輸送環境に関する調査研究において多くの成果を上げることができた点や、異分野の研究者と活発に交流し、従来から継続している研究を客観的に検証することができた点は特筆すべき点としてあげられる。5年度は蓄積された各種の環境データを利活用したシミュレーション技術の研究と、予測システムの構築に向けた研究へと発展させたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画の2年目として、収蔵環境、展示環境、輸送環境の3つの環境に対する調査研究に加え、次世代の博物館を見据えた研究をバランス良くかつ効果的に実施することができた。また、研究成果は論文及び学会等の適切な場で発表公開し、文化財分野に限らず様々な分野の研究者との交流を活発に行い、研究内容を客観的に検証し、発展させることができた。特に輸送環境に関する調査研究では多くの研究の成果を上げることができており、想定以上に中期計画を遂行できていると評価した。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 1421Bｱ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア　修復文化財に関する資料収集及び調査研究　((4)-②-1))

【事業概要】
文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究を行う。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　大原嘉豊

【主な成果】
(1)修復文化財情報の収集と調査
・4 年度、文化財保存修理所の工房に搬入した新規の修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、160 件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。
・当館研究員により 7 回行った修理工房の巡回のほか、修理技術者とともに実施した科学調査を含む調査を適宜実施し、文化財の構造や使用材料、内部納入品・銘文調査など、修理中にのみ得られる情報を収集、分析した。
(2)修復文化財情報の整理
・3 年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書（報告書)」に基づき、1179 件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理作業を行った。
(3)模写作成のための文化財の調査
・模写修理事業者（六法美術）による宮内庁京都事務所蔵「京都御所清涼殿障壁画」の復元模写（6 か年計画）の 3 か年目を行った。模写する文化財は搬入せず、原寸大写真及び資料をもとに行っている。
(4)情報の公開と共有
・元年度に修理が完成した文化財 150 件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 20 号(5 年 3 月 31 日発行)に掲載した。
・修理時の調査により発見された銘文 15 件を「銘文集成」として同書に収録した。

【備考】
(1)データ収集件数 160 件、巡回回数 7 回
(2)データベースの追加更新件数 1179 件
(4)報告書　1 冊（修理報告 149 件、銘文報告 15 件を含む）

『京都国立博物館文化財
保存修理所修理報告書』
第 20 号

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所で行われる文化財修理に係る情報については、紙ベースでの収集・整理を行うとともに、過去の情報から順次遡及的にデジタル化を進めており、4 年度も順調に事業が進んでいる。また、紙ベースからデジタルベースでの情報保存への移行措置として、印刷物としての報告書作成に加え、報告書の PDF 化を進めた。修復文化財データベースの更新も順調に進んでおり、総じて情報の整理収集も滞りなくできているため、B評価が妥当であるといえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究活動の一環として、文化財保存修理所で実施している修復・模写文化財の資料収集及び調査研究を行った。新型コロナウイルスの影響がある中、文化財保存修理所に搬入される修復文化財の件数は、3 年度と同等の水準で推移しているが、科学調査を含め修復・模写文化財に関する調査を順調に進め、情報収集をすることができた。得られた情報についてもデジタル化を着実に進めることができており、中期計画の 2 年度として計画を遂行できたといえる。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 1421Bイ

業務実績書

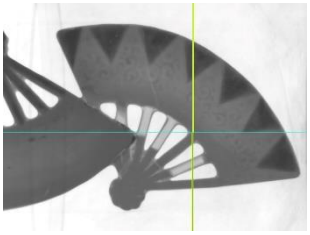
中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 イ　文化財の製作技法・材料等に関わる調査・研究　((4)-②-1))

【事業概要】
博物館の展示・教育普及活動に関連する調査研究として、有形文化財の製作技術に関わる調査や、使用材料等に関する調査を実施し、データの蓄積を図る。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室長　降幡順子

【主な成果】
(1)作品の調査研究
4年度の構造調査としては、X線CT撮像9件（34点）、SfM/MVSによる3次元形状調査3件（4点）、透過X線撮影による内部構造調6件（277点）を実施した。作品の材質調査としては、蛍光X線分析調査31件（220点）、X線回折調査8件（29点）、分光分析調査3件（17点）、オルソ撮影1件（1点）を実施した。
(2)展示に関連する調査研究の一例
展示のために借用した文化財資料に対して、X線CTを用いた構造調査、蛍光X線分析調査による材質調査を実施し、製作・技法等を確認した。特別展「最澄と天台宗のすべて」では「釈迦三尊十六羅漢図（斑鳩寺蔵)」の蛍光X線分析調査を実施し、金色彩色に使われている材質の違いについて明らかにした。特別展「河内長野の霊地－観心寺と金剛寺－」では「版木（観心寺蔵)」のX線CT撮影を実施し、そのデータから３Dプリンターを用いて複製を作成し、教育活用に資した。
(3)館蔵品等を対象にした調査では、「若狭国神人絵系図」では、オルソスキャナを用いた赤外線画像の取得をはじめ、新たに導入したX線回折測定を実施し、顔料の同定を行った。「色絵釘隠（伝野々村仁清作)」では、X線CT撮像を行い江戸時代初期と考えられる資料の技術の解明にも有用なデータを得ることができ、これらの成果を学会等にて情報発信した。
(4)地方公共団体や美術館からの依頼を受入れた展示・修理事業に関わる調査を実施し、使用材料や復元材料に関するデータ提供を行った（京都府、京都市、長浜市、大津市、犬山市、香川県、石川県金沢城調査研究所、刈谷市歴史博物館、平等院)。

【備考】
(1)学会発表等
・降幡順子・降矢哲男「重要文化財「色絵釘隠（伝野々村仁清）の胎土・彩色材料に関する研究」『文化財保存修復学会第44回大会』、6月
・降幡順子・井並林太郎・富澤千砂子「若狭国鎮守神人絵系図の彩色材料調査－復元模写事業を踏まえて－」『日本文化財科学会第39回大会』、9月
(2)論文等
・降幡順子・神野恵・石田由紀子・岩戸晶子・清野陽一・丹羽崇史・伊奈稔哲・宇留賀朋也「7・8 世紀出土瓦・施釉瓦胎土色と鉄イオンに関する研究」『SPring-8/SACLA利用研究成果集10巻第2号』、4月
・井並林太郎・降幡順子「佐竹本三十六歌仙絵「源重之」　科学分析結果報告」『重要文化財　佐竹本三十六歌仙絵「源重之』収蔵記念特別展　歌仙絵と太刀』展覧会図録、秋水美術館、4月
・古谷毅・降幡順子「兵庫県西宮山古墳出土品の研究Ⅰ―非鉄金属製遺物1―」『学叢44号』、京都国立博物館、6月


構造調査（色絵釘隠）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は、61件（582点）の有形文化財について分析調査を実施し、製作・技法等に関わる情報を得ることができた。外部組織からの調査依頼も、積極的に受け入れ、新聞発表にも取り上げられ調査成果の活用、社会への貢献に努めた。分析事例の集積とともに、得られた調査成果の一部は学会で発表するなど情報発信を行った。5年度以降も継続して実施する予定の調査については、データの蓄積を図り、成果を図録、学会発表等で情報公開する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は、材質調査のための携帯型Ｘ線回折装置を新たに導入し、多様な材質の美術工芸品を対象に新しい知見を得られるようになった。有形文化財を対象に、使用材料の傾向や特徴を明らかにするなど、中期計画期間を通して幅広い活用を目指したい。博物館の展示・教育普及活動、さらに復元修理や文化財指定に関わる調査などに関連する科学調査を行い、データ蓄積を図るとともに、研究成果は随時、図録や学会等を通じて公開していく予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 1421Bウ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ウ　社寺等における保存環境に関する調査研究　((4)-②-1))

【事業概要】

文化財を有する社寺には、必ずしも文化財収蔵のための専用施設が整備されておらず、建造物内に常設されている有形文化財に対して、温度・湿度、照度等を博物館環境と同等に整えることは難しい。また、収蔵建物自体が有形文化財であることも珍しくなく、収蔵環境を整備するために大がかりな改修工事を行うことも困難な場合が多い。本調査研究では、文化財の劣化に大きく影響する温湿度の変動や、照度・紫外線の強度、空気質について、まずは現状の環境調査を実施し、その結果を踏まえて簡便な手法で保管環境の改善に関する助言・協力を行い、文化財のより適切な保管環境を目指す。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室長　降幡順子

【主な成果】

社寺等を対象とする文化財の保管環境に関して基礎データの収集に努め、改善に関する協力を行った。

(1)知恩院・京都府・京都市との打合せ 1 回、月次報告 12 回実施

(2)知恩院境内の 12 箇所で温湿度モニタリングの実施、新法務棟・宝物庫の空気室調査（アンモニア、有機酸類、ホルムアルデヒド類）4 回実施（春季、夏季、秋季、冬季)。

(3)鳥取県・三仏寺収蔵庫内外 2 箇所で温湿度モニタリングの継続実施

(4)文化財資料の適切な保管環境に関する検討

【備考】

新たに設置したデータロガー（床下）

現地調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度の社寺等における保存環境に関する調査研究は、3年度からの継続として、知恩院境内12箇所、三仏寺収蔵庫2箇所にて実施した。知恩院境内の環境調査については、2カ年事業の2年目であり、3年度の年間データの蓄積から、測定箇所の変更・増設を行い、高湿度の原因解明に努め、換気実施による改善等について府・市と情報共有を図った。三仏寺では、夏に現地にて打ち合わせを実施する予定であったが、新型コロナウイルスの影響により中止となり、4年度はデータ回収のみとなっているため、5年度の打ち合わせ時期を早める予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間に環境調査を実施する社寺を順次変更しながら、広く公開・保管環境と改善に関する取り組みを実施する。4年度では、知恩院境内についての前年度モニタリング結果を反映した改善策を実施し、空気質についてはその効果を確認した。これらの調査成果は、5年度に学会等による成果報告を予定している。日常行われている法会や参拝者へも配慮をした効果的な改善策については、社寺の協力が必須であるため、今後も社寺との連携を十分に取りつつ、継続してモニタリングを実施していく予定である。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1421Cア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア　収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境が文化財に与える影響などに関する調査研究 （(4)-②-1)）

【事業概要】

館内施設や設備（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境が文化財に与える影響の調査・分析を目的としている。次の 3 点の調査を継続的に実施し、得たデータの分析と情報共有を行うことで保存環境の向上を行う。

(1)温湿度センサーを用いた館内施設の温湿度調査

(2)展示ケース内に浮遊する塵埃調査（電子顕微鏡を用いた塵埃の観察）

(3)文化財害虫トラップの設置及び回収と解析

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　荒木臣紀

【主な成果】

(1)展示室や展示ケースに設置した無線式温湿度センサーで 24 時間リアルタイムモニタリングを実施した。取得蓄積した温湿度データから、展覧会ごとに情報を整理し展示室内の環境管理に役立てた。収蔵庫についても温湿度データロガーとデジタル温湿度計を用いた定期的なモニタリングと温湿度データの回収を行い、館内環境ワーキングループでデータ共有して空調の調整に役立てた。

(2)正倉院展終了後に、展示室、展示ケース内のデータロガー、題箋など 25 ヶ所の塵埃を採取し、電子顕微鏡での観察結果からケースの気密性に対する評価を行った。その後、結果を基に宮内庁正倉院事務所保存科学担当者を交えて評価検討を行ない、それを踏まえ、ケースに追加して環境を整える装置について調査を行った。

(3)3 年度に引き続き、文化財害虫の生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示に関わる箇所を中心に昆虫調査用トラップを設置し、2 か月に 1 回交換を行った。調査結果を蓄積し分析することで IPM(総合的有害生物管理)を推進し、文化財害虫の生息が確認された箇所について生物対策の専門業者と結果を検討し、重点的に清掃し被害の低減に努めた。また、清掃と防塵マット交換を定期的に実施し、展示室・収蔵庫の周辺の衛生環境保持に努めた。

【備考】

・　学芸部保存修理指導室員並びに総務課環境整備係員等により構成される、「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」を実施した。月に 1 回程度開催し、展示保存環境に関する問題点や改善案について協議を重ねている。

(1)展示室内温湿度調査：97 か所

(2)展示室、展示ケース内の電子顕微鏡を用いた塵埃調査：25 か所

(3)文化財虫害生息状況調査：100 か所

・「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」：8 回開催

塵埃調査の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3年度に引き続き、温湿度、文化財害虫のモニタリング、塵埃調査などを実施し、データの蓄積を着実に行った。さらに調査で得られた結果を踏まえ、現状を館内外の関係者に共有し、館全体で展示保存環境の保持と高断熱化工事等による改善を行い、保存環境維持を図った。また、なら仏像館についても、4年度は温湿度無線データロガーを新たに4台設置して、館内環境維持、光熱費抑制に向けた調査を進めることができ、年度計画を順調に遂行することができた。5年度以降も継続して調査を実施し、データの蓄積及び分析を進め改善に活かしたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東新館、西新館の展示室や収蔵庫では温湿度並びに文化財害虫に関するモニタリングや調査、空調運転方法の改善を年間通じて行っている。なら仏像館も同様にデータの蓄積を着実に継続して実施しており、装置の通信状況改善などを行って中期計画を着実に進めている。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1421C イ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他 有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 イ_文化財修理の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究（(4)-②-1)）

【事業概要】

本事業では、以下の２点の内容について実施した。

(1) 館蔵品や寄託品の修理前調査や修理作業に併せ、X 線 CT 撮影、X 線透過撮影、蛍光 X 線分析を実施し、所得した画像やデータを修理方針の策定に反映させた。

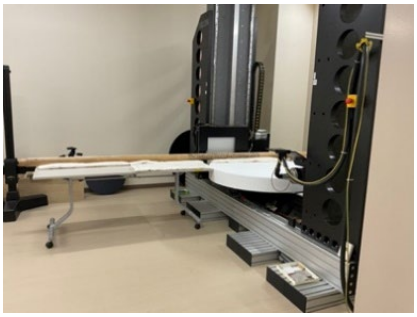
(2) 文化財保存修理所での修理中の文化財については、当館の研究員と工房の技術員が共同で光学調査を実施し、共に分析結果を検討して得られた結果を修理へ反映した。

【担当課】	学芸部	【プロジェクト責者】	保存修理指導室長　荒木臣紀

【主な成果】

(1) 館蔵・寄託の文化財（彫刻や漆工品など）の修理や展示作業に併せ、X 線 CT スキャナや X 線透過撮影、蛍光 X 線分析を実施し内部構造や納入品、象嵌の有無といった作品の状態把握を行った。これらの光学調査は研究や修理に活用すると共に、データの蓄積も進めた。

(2) 当館研究員と修理所工房の技術者が共同で X 線 CT スキャナ、X 線透過撮影や蛍光 X 線分析などの光学調査を行った。館蔵品や寄託品の修理前や修理中にこれらの調査を実施することで、修理へ成果を随時反映させることが可能となり、彫刻作品・漆工作品や絵画作品のより安全な修理に役立てることができた。



修理に伴うデジタル X 線撮影調査

修理に伴う蛍光 X 線分析

【備考】

・調査件数

X 線 CT スキャナ調査：32 件　蛍光 X 線分析調査：10 件、X 線撮影：3 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	修理等の際に内部構造や保存状態・材質情報に関する情報を得るため光学調査を実施した。X線CTスキャナやX線透過撮影は適切な修理に欠かすことのできないものとなっているが、4年度は装置の更新を行えなかったため既存の機器を活用して調査を実施した。また蛍光X線分析は、彩色材料の同定に重要な役割を果たしている装置であるが、支持具の改良が検討中のため活用が限定された部分もあった。現行機器を活用して得られた光学調査の結果は、修理調書に反映させるとともに修理方針の策定にも役立てており年度計画を実行できた。今後も装置を文化財の調査に適したものに改良や更新を行い、継続した調査並びにデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度も文化財保存修理所での修理内容を踏まえ、X線透過撮影や蛍光X線分析などの調査を行うことで修理方針の策定等に伴う調査を随時実施できたため、順調に中期計画を遂行できたといえる。特にX線CTスキャナは順調に稼働し、彫刻や漆工品などの修理に大いに役立っており、5年度以降も安定して稼働させるために装置の更新を行う予定である。また、その他各種調査分析装置においても改良を進めて活用範囲の拡大化を進めたい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1421Cウ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他 有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1）有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ウ　保存科学の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究（(4)-②-1)）

【事業概要】

美術史的な観点からの作品情報を裏付けるための科学調査を行うことで、作品評価の適正化を試みる。また、個別での調査に加え、博物館の特性を活かした横断的な作品調査を行うことで得られる情報を調査研究、展示、教育の分野で活用する。さらに、科学技術の進歩に伴って博物館資料への応用が可能になった新たな調査方法や従来からある調査方法の中から精度の向上した調査方法を博物館活動の中に取り入れる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　荒木臣紀

【主な成果】

(1)「大安寺のすべて」展における四天王立像などの木彫作品、発掘品のＸ線CT調査を行い多角的な視点から大安寺に関する研究を行った。

(2)寄贈、購入予定の工芸作品の蛍光Ｘ線分析調査、Ｘ線CT調査を行うことで材質や技法などを調査し、適正な作品評価を行う際の判断に寄与した。

寄贈、購入候補作品の蛍光Ｘ線分析の様子

【備考】

・調査件数

Ｘ線CTスキャナ調査：32件　蛍光Ｘ線分析調査：9件、Ｘ線撮影:3件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	寄贈、購入等、博物館には様々な文化財が持ち込まれてくるが、内部構造や保存状態、材質情報に関する情報が付随する事は少なく、当館側で調査を行って情報を得る必要がある。それら判断材料のために各種光学調査を実施し、調査の結果は、購入、寄贈、修理に反映させるとともに修理方針の策定にも役立てており、年度計画を実行できた。X線CTスキャナやX線透過撮影は近年益々構造調査や技法解明に欠かすことのできないものとなっているが装置更新はなかなか困難な状況であった。5年度以降も装置の改良更新や継続した調査並びにデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	肉眼では捉えられない情報を得られるX線を使った装置類は順調に稼働し、絵画、彫刻、漆工品や金工品などの調査、修理、展示に大いに役立っており、中期計画を順調に遂行している。5年度以降も安定して稼働させるために装置の更新に務める予定である。また文化財保存修理所での修理内容をふまえ、X線透過撮影や蛍光X線分析、ファイバースコープの調査を行うことで、修理方針の策定等に関わる調査を随時実施することができた。5年度以降も可能な範囲で修理前にそれら調査を行い、修理仕様作成などに役立てられるように努めていく。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1421Dｱ

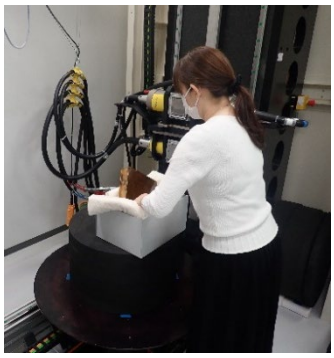
業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア　文化財の材質・構造等に関する共同研究　((4)-② -1))

【事業概要】
本研究では、X 線 CT スキャナ及び 3D デジタイザ等の非破壊的な調査手法を使用し、館内及び外部の多様な専門分野の研究者との学際的連携を通じて、各種文化財の材質・構造等に関する知見を得ることを目的とする。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	研究員　渡辺祐基

【主な成果】
(1)漆工品の構造調査
文化庁所有の「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度」のうち、化粧道具（手箱）を X 線 CT によって調査した。その結果、十二手箱、大角赤手箱、角赤手箱について、蓋鬘の上に甲板が載ることや、底板の木口に側板が接する入れ底となっていることなど、木地構造が明らかになった。併せて大角赤手箱の朱塗の成分の蛍光 X 線分析も行い、水銀朱が使用された可能性が示唆された。また、食籠（浦添市美術館蔵）の X 線 CT スキャンの結果、側板及び高台は曲輪造であり、肩及び尻部分は巻胎技法により制作されたことが明らかになった。



漆工品の X 線 CT 及び蛍光 X 線分析装置による調査風景

(2)土製地蔵菩薩坐像の調査
九州北部を中心に分布する特徴的な一群の土製地蔵菩薩坐像を X 線 CT スキャンで調査した。その結果、土製地蔵菩薩坐像の表面形状及び内部構造に関するデータが得られ、その分類や製作過程について考察することができた。

【備考】
・X 線 CT 調査件数 48 件、調査回数 208 回
・3D デジタイザ調査件数 12 件、調査回数 22 回
＜論文等＞
・渡辺祐基、川畑憲子、板谷寿美、吉川美穂、田中麻美、木川りか「国宝『初音の調度』のうち刀掛、寄り掛り、掛硯箱（胡蝶蒔絵）の木地構造および制作技法の X 線 CT 調査」『日本文化財科学会第 39 回大会研究発表要旨集』p.116-117（9 月）
・川畑憲子、渡辺祐基、和泉田絢子、田中麻美「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度の木地構造について（3）化粧道具（手箱）」紀要『東風西声』18 号、p.77-86（5 年 3 月）
・若杤善満、渡辺祐基、田中麻美、岡寺　良「土製地蔵菩薩 坐像の製作過程の復元的考察―中世九州北部に出土する特徴的な一群について―」紀要『東風西声』18 号、p.17-35（5 年 3 月）
・大西智洋、渡辺祐基、金城聡子「黒漆孔雀牡丹唐草沈金食籠の修復実績と X 線 CT 調査報告」『浦添市美術館紀要』18 号、p.10-18（5 年 3 月）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は60件の文化財等の調査を実施し、漆工品をはじめとする各種文化財について、高精細な3次元データを収集できた。得られたデータについて、所蔵者、各分野担当者、修復技術者等とともに解析及び協議を行い、内部構造や製作技法に関する知見を得ることができた。これらの成果は、研究会、学会発表及び論文並びに展示における解説パネル等を通じて公開した。以上のことから、所期の目標を遂行し、年度計画を達成したと判断しＢ評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、外部研究者とも協力し、各種文化財の材質・構造等に関する調査に取り組んだ。4年度は、多数の漆工品や山岳信仰に関する遺物の調査を実施し、検討会や研究会によって内部構造や製作技法に関する理解を深めた。5年度以降も調査を継続するとともに、学会発表及び論文等によって成果を幅広く公表する計画である。以上の成果から、中期計画を円滑に遂行したと評価した。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1421Dｲ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 イ　博物館における国内・アジア地域の文化財保存修復に関する研究　((4)-②-1))

【事業概要】
本事業は、国内・アジア等で制作され、修理されてきた館蔵品の解体修理を行い、各国で過去に行われた修理の理念や技法を調査する。また、これら修理作品の展示を通じて、文化財修理の理念や工程、修理に伴う知見等の成果を公開し、博物館における文化財の保護や継承の意義と取り組みについての理解を深めることを目的とする。

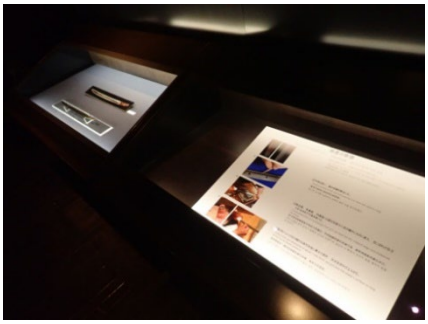
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長　志賀智史

【主な成果】

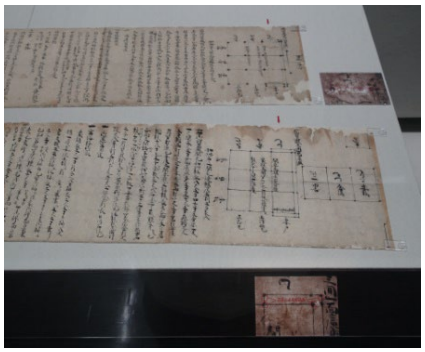
・大韓民国の古墳(統一新羅時代・８ｃ)に施された浮彫十二支像の拓本について、解体修理に伴う調査を行った。現状ではパネルに貼りつけられていたが、類例の調査により韓国では同様な装訂が一般的であることが分かった。しかし、この装訂では、常に光や空気に晒されるため、今回の修理では装訂を掛軸装に変更し、太巻きに巻き、桐箱に収納する伝統的な日本の方法を採用することとした。

・文化交流展示「賛助会費による修理成果展」
実施日：4 年 3 月 23 日～5 月 8 日の 7 週間
展示場所：文化交流展示室　第 7 室
　元年度～2 年度の賛助会費で修理した作品 4 件を、修理工程を紹介するパネルや修理道具も加えて展示した。賛助会員へ謝意を示すとともに、「文化財をまもり伝える」という博物館の役割を広く周知する機会とした。
　特に、展示には近現代に現地で修理されたと思われる黄地鉢（イラン・11-12ｃ）を加え、旧修理において石膏復元、オリジナル部分も含め復元部分の広範囲に補彩を行うといった各国の考古資料に共通する修理技法が採用されていたことをパネルで紹介した。

・文化交流展示「重要文化財『鷹尾家文書』～修理と新たな発見～」
実施日：10 月 29 日～12 月 18 日の 7 週間
展示場所：文化交流展示室　第 9 室
　30 年度～2 年度に当館修復施設で修理した重要文化財「鷹尾家文書」について、修理工程及び修理によって明らかになった知見を、作品と共にパネルで展示し、修理に伴う調査の重要性を示した。



「賛助会費による修理成果展」展示風景



「重要文化財「鷹尾家文書」～修理と新たな発見～」展示風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	保存修理事業を広く周知するため、例年バックヤードツアーを行っていたが、4年度も新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。しかし、修理作品等の展示を通して、博物館の役割である本事業を広く周知した。また、3年度に引き続く海外渡航制限のため、ベトナムへの渡航が叶わず、現地での修理を諦めざるを得なかったが、事業再開に向けた準備を進めた。以上から年度計画を遂行したと評価し、左記の評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は中期計画の2年目として、修理に関連する作品及び修理工程パネルを展示室にて展示することで、保存修理事業を周知することができた。 元年度に開始したベトナムでの紙を素材とする文化財の修理事業は、日本の修理技術を用いたベトナム初の修理であり、今後の展開が期待される。引き続き海外渡航に係る世界的な動向を注視しつつ事業再開を図る。新型コロナウイルスの影響は否定できないが、中期計画に沿った準備を円滑に進めたことからＢ評定とした。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1421Dｳ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ウ　博物館危機管理としての持続的 IPM システムの研究　((4)-②-1))

【事業概要】

本研究の目的は、我が国の博物館における IPM（総合的有害生物管理）普及のための持続的なシステムづくりである。館内のさまざまな部署との連携はもちろんのこと、地元 NPO 法人やボランティア等とも協力し、持続的に IPM を実践するためのシステムづくりを行う。また、研修会の開催等を通じて IPM の社会的理解度を深めつつ、博物館等における IPM を軸にした地域共働システムづくりを目指すものである。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長兼環境保全室長　木川りか

【主な成果】

(1)　「IPM セミナー」の開催

IPM セミナーを開催した（11 月 15 日、主催：当館、共催：文化庁・東京文化財研究所）。月刊文化財 10 月号の掲載内容を中心として、文化財の生物被害対策や文化財害虫に関する最新の研究を紹介した。現地参加は博物館、美術館、図書館関係者など約 130 人にのぼり、セミナー概要を収録した動画を後日オンラインで公開し約 300 人が視聴した。

(2)　「IPM オンライン相談会」の開催

2 年度、3 年度に引き続き、オンラインによる 1 施設あたり 1 時間の IPM 相談会を募集し、7 施設が参加した(12 月 22 日、5 年 1 月 26 日～27 日の 3 日間)。

(3)　「環境調査報告会」の開催

館内関係者及び IPM 業務委託業者間において、IPM など保存環境に関する近年の動向について報告会を実施し、情報交換を行った（7 月 2 日）。

(4)　館内職員向け IPM 研修の開催

主に新任職員を対象として、館内職員及び館内関係業者 33 人を対象に IPM 研修を実施した（4 月 27 日、5 月 11 日）。館内の各部署の関係者と館の IPM ポリシーを共有、IPM 活動に対する理解を深める点で重要な役割を果たしている。

(5)　環境ボランティアの活動として、インジケータ作成、文化財課の協力を得て梱包用綿布団の作成、交流課の協力のもと屋外研修（野鳥観察会）、スタッフによる小話会などの活動を実施した。

環境調査報告会の様子

環境ボランティア屋外研修の様子

【備考】

・IPM セミナー（1 日間）1 回　現地参加人数：132 人、オンライン視聴者数：301 人
・IPM オンライン相談会（3 日間）1 回　参加施設数：7 施設
・環境調査報告会（1 日間）1 回　参加人数：13 人
・館内職員向け IPM 研修（1 日間）2 回　参加人数：33 人

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館の危機管理として館内のIPM活動を進めるとともに、その経験をもとにIPMセミナー、IPMオンライン相談会を開催し、全国各地の文化財関連施設への普及に資することができた。また、環境調査報告会や環境ボランティア活動など新型コロナウイルスの影響により縮小していた事業を再開するとともに、オンラインも活用して活動の幅を広げることができた。また、館内の関係部署や地元NPO法人、ボランティア等との情報共有を積極的に行い、持続的IPMシステムづくりに向けた活動を充実させることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	IPM 活動についてのノウハウを生かし、中期計画のとおり、全国の博物館等から総務系と学芸系など職種の異なる担当者に向け、継続的に IPM の普及事業を実施することができた。対面でのセミナー及びオンラインによるセミナー動画の配信や相談会などそれぞれの方法のメリットを生かして内容の充実した普及事業を展開し、中期計画を計画的に推進した。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1421Dｴ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 エ　展示収蔵環境の空気質に関する調査研究　((4)-②-1))

【事業概要】
展示収蔵環境における空気質を調査し、揮発性有機化合物濃度を低減させる実用的な対策の確立に向けた調査研究を行う。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長　木川りか

【主な成果】

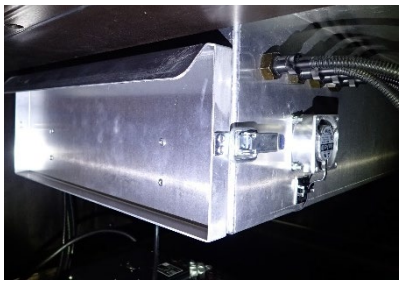
(1)展示空間で発生する揮発性化学物質（VOC）の継続的調査
展示ケース内における有機酸やアルデヒド等の汚染物質の濃度を継続的に調査し、特に対応が必要であるケースを把握し、優先順位をつけた対応に役立てた。

(2)展示ケースの換気システムに関する検証
展示ケース内の空気環境を清浄に保つため、対策の優先順位が高い単体ケース及び壁付ケースにそれぞれ換気ファンを取りつけ、その効果を検証した。その結果、通常の展示スケジュールの中でタイマーを活用して効率的に換気し、良好な空気質の状態が保てることがわかった。

(3)揮発性化学物質が発生しにくい材料や空気の循環がしやすい展示台の製作法を企画課とともに検討のうえ試作した。

展示ケース内のVOC濃度の測定

(4)展示品から放出される汚染物質の特定と対応
海揚がり考古遺物など、展示品の種類によっては、遺物そのものが海底の硫化物（硫黄化合物）を含んでおり、それから硫黄化合物蒸気が放出されることによって、金属製品に錆が生じる場合があることがわかった。今後このような遺物の展示にあたっては、同じ空間に展示する作品への影響を考慮する必要がある。


調湿剤ボックスに取り付けた
タイマー付き換気ファン

ケース内で空気が流通しやすい
構造のアルミ製展示台の製作

【備考】
・学会発表：和泉田絢子、渡辺祐基、桑原有寿子、富松志帆、松尾実香、木川りか「展示ケース内 VOC 濃度低減のための内装材及び換気ファンの効果に関する検証」文化財保存修復学会第 44 回大会（6 月 19 日）
・研究紀要：和泉田絢子、渡辺祐基、木川りか「博物館の展示収蔵空間における空気環境の管理と対策事例について」『東風西声』第 18 号

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示収蔵環境における空気質について3年度に引き続き詳細な調査を行い、データを蓄積することができた。得られたデータをもとに、展示空間に用いる適切な材料及び製作法の検討や選定を行い、適切な換気スケジュールを作成するなど、現場での対策に生かしている。また、館内で情報共有を行い、揮発性有機化合物濃度を低減させるための方策を協議し、より良い保存環境を維持したため、B評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度は中期計画の2年目として、展示環境の空気質について引き続きデータを蓄積した。さらに、4年度は具体的な対策に生かすことができ、中期計画を円滑に遂行できたと評価した。5年度以降も継続的に調査を実施し、博物館等で運用可能な空気環境改善の実用的な方策について検討を進め、広く応用できる手法の確立が課題である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 1422Aア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)博物館情報、文化財情報に関する調査研究 ア　博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究

【事業概要】

当館における収蔵品管理システムの調査研究を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究を行い、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。

【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長　村田良二

【主な成果】

1) 収蔵品管理システムについて、作品検索、総合文化展管理、鑑査会議管理、作品管理、修理予定・履歴管理、文献情報管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。

2) 展示中あるいは近く展示予定となっている作品のうち、ColBase に画像が掲載されていないものを抽出する機能を実装した。これにより、ColBase に画像を掲載する作業を優先するなど、より一般の利用者のニーズに合った運用を効率的に行えるようになった。

ColBase に画像がない作品の抽出画面

3) 管理区分として「長期借用品」を追加し、長期借用品を適切に管理できるようになった。

4) 会議資料等の PDF 出力において CJK 統合漢字に対応し、日本語の JIS 第 3 水準、第 4 水準漢字や、中国語漢字を正しく表示できるようになった。また鑑査会議資料について Word 形式で出力できるようにし、修正や微調整が容易に行えるようにした。

5) セキュリティ対策を強化するため、アプリケーションログおよびデータベースログから、権限のない機能へのアクセス記録、アプリケーションが通常行わないデータベース操作を検知する仕組みを実装した。

【備考】

収集データ件数　245,715 件
（内訳）
作品データ件数　230,857 件
平常展データ件数　6,563 件
鑑査会議データ件数　110 件
貸与データ件数　2,378 件
修理データ件数　2,807 件
文献データ件数　3,000 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の効果的・効率的な管理のためのシステムを継続的に開発し、館内からの要望に答えながら着実に発展させることができた。展示中あるいは展示予定がある作品の画像を優先的にColBaseに掲載するため、該当作品を自動的に抽出する機能を実装し、作業を大幅に効率化することができた。またPDF出力においてCJK統合漢字に対応することにより、列品の名称にしばしば用いられているJIS第3水準、第4水準漢字、あるいは中国語の漢字について、会議資料等に正確に表示できるようにした。さらに情報セキュリティ対策として、不正アクセスの自動検知を実現した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間では、より業務の実態に即した継続的な改善と、収蔵品に関する様々なデータ資源を集約的に扱える統合環境の構築を目指す。2年目となる4年度は、ColBaseで公開されている作品のうち画像のニーズが高いものについて掲載作業を効率的に行えるようにするとともに、セキュリティ対策を強化することができた。5年度以降は、さらに公開情報との連動性を高める方策を検討する。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1422Aイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)博物館情報、文化財情報に関する調査研究 イ　創立 150 年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究

【事業概要】

4 年度の当館創立 150 年へ向けて『東京国立博物館 150 年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料を作成する。また、原稿の整理や入稿など編集作業を行う。4 年度は関係文書類の整理とデータ化、保存措置を続けた。また、寄稿された原稿の整理、入稿、校正と、資料編用のデータ整理、入稿、校正を推進した。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	東京国立博物館百五十年史編纂室長・恵美千鶴子

【主な成果】

(1)収集した文書類の整理・目録化・保存措置（4 月 1 日～：月に 2 日程度）

資料保管室（資料館 3 階）に収集した約 8,500 件の館史関係文書類について、27 年度に完成した目録(仮)と対応させながら、資料の保存や出納のために、中性紙箱への入れ替えを行った。また、館内より新たに収集した資料について目録を作り、活用できるように整理をした。以上は、東京国立博物館百五十年史編纂室アソシエイトフェロー1 名、有期雇用職員 1 名がともに作業を行った。

(2)『150 年史』の原稿についての整理と入稿、校正作業（適宜）

『150 年史』本編の原稿について、内容を確認し文体の統一を行いながら、編集出版業者に入稿した。編集出版業者より出来てきた校正用紙を執筆者に校正してもらい、編纂室でさらに確認をして業者へ戻した。再校正の際に全文通しての確認作業を進めた。

また、資料編の原稿データを作成し、入稿、校正作業を進めた。以上の作業は、室長とアソシエイトフェロー1 名、有期雇用職員 1 名が進めた。

(3)館史の内容に即した文書類の整理・デジタル化と館内事業への資料提供

a)『100 年史』資料のデジタル化（4 月 1 日～：週に 1 日）

『150 年史』編纂のために、『100 年史』編纂時の資料のデジタル化を行った。アソシエイトフェロー1 名、有期雇用職員 1 名がこれを進めた。

b)『150 年史』資料編のための年表作成（適宜）

「出版物年表」「教育普及年表」など、150 年史資料の中から関係するデータを抜き出して年表を作成した。

(4)古写真のデジタル化と館内事業への資料提供（8 月 17 日ほか、適宜）

館の歴史に関わる古写真を収集しデジタル化した。それらの古写真データを『150 年史　普及版』や特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」など館内の創立 150 年記念事業に提供した。それらの編集や校正作業の補助も行った。

(5)問い合わせへの対応と関係資料の提供（6 月 21 日ほか）

『150 年史』執筆者などへの資料提供と、館内・館外からの館史に関する問い合わせに対応した。

(6)研究成果や状況報告の公開（7 月 20 日ほか）

『150 年史』編纂に関わる資料収集や整理、編纂内容に関する研究成果や編纂の状況報告を講演や論文で公開した。

【備考】

(1)収集した文書類の整理：31 日間実施
(3) a)『100 年史』資料のデジタル化：43 日間実施（767 点）
(4)『150 年史　普及版』の古写真デジタル化：200 点
(5)資料提供・問い合わせ対応：8 件
(6)研究成果や状況報告の公開：4 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度より継続的に行ってきた文書類の整理・保存措置について4年度も進めた。また収集・整理した文書類のデータを活用し、『150年史』執筆者や問い合わせ、館内で開催された記念事業に対して資料提供を行うことができた。そして、寄稿された原稿と資料編用データを整理・入稿し、校正作業も行い、編集出版業務を進め、編纂に関わる資料収集の経緯など研究成果や状況報告の公開も行った。原稿執筆の遅れから少しずつ編集作業時期にずれが出て、当初予定していた『150年史』の完成時期を遅らせることとなったものの、4年度の進行はおおむね順調であった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	『150年史』執筆者への資料提供や館史に関わる問い合わせ、調査研究などの要望に3年度に引き続き迅速に対応できた。また、原稿の整理や入稿、校正を順調に進めることはできたため、『150年史』完成時期を遅らせることとなったものの、中期計画に対する進捗状況は順調であるといえる。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 1422Bア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　データベースやアーカイブズ等、収蔵品等情報の整理・活用に関する調査研究　（(4)-②-2)）

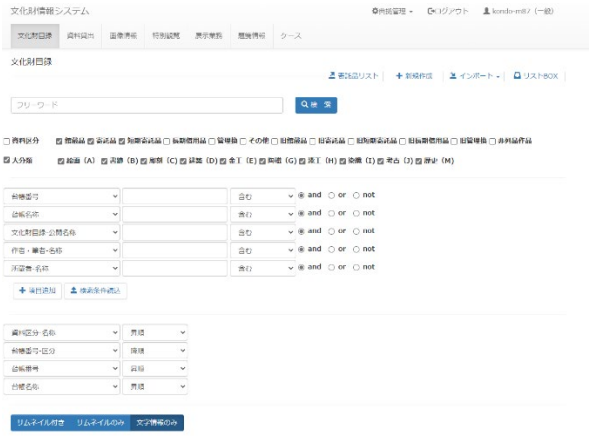
【事業概要】
当館で運用している収蔵品管理システムや図書管理システムなどの業務用システムをはじめ、公式ウェブサイトや館蔵品データベースなどの外部公開システムなど、各種システム運用上の課題を整理するとともに、博物館情報に関する調査研究を進める。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長兼列品管理室長　羽田聡

【主な成果】
(1)「情報システム検討委員会」を開催し、当館が持つ情報を蓄積、管理するための収蔵品管理システムや蔵書管理システム、情報を発信するための公式ウェブサイト、館蔵品データベースなどの運用、改善について検討するとともに、博物館情報に関する研究を進めた。
(2) 収蔵品管理システムと公式ウェブサイトについて、3 年度にまとめたシステム運用上の課題と改善点を基に委託先と打ち合わせを行い、それぞれリニューアルを行った。
(3) 3 年度に策定した仕様書をもとに、蔵書管理システムをリニューアルした。
(4) 当館で運用中のシステムについて、耐用年数や必要な予算などをまとめ、整理した。

【備考】

（リニューアル前の収蔵品管理システム）



（リニューアル後の収蔵品管理システム）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3年度に取り掛かった各種システムのリニューアルを、全て完了することができた。また、サーバを運用するうえで発生するメンテナンスの労力や、ランニングコストの節減を主たる目的として、物理サーバとクラウドサーバを適宜使い分けるべく、一部システムを実験的にクラウドサーバへ移行した。以上の成果から、B評価とした。 今後、これらシステムの運用を通じて、改善点を洗い出すとともに、システムの改修を進める。また、システムに登録する画像等のデータを保存するファイルサーバが耐用年数を迎えているため、仕様を定めて5年度以降にリプレイスを行う予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の 2 年目として、3 年度から進めていた各種システムを全てリニューアルすることができたため、リニューアルに急を要するシステムはなくなった。5 年度以降、各システムの運用を通じて改善点をまとめ、課題管理表を整理するとともに、小規模なシステム改修を行いつつ、次期リニューアルにも備える。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1430A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究　③国内外の博物館等との学術交流等

【年度計画】
・(4館共通) Ⅰ-1-(4)-③-1)、2)、3)、4)
・(東京国立博物館) Ⅰ-1-(4)-③-1)、2)

担当部課	学芸企画部企画課国際交流室	事業責任者	室長　楊鋭

【実績・成果】
（４館共通）
・当館と韓国国立中央博物館共同主催の「日韓博物館の保存科学設備の活用及び展望」をテーマとしたオンラインセミナーを開催した（10 月 28 日）
・館内展示作品の題箋デザインや多言語解説の内容を継続的に改良・充実させた。
・3 年度からスタートした英語、中国語、韓国語による SNS（Twitter、Instagram、Facebook）投稿のアクセス数、ユーザー年齢層と所在地域などデータを分析し、発信内容の充実と改善を図った。
・日本・アジア美術に関する用語の当館としての英訳の標準を示すガイドブックを出版・公開した（12 月 21 日）。
（東京国立博物館）
・中国国家博物館主催の日中韓国立博物館長会議はオンラインにて開催、3 館における今後の交流および協力の強化について意見交換した（7 月 27 日）。また、3 館による共同企画展覧「東方吉金―中韓日古代青銅器展」を中国国家博物館にて開催した（7 月 26 日～10 月 9 日）。
・平成 26 年から継続して実施しているミュージアム日本美術専門家連携・交流事業の一環として、日本美術専門家会議を 3 年度に引き続きオンラインにより開催した（5 年 2 月 10 日）。

【補足事項】
(4 館共通)
・オンラインで行った日本美術専門家会議の国内外参加者数は 59 人。
・3 館による共同企画展覧「東方吉金―中韓日古代青銅器展」の入場者数は 211,616 人。
・韓国国立中央博物館と共同主催の「日韓博物館の保存科学設備の活用及び展望」オンラインセミナーの参加者は 85 人。

東方吉金展会場

日本美術専門家会議

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 3 年度と同様、新型コロナウイルスの影響が続いているため、海外の博物館の定期的に行ってきた学術交流や、研究者の招聘及び当館研究員の海外派遣はすべて中止した。代替となる取組みとして、オンラインにて様々な交流を積極的に推進し、博物館同士のネットワークを維持した。 4 年度で 9 度目となるミュージアム日本美術専門家会議はオンラインにて開催し、11 ヵ国 59 人の参加があった。 また、外国人向けの SNS による多言語の情報発信は、博物館の展示活動や収蔵品の紹介により、日本の伝統文化や美術を海外へ広く紹介することに繋がり、フォロワー数も徐々に増加しており、これからも発信内容をさらに充実していきたい。 以上の実績より、年度計画を遂行できたと判断し、Ｂ評価とした。

【中期計画記載事項】
2019年 ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 新型コロナウイルスの影響が続いている中、海外の博物館との学術交流や人的交流はオンラインにて積極的に行った。同時に、日本の伝統文化・美術を海外向けに広く紹介するために、SNSによる英語、中国語、韓国語の情報発信を継続して実施する。 訪日外国人も徐々に増加しているため、5年度以降も館内における多言語対応を改良し、外国人来館者向けのイベントを積極的に取り込むとともに、引き続き海外の博物館・美術館との交流・連携を図り、中期計画を推進する。また、デジタルメディアを活用して、持続的に発展可能な博物館国際交流及び効果的な情報発信に努めたい。

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1430B

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等

【年度計画】・Ⅰ-1-(4)-③（４館共通）1)2)3)4)

担当部課	学芸部	事業責任者	調査・国際連携室長　降矢哲男

【実績・成果】

徐々に緩和されてきてはいるものの新型コロナウイルスの感染拡大により、国際的な人的往来が厳しく制限される状況が継続するなか、多くの事業をオンラインで行い、ウェブ会議などを積極的に活用することで以下の成果を上げることができた。

1）2）3）2年度に学術交流基本協定を締結したアメリカのサンフランシスコ・アジア美術館と当館蔵品を活用し、海外展を企画している。新型コロナウイルスの影響により、3年度9月開催予定であったが、5年度11月に延期し、翌6年度5月頃まで開催できるように準備を進めている。

1）2）3）サンフランシスコ・アジア美術館において、上記展覧会と同時期に開催が計画されている当館寄託の京都の禅宗寺院の名宝を紹介する展覧会について、寄託者、アジア美術館と協議し、開催に向けた準備を継続して行った。

2）4）国際シンポジウム「アジアの博物館教育は、いま ―国立博物館の事例から―」を5年2月4日に開催し、韓国、シンガポール、日本の研究者による事例報告とディスカッションを行った。日英中韓の同時通訳を通じて、当日会場及びWEBにより258名の参加を得た。

【補足事項】

4）バード大学院センター（5月6日、米国ニューヨーク市　オンライン参加）国際シンポジウム「Conservation Thinking in Japan」で当館職員1名が参加し、発表した。

4）アジア・ソサイエティ（6月27日、東京、ハイブリッド形式）「Art for Breakfast」シリーズとして当館職員1名が講演した。

4）「だれもが文化でつながる国際会議」（7月2日）、プレ・セッション「アジアの文化施設で広がる、社会包摂への取り組み」に参加した。

4）ICOMプラハ大会（8月20～28日　チェコ・プラハ）で当館職員1名が参加し、パネルディスカッション発表した。

4）ICOMプラハ大会（8月20～28日　チェコ・プラハ）で当館職員1名が参加し、ICDAD国際委員会セッションで座長を務めた。

4）ICOMプラハ大会（8月20～28日　チェコ・プラハ、オンライン参加）で当館職員1名が参加し、COSTUME国際委員会で発表した。

国際シンポジウム「アジアの博物館教育は、いま ―国立博物館の事例から―」ディスカッション

4）中国古陶瓷学会「唐三彩学術研討会」（8月28日、オンライン）で当館職員1名が参加し、研究発表した。

4）ASEAN文化遺産教育国際ワークショップ（11月14日、カンボジア・プノンペン）で当館職員1名が参加し、講演した。

4）第4回世界津波博物館会議（12月15日、東北大学）で当館職員1名が参加し、パネルディスカッション発表した。

4）立命館大学ユネスコ・チェア「文化遺産と危機管理」国際研修（9月22日、京都、オンライン）で当館職員1名が講師を務めた。

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 2、3年度と同様に新型コロナウイルスの流行による制約が大きく、国を超えての研究員の招聘・派遣が困難な状況ではあったものの、ウェブ会議などオンラインツールの効果的な活用により、活発な意見交換の場を設けることができた。国際シンポジウムでは、徐々に新型コロナウイルスにともなう規制等も緩和されてきたこともあり、韓国、シンガポールから研究者が来日し、対面とオンラインを併用で行うことができた。 以上から、Ｂ評価が妥当であると考えられる。

【中期計画記載事項】

2019年ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 総じて、オンラインを活用して会議・シンポジウム等に参加し、海外の研究者や研究機関と多面的に交流することができた。とりわけ、3年度に引き続き国際シンポジウムを企画・開催し、この2年間途絶えていた対面での海外の研究者との交流を実現できたことは喜ばしい。また、今後の国際交流のあり方についての参考とするべく、3年度に試行したオンライン形式に加え、一般参加者の来場も受け付けるハイブリッド形式でのシンポジウムを実験的に開催するなど、積極的な事業展開により中期計画を順調に達成しているため、Bと評価する。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1430C

中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究　③国内外の博物館等との学術交流等

【年度計画】
・Ⅰ-1-(4)-③（4館共通）1)、2)、3)、4)

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　吉澤悟

【実績・成果】
（４館共通）
1)学術交流協定を締結している韓国の国立慶州博物館から2名を招聘し、情報交換を行った。
　韓国の国立扶余博物館研究員と展示や環境調査に関して当館において意見交換を行った。
　韓国の国立益山博物館研究員と展示や教育事業に関して当館において意見交換を行った。
2)職員6人を海外に派遣し、現地の研究者と交流を図った。
　インドネシア1名、米国4名、英国・仏国1名。
3)セインズベリー日本藝術研究所、大英博物館、敦煌財団及び米国斎藤財団と意見交換を行った。
4)東京国立博物館主催の海外ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業専門家会議、国際交流オンラインセミナー日韓博物館の保存科学設備の活用及び展望に職員を派遣した。浙江省博物館主催の国際シンポジウム「博物館と地域振興」に職員を派遣し、講演「外国人観光客の影響による博物館の変化　―奈良国立博物館を例として―」を行った。

【補足事項】

韓国・国立慶州博物館長との
文化財展示に関する意見交換

米国における調査

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 3年度に引き続き、新型コロナウイルスの影響により海外との人的交流に制約がある状況であったが、学術協力を結ぶ韓国の博物館から研究員の招聘を再開できたこと、また、職員を海外の研究機関に派遣できたことは大きい。他にも、諸外国の研究員との対面・オンラインでの意見交換や、国際シンポジウムでの発表など、時宜に適った学術交流を行うことができ、着実に計画を実行した。

【中期計画記載事項】
2019年 ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 新型コロナウイルス感染拡大以降、初めて海外の研究者の招聘、職員の海外への派遣、対面での海外研究者との交流が実現した。また、継続してオンラインを活用した学術交流も行っている。このように、感染症対策を講じながら多様な形で海外との学術交流を実現しており、中期計画は順調に遂行できている。

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1430D

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等

【年度計画】
・Ⅰ-1-(4)-③（４館共通）1）、2）、3）、4）
・Ⅰ-1-(4)-③（九州国立博物館）1）

担当部課	学芸部博物館科学課 交流課 総務課	事業責任者	課長　木川りか 課長　田中篤 課長　執行正一

【実績・成果】
（４館共通）
1)2)3)4)
タイ、フランス、ドイツなど4か国の博物館、美術館等へ、延べ5人派遣し、各自の研究テーマに係る研究の推進及び研究交流を行った。
カナダ保存研究所(CCI)の研究者と、対面及び一部オンラインで、日本美術の色材の劣化に関する研究協議を実施した。今後も、さらに学術交流を一層進めていく計画である。

カナダ保存研究所の研究者とのオンライン研究協議（9 月 22 日）

（九州国立博物館）
1)
・日米両国間の学識者80人が集い、両国の文化・教育交流に関する諸問題や文化・教育分野での交流増進等を目的とする「日米文化教育交流会議(カルコン)」国際シンポジウムを共催した。（10月24日）
・学術文化交流協定を締結した韓国国立公州博物館・扶餘博物館と相互訪問の再開に向けて協議し、両館を館長が訪問した（2月8日～9日）。
・タイ芸術局、ベトナム国立歴史博物館及び成都博物館との学術文化交流協定を更新した。

カルコン・シンポジウム
（10 月 24 日）

【補足事項】

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 学術研究交流では対面とオンラインを併用して推進した。「日米文化教育交流会議(カルコン)」では、日米の政府関係者や学識経験者等が多数集いシンポジウム、ランチ・セッション及び展示室観覧を通じて日米の相互理解を深めた。韓国とは交流再開に向けた取り組みを推進し、タイ、ベトナム及び中国とは学術文化交流協定を更新した。以上の成果から、年度計画を達成できたと評価し、Ｂ評定とした。

【中期計画記載事項】
2019年ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 新型コロナウイルスの影響のため、海外渡航を伴う相互交流には今なお制限が残るが、オンラインだけでなく、対面による国際会議を開催し、交流再開のための取り組みを進めた。中期計画に基づき、渡航に伴う制限が解除されたら活発に相互交流するための環境整備を進めたことから、Ｂ評価とした。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1440A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表

【年度計画】
・Ⅰ-1-(4)-④（東京国立博物館、京都国立博物館）1)
・Ⅰ-1-(4)-④（東京国立博物館）1）、2)、3)、4)

担当部課	学芸企画部企画課 学芸企画部博物館情報課 学芸研究部調査研究課	事業責任者	課長　原田あゆみ 課長　村田良二 課長　松嶋雅人

【実績・成果】
（東京国立博物館、京都国立博物館）
1)・『東京国立博物館文化財修理報告 23』PDFファイルを当館ウェブサイトで公開し、研究情報の普及を図った。
（東京国立博物館）
1)・「東京国立博物館研究情報アーカイブス」の運用を継続し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図った。
・特集印刷物リーフレット等10件のPDFファイル版を当館ウェブサイト上に全件公開することによって、研究情報の普及を図った。
・「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」に「『大小暦類聚』データベース」を追加した。また、各研究員の研究成果を継続して更新し、インターネットを活用した情報公開の充実を図った。
2)・『東京国立博物館紀要 58 号』を刊行した。
・『法隆寺献納宝物特別調査概報 XLII(42) 竜首水瓶』(3 年度編集完了）を刊行した。
・刊行物リポジトリの準備作業を行った。
・『修理調査報告 五馬図巻』『東京国立博物館セレクション 絵巻』『続 根付　高円宮コレクション』『東京国立博物館 考古室へいこう』（考古室ガイドブック）等を刊行した。
・『博物館でアジアの旅　アジア大発見！』を刊行した。
・特別展・特別企画展図録 4 件、特集等印刷物 16 件（ﾘｰﾌﾚｯﾄ 10 件、冊子 6 件）を編集した。
3)・研究誌『MUSEUM』697 号～702 号（6 冊）を刊行した。

【補足事項】

【評価指標】	4年度実績	目標値	評定	経年変化	30	元	2	3
有形文化財の収集・保管・展示等に係る調査研究件数	32件	-	-		31	36	25	27

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」で新規に1件のデータベースを公開した。本データベースについては、関連学会においても発表され今後の活用が期待される。「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」では研究員の調査研究活動等に関する情報も随時公開した。また、紀要、『MUSEUM』等の定期刊行物を刊行するとともに、文化財修理報告等を刊行することができた。加えて、150周年記念特集展示の刊行物を増やすことで充実した情報を提供し、特集印刷物リーフレットのPDFファイル版をウェブサイトに掲載することでさらなる情報公開に努めた。さらに、リポジトリ導入準備として、過去の刊行物のリスト作成や校正作業を進めた。刊行物リポジトリを導入するためには、必要な経費を予算化する必要がある。なお「博物館ニュース」については昨年度からⅠ-1-(3)教育・普及活動へまとめている。

【中期計画記載事項】
文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などを順調に刊行した。近年の追加寄贈によって、重版となっている『根付』続編の刊行もでき、販売部数を伸ばすことができた。『東京国立博物館文化財修理報告』はウェブサイトでの公開を開始し、特集展示リーフレットをはじめとして、インターネットを活用した調査研究成果の発信を行うことができた。

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1440B

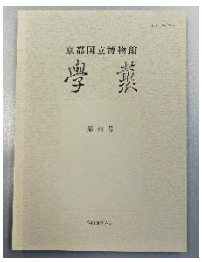
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究　④調査研究成果の公表

【年度計画】
・Ⅰ-1-(4)-④（東京国立博物館、京都国立博物館）1）、（京都国立博物館）1)、2)

担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長　山川曉 調査・国際連携室長　降矢哲男 保存修理指導室長　大原嘉豊

【実績・成果】
（東京国立博物館、京都国立博物館）
1)『文化財保存修理所　修理報告書』20を刊行した。

（京都国立博物館）
1）研究紀要である『学叢』44を刊行した。
2)『社寺調査報告』32（観心寺彫刻編）を編集・刊行した。

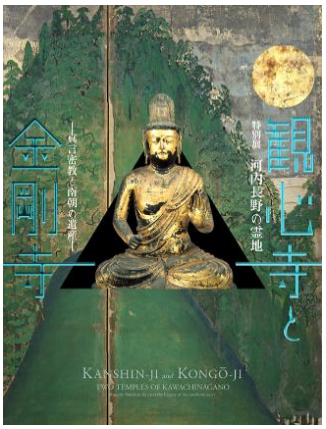


『学叢』第 44 号

【補足事項】
（京都国立博物館）
・『文化財保存修理所　修理報告書』20は、元年度に文化財保存修理所で修理が完了した作品を掲載している（修理報告149件、銘文報告15件）。国指定の文化財及び当館以外の国立博物館が管理する作品はそれぞれ報告書が刊行されるため割愛している。

・『社寺調査報告』32（観心寺彫刻編）　は、檜尾山観心寺（大阪府河内長野市）所蔵の文化財悉皆調査の報告書である。悉皆調査が未完了であったため、4年度刊行の『社寺調査報告』31（観心寺）では掲載を見送った彫刻について、別途補足調査を実施して報告書を作成したものである。

・特別展『河内長野の霊地　観心寺と金剛寺―真言密教と南朝の遺産―』の図録を編集・発行した。
・特別展『京に生きる文化　茶の湯』の図録を編集した（発行は読売新聞社）。
・親鸞聖人生誕850年特別展『親鸞―生涯と名宝』の図録を編集した（発行は朝日新聞社、ＮＨＫ京都放送局、ＮＨＫエンタープライズ近畿）。
・特別展『東福寺』の図録を東京国立博物館と共に編集した（発行は読売新聞社）。



特別展『河内長野の霊地』図録

【定量的評価】項目	4年度実績	目標値	評定	経年変化	30	元	2	3
有形文化財の収集・保管・展示等に係る調査研究件数	16件	－	－		17	11	12	13

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 新型コロナウィルス感染症流行に伴う規制が緩和されたため、未完了であった観心寺所蔵品（彫刻）の悉皆調査を終えることができ、年度計画通り各種報告書や展覧会の図録を刊行することができた。また、研究紀要である『學叢』には、最新の研究成果を論文として掲載し、質の高いものとすることができた。

【中期計画記載事項】
文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。

【中期計画に対する評価】 評定：Ａ	【判定根拠、課題と対応】 展覧会図録・研究紀要・各種報告書とも計画通り刊行できているだけでなく、中期計画策定時点では予定していなかった自主企画の特別展である『河内長野の霊地　観心寺と金剛寺―真言密教と南朝の遺産―』の図録を自前の予算で編集・発行までしたことから、Ａと評価する。研究紀要である『學叢』は、刊行後10年を経過した時点で全文をWEB掲載する作業を継続しており、引き続きインターネットも活用して研究成果の発信に努める。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1440C

中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究　④調査研究成果の公表

【年度計画】
・Ⅰ-1-(4)-④（奈良国立博物館）1)、2)

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　吉澤悟

【実績・成果】
（奈良国立博物館）
1)『鹿園雑集』第 25 号を刊行した。また、奈良国立博物館リポジトリにも掲載した。
2)『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』第 5 号を 3 月に刊行した。また、修理報告資料を整理しデータベース化に努めた。

【補足事項】
1）掲載内容は、作品研究 2 件、研究ノート 1 件、調査報告 1 件、研究報告 1 件であった。
2）掲載内容は、修理概要 13 件、関係銘文集 6 件、材質調査（木造）3 件であった。

『鹿園雜集』第 25 号

文化財修理報告書

【定量的評価】項目	4年度実績	目標値	評定	経年変化	30	元	2	3
有形文化財の収集・保管・展示等に係る調査研究件数	14	－	－		17	18	15	15

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 刊行物については、定期刊行物、報告書とも、当初予定していたものを全て刊行することができた。また、研究紀要については、当館研究員のみならず外部研究者による寄稿を掲載するなど、例年通り充実の内容できたため、年度計画の通り刊行できたと考え、B評価とした。

【中期計画記載事項】
文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 刊行物については、計画していた出版物を順調に刊行している。研究紀要については、継続的に調査研究の成果を掲載しており、刊行・ウェブサイトでの公開等も着実に実施できている。以上のことから、中期計画を遂行できているといえ評価をBとした。 5年度以降も、刊行物及びウェブサイトを通じて調査研究の成果を発信していく。

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1440D

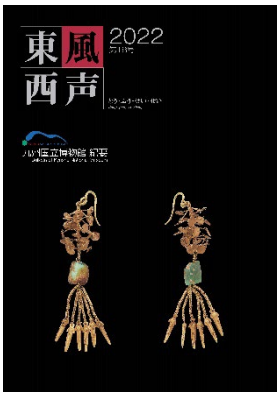
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表

【年度計画】
・Ⅰ-1-(4)-④（九州国立博物館）1)、2)

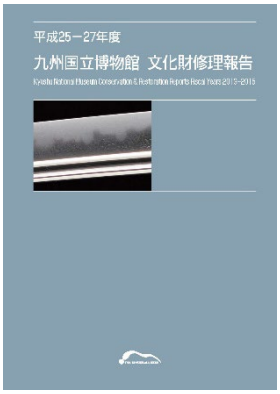
担当部課	学芸部企画課 学芸部博物館科学課	事業責任者	課長　伊藤信二 課長　木川りか

【実績・成果】
（九州国立博物館）
1)研究紀要『東風西声』第18号を刊行した（部数900部）。
2)『平成25-27年度　九州国立博物館 文化財修理報告』（発行部数600部）を編集、刊行した。

【補足事項】
（九州国立博物館）
1)『東風西声』第18号では9本の論文を掲載した。（うち当館職員執筆6本、外部研究者からの寄稿1本、外部研究者と当館職員の共同執筆2本）。
2)『平成25-27年度　九州国立博物館 文化財修理報告』（第5号）では、25年度～27年度に当館文化財保存修復施設で行った修理及び当館経費による館外での修理の記録を掲載した。対象文化財の基本的情報、施工会社、修理前後の写真、使用材料、修理で得られた知見等を公開し、今後の修理の参考とするだけでなく、学術研究、修理事業の普及啓発など多方面での活用に資する内容を公開した。報告書は、現状では紙媒体にとどまっているが、将来的にはインターネット上での公開も検討している。5年度以降も順次刊行を推進したい。



東風西声第 18 号表紙



平成 25-27 年度
文化財修理報告表紙

【定量的評価】項目	4年度実績	目標値	評定	経年変化	30	元	2	3
有形文化財の収集・保管・展示等に係る調査研究件数	10件	－	－		16	18	18	12

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 研究紀要や特別展、特集展示等の図録等を刊行し、調査研究の成果を公表した。また、文化財修理に係る記録を『九州国立博物館　文化財修理報告』第5号で報告し、年度計画を達成したことからＢ評定とした。

【中期計画記載事項】
文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って予定どおりに図録、研究紀要、報告書などを刊行し、調査研究の結果を広く公表することができた。引き続き、当館の調査研究等の取り組みを広く公開するために、計画的な刊行に努める。さらに、刊行物のリポジトリ公開についても、実現に向けて技術的、権利的な検討を引き続き継続する。以上の成果から、課題解決を図りつつ中期計画を円滑に推進しており、Ｂ評定とした。